

沖縄市文化財調査報告書 第28集

沖縄市の遺跡

—第2次分布調査報告書—

2002年3月

沖縄市教育委員会

沖縄市の遺跡

—第2次分布調査報告書—

あいさつ

本報告書は、平成12年度から翌13年度にかけて行われた沖縄市内遺跡詳細分布調査の成果を記したものです。あわせて、これまでに蓄積されてきた調査成果の紹介も行っております。

市内のどこにどんな遺跡や文化財があるのか、それらをとおした市の歴史や人々の暮らしの様子はどうだったのかが、よりよく理解できると思います。

ご承知のように、遺跡や文化財の調査成果は、先人の暮らしと文化の原点を探る生きた歴史資料としての重要な価値をもっており、その望ましい活用のあり方が、郷土愛を培う起点になるものと信じております。

本書が文化財保護活動の基礎資料として、また、皆様の生涯学習の一助として、家庭や学校、職場等において活用されることを祈念いたします。

2002年3月

沖縄市教育委員会
教育長 小渡良一

例言

- 1 本書は、沖縄市教育委員会が文化庁から補助を受けて実施した「沖縄市内遺跡詳細分布調査」の調査成果に関する報告書である。
- 2 当該分布調査は、沖縄市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 本報告書では、遺跡のほかに、近世の古島や各集落の主な文化財を取り扱った。文化財については、記念物の中でも人が関与したものをあつかった。従って、名勝地や動物・地質鉱物等は含まれていない。
- 4 本書で使用している地形図は、国土地理院が発行している 1/25000 地図と、沖縄市役所が発行している 1/2500 地図を複製転用したものである。
- 5 本書の執筆は以下の通りである。
 - 1・4～7 比嘉清和
 - 2・9 前田一舟
 - 3・8 宮城利旭編集は比嘉清和が担当した。
- 6 当該分布調査に関わる調査記録や採集遺物等は、沖縄市立郷土博物館にて保管している。
- 7 本書に示した遺跡の範囲等は、今後の調査等により変動する可能性があるので、周辺地域にて開発および住宅建築等を行う場合には、文化財保護法に基づく調整が必要である。

目 次

1	調査にいたる経緯	8
2	沖縄市の位置と環境	10
3	沖縄市の文化財行政	17
4	旧石器時代の遺跡	30
5	沖縄貝塚時代の遺跡	34
6	グスク時代の遺跡	46
7	近世以降の遺跡	58
8	近世前後の古島と村落移動	61
9	民俗の世界と文化財	68

序

1 調査にいたる経緯

本市における遺跡分布調査は昭和 56 年度に行われ『沖縄市の埋蔵文化財』として刊行された。以後 20 年が経過する中で、新たに発見された遺跡や記録保存調査による遺跡の消失などの事例が出てきた。そのため現時点での遺跡の現況を把握し、文化財保護のための基礎資料を整備する目的で調査を行った。

本調査は平成 12 年度から 13 年度にかけて実施された。実施に当たっては 80% の国庫補助を受けた。

調査組織

調査主体	沖縄市教育委員会	
調査責任	沖縄市教育委員会教育長	小渡良一
調査統括	郷土博物館長	仲本朝彦
	副館長兼文化財係長	宮城利旭
調査事務	学芸員	比嘉清和
調査員		比嘉清和
	沖縄市文化財調査審議会委員	比嘉賀盛
	臨時職員	前田一舟(平成 13 年度)
資料整理作業員	臨時職員	当真香
調査協力		

池原自治会・登川自治会・知花自治会・松本自治会・美里自治会・越来自治会・宮里自治会・安慶田自治会・照屋自治会・胡屋自治会・諸見里自治会・中の町自治会・山内自治会・与儀自治会・比屋根自治会・高原自治会・大里自治会・東桃原自治会・古謝自治会・越來字誌編集委員会・胡屋共有会・仲宗根共有会・上地郷友会・泡瀬復興期成会・佐渡山安光・与那嶺正栄・金城武雄・島袋キク・仲宗根健昌・仲宗根武雄

調査の方法

これまでの遺跡分布調査の成果を元に、遺跡の現況を確認していった。さらに、表面踏査により新たな遺跡の発見に努めた。また、最近では戦争遺跡に代表されるように遺跡の範囲が拡大

しつつあるため、市内の文化財のうち、人々の活動によって残されたものを広く把握するよう努めた。

報告書の編集にあたっては、沖縄市における遺跡の変遷がわかりやすいよう時代別に紹介していくことにした。

近世以降については、考古学上の時代区分概念がないため、時代を一括し、遺跡を中心にした構成とした。そして遺跡をより良く理解するため、「近世前後の古島と村落移動」「民俗の世界と文化財」という章立てをもうけた。近世以降は、史料や現在の人々の暮らしと遺跡とが深く関わってくるからである。そのため、例えば戦争遺跡などのように、遺跡だが「民俗の世界と文化財」に掲載されているものもある。

2 沖縄市の位置と環境

位置

沖縄本島（以下、沖縄島とする）は、日本の南西諸島のほぼ中間に位置する。唯一、日本のなかで沖縄県は、県全域が亜熱帯の気候に属し、1年の平均気温が21.5℃～23.8℃となっている。

沖縄島の中部に位置する沖縄市は、自然的な地質や地形、植生や土壌から北部と中南部の特徴をもつと考えられている。



図1 沖縄と沖縄市の位置



図2 沖縄島の地質構造図

地質

沖縄島は、琉球列島のなかでも最大の島であり、3つの地層の特徴がある。その特徴は、島を境に東シナ海から太平洋にかけて、古い順に本部累帯、国頭累帯、島尻累帯と区別される。

本部累帯の範囲は、国頭村の辺土から宜名真を通り、それから海岸を越えて、本部半島の名護市稲嶺から名護市市街地へまたがる沖縄島の西北側をさす。その境界を小西健二は「辺土構造線」と呼んだ。本部半島を中心に分布する本部累帯は、古生代(約3億年～2億4500万年前)から中生代(約2億4500万年前～6640万年前)に堆積した地層であり、主に石灰岩、チャート、砂岩、頁岩、緑色岩などの特徴があげられる。そのなかでも、とくに地理学者が注目する本部町の「カルスト残丘」の山々は、久米島の大原や北谷町や沖縄市などでみられるカルスト残丘の森と違い、尖がりの山々がそびえたつ風景を残している。

私たちに身近な本部累帯の岩石は、おそらく石灰岩を細かくしたバラス(小石)であろう。そのバラスは、コンクリート建築の材料によく利用されている。また、先史時代の生活でも本部累帯の岩石は、石炭やカッターの材料となっており、そのなかでもチャート製の石器が沖縄貝塚時代中期の遺跡から出土する。当時の貝塚人は岩石の特質を熟知していたようだ。

国頭累帯は、北側の本部累帯と南側の島尻累帯をもって境される。とくに島尻累帯の境界は、北谷町の砂辺より具志川市の天願をはしる断層であり、小西健二によって「天願構造線」と名づけられた。中生代(約2億4500万年前～6640万年前)から新生代(約6640万年～現在)に堆積した国頭累帯は、西側に広く露出する名護層と東側に分布する嘉陽層を特徴にもつ。

名護層は、複雑に褶曲した泥質千枚岩や緑色岩などが目立つ。とくに車で思納村から名護市へ北上すると西海岸には、黒い岩がゴツゴツとみえはじめてくる。それが名護層の岩石である。

嘉陽層は、砂岩、頁岩、礫岩などに特色がある。ヤンバルの川辺をみた島尻累帯の村びとたちは、自分たちのふるさとにある川とちがう景色を目にし、驚きを隠せないだろう。それは島尻累帯とヤンバルでみられる川辺や川底に溜まっている土砂が異なり、太陽の光でキラキラと反射する礫岩や川砂はとても新鮮な風景を味わえる。ただし、その岩石は伊計島や宮城島や藪地島などの海岸でもみられる。石灰岩の岩石を見慣れた子どもたちは、不思議そうに堅い石（嘉陽層の亜円礫）を眺めたもので、俗に「ヤンバルイシ」とも言っていた体験を記憶する。その石を手にとった子どもたちは、その平たい石を海面へ投げこんだり、形の良いものを水槽のレイアウトに利用したり、貝を割る道具として使っていた。

嘉陽層の岩石は、沖縄島中南部の先史時代の遺跡にも石器の遺物として多く出土している。石器の種類は、たたき石、石斧、すり石などである。当時の貝塚人たちは、生活の用途に合わせて石を加工したのであろう。その風景は、海岸などに残されているのである。

島尻累帯は、北側の国頭累帯の天願構造線（不整合）をもって境され、新生代第三紀（約6640万年～現在）に堆積した地層が分布する。その地層は厚く、浅海ないし半深海相の純海域で堆積した青灰色シルト質泥岩であると考えられ、地層中に有孔虫、貝、炭化木などの化石を多産する。よく村びとは、その泥岩を「クチャ」とか「クチャヌフニ（泥の塊）」と呼んでいる。

沖縄市の地層は、国頭累帯（中生代）と島尻累帯（新生代）が確認されており、その特徴は沖縄市の隣接する嘉手納町・北谷町・石川市・具志川市でも同様である。

天願川の上流の池原と登川から嶽山原の地域を含む北側では、千枚岩がみられる。ちなみに沖縄本島中部以北の地層の特徴は、八重島の一部でもある。それは嘉陽層の亜円礫が堆積した地層である。

与儀と古謝を含む中城湾沿いの低地から沖縄市役所一帯では、クチャ（泥岩）やニービ（砂岩）が広がっており、これらの地層の上を覆うようにして琉球石灰岩が重なる。さらに琉球石灰岩の地層の上には、砂・礫の赤褐色土が堆積する。その泥岩と琉球石灰岩の間には、多くの湧水があり、そこには村の重要な生活の水源地であったり、搾所であったり、貝塚や遺跡があったり、苗代田がつくられたりする。

このように、国頭累帯と島尻累帯の境界付近に位置する沖縄市は、北側に千枚岩の地域と南側に泥岩や砂岩の地域をもつ。

地形

沖縄市の地質の特徴は、地形にもあらわれている。

沖縄市の東側は海岸平野が発達し、背後の丘陵地はゆるやかな地形を形成している。そこが沖縄本島中部の東と西を分ける分水嶺となっている。この嶺は、かつて起きた陥没の影響により、中城湾が形成されたと考えられている。航路をつくる際に与那城町の金武湾では、海底から島尻累帯の泥岩や貝の化石が掘り出された。その理由から中城湾の海底でも同じ地層をもつと考えられる。

17世紀につくられた正保の琉球国絵図の『琉球國悪鬼納嶋』をみると、現在の古謝から与儀までの低地は、当時の風景を保っていない。その絵図には「あせ嶋」「あふ嶋」の地名がみえ、泡瀬半島はもともと離れ小島で「ユニ」と呼ばれる砂州が南東側にのびていたようだ。また、高原には「タクトウイガマ」（蛸とりをする洞穴）と呼ばれる地名があった。現在は、国道329号線沿いになっている。これらの沿岸は、現在と違った広大な干潟を保有していた。

沖縄市の分水嶺の西側をゆくと、胡屋、仲宗根、八重島、越來、美里、知花などの村々がみえてくる。それらの地域は、琉球石灰岩の森や山が多く、地理学でいうカルスト残丘の景観がみられる。この村々の地名に注目すると、当て字に「川」「田」の接尾語がつくのは、地形の特徴をとらえた興味深い地名であろう。雨によって浸食されたカルスト残丘の地下には、かなりの水源があるようだ。それは、村のなかにイジュン（湧水）が多い事でも位置づけられる。かつて、室川・八重島・知花の貝塚人たちは、このような山や崖の割れ目から水源を求めたのであろう。

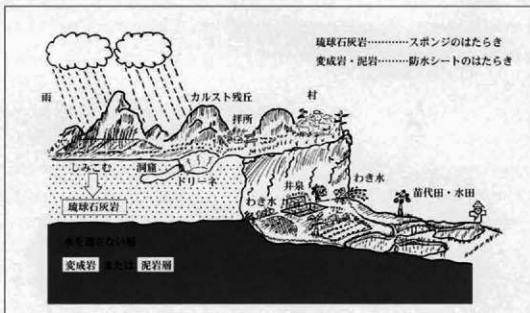


図3 カルスト残丘と湧水のしくみ

沖縄市の村々にとってカルスト残丘の森と山は、重要な聖地の拝所となっている。それを村びとたちは、「シー」とか「グシク」という接尾語をつけて呼んでいる。さらに森と山は、村を護る重要な場所でもあるようだ。『おもろさうし』巻二(1613)の唄には、「知花の村の後の霊嶽に、我は神に祈らむ、神は我を守り給へ」とある。その嶽と呼ばれる森と山には、村の神が鎮座していたのであろう。グシクなる森は、いったい誰が築いたのであろうか。『おもろさうし』巻二の「うらおそいおもろのふし」にアマミキヨと呼ばれる民たちがグスクを築いたと唄われている。その民は、沖縄という地域に大きな影響を与えたようだ。

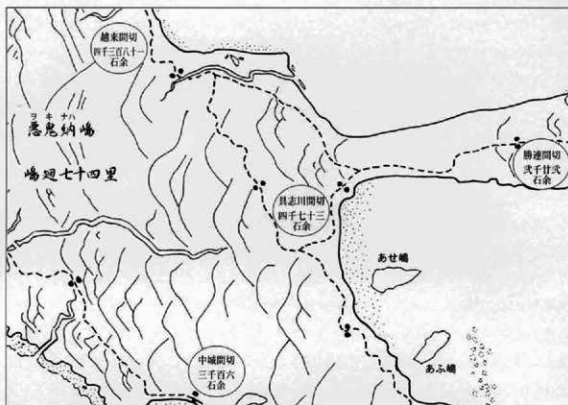
沖縄市では、比謝川をこえてさらに北上すると標高が高くなっていく。沖縄市と石川市と恩納村の境界には、「タキヤマバル(嶽山原)」と呼ばれ、沖縄市でもっとも高い山(標高201m)があり、その嶽山原の北側からヤンバル特有の山脈がそびえたつ。折口信夫は、「やんばらあ」という語源を「旧日本の祖先が鈴鹿足柄の向ふに屯してゐる住民に感じた如き、恐れとさげすみとを込めて、称へ出した言葉に違ひなからう」と考えたが、沖縄市の北限にタキヤマバルという地名があるのは興味深い。首里王府の次に編纂された『おもろさうし』巻二の「中城越来のおもろ」には、「いけざる」の地名がみえる。さらに『おもろさうし』のなかにハル(原)のつく地名は、池原が北限である。それは、池原を「イチバル」と呼ぶ言葉からも重要な意味をもつ。イチの意味は池でなく、遠く離れた場所をさす。つまり、首里王府にとって池原から北側は、「恐れとさげすみ」の地域をさしたと考えられる。

土壌と植生

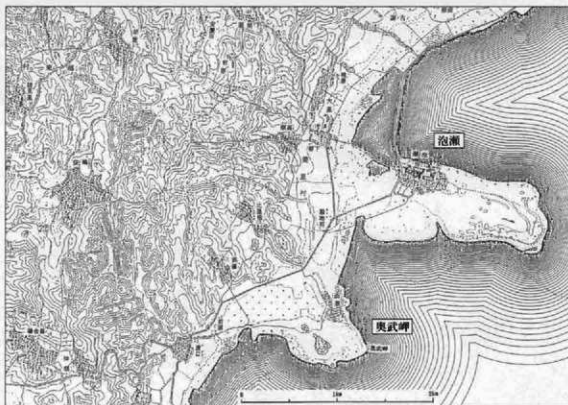
土壌の元となる地質や岩石は、種類や色の違いにより異なる。沖縄市では「国頭マージ」「島尻マージ」「ジャーガル」「ウジマー」などが分布する。これらの土壌は、植生にも強い影響を及ぼしている。

国頭累帯に由来する国頭マージは、千枚岩等が風化した酸性の土壌であり、ブナ科のイタジイ・ツバキ科のイジュ・ヤコブコウジ科のシマイズセンリョウなどの照葉樹林が発達している。

白川から池原・登川の森では、ヤンバルのような景観を生みだしている。その森林のなかで、クロイワツクツクが鳴く風景は10～11月ごろである。それをヤンバル地域で体験した島尻で暮らす村びとたちは、度々驚かされている。また、10～12月ごろにブナ科のイタジイ・マテバシイ・オキナワウラジロガシなどは多くの実をつけ、季節感を知らせてくれる。人間だけでなく、その落下した実をリュウキュウイノシシやケナガネズミなどがよく食べる。沖縄貝塚時代前・中・後期(約5000～2000年前の間)の室川貝塚ではリュウキュウイノシシ・ケナガネズミ・リュウキュウヤマガメなどの骨が出土したが、現在の沖縄市ではそれらの動物は棲息していない。しかしな



正保琉球国絵図



大正地図 (参謀本部陸地測量部) 25,000分の1

図4 地図からみた沖縄市の地形の変化

がら、戦前の登川付近ではイノシシをみかけたと言われている。この池原や登川の付近では貝塚時代の遺跡はみつからないが、グスク時代(約700年前)に相当する石城原遺跡(1例)だけは確認されている。この地域は、17世紀以降の開拓によって村落が形成されたようだ。

とくに知花の以北から石川市一带などは、リュウキュウマツの森林が多い。それは、どのような歴史を記録しているのだろうか。

島尻累帯に由来する島尻マーヅは、琉球石灰岩が風化した土壌であるとか、大陸からの季節風(黄砂)も含めて周辺の土砂が風化した土壌であると考えられている。その土層は浅く、保水力が弱く、早魃の影響を受けやすい。そのために大里・仲宗根・登川・池原などの「雨乞祭」や上地の旗頭の「五風十雨」は、土壌の特質を物語っている。

国頭累帯の環境で暮らす池原・登川・知花などの村びとは、島尻累帯の古謝から与儀までの土壌を実見して驚いたようだ。その海岸平野の一带は、クチャ(泥灰岩)の風化によって生成された土壌がみられる。それをジャーガルと呼び、県内で最も肥沃な土壌であり、保水力が著しく強く、比較的養分が多いと知られている。アルカリ性でしかもカルシウムを多く含むクチャは、髪のにややかさを保つという人気でシャンプーの代用として使われていた。おそらく、古謝の地名はクチャの語源から転訛したと考えられる。

北中城村の渡口を含む沖縄市の大里・与儀・胡屋・古謝の一部などでは、沖縄本島中南部の特徴をもつニービ(砂岩)がみられる。その風化した土壌はウジマーと呼ばれる。とくに堆積層は防空壕や掘り抜き墓を採用するが、ニービヌフニ(骨のような硬砂岩)は加工研磨して碑文や拝所の神の象徴に多用されている。

これらの島尻マーヅの森は、トウダイグサ科のアカギ、ブナ科のアマミアラカシ、クスノ科のヤブニッケイ、常緑広葉樹林の特徴をもち、ホルトノキ科のホルトノキなどの高木、サトイモ科のクワズイモ・ムサシアブミ、カニクサ科のカニクサなどが林床にみられる。とくにアコウは沖縄市の代表的な植物のひとつである。それは、沖縄市の方言でウスクギーと称されているが、『琉球国由来記』(1713)の沖縄市関連をみると、「オソクツカサノオイベ」という神名のついた拝所がある。その「オソク」はウスクの意で、拝所の周辺にはアコウの樹木が生えていたのであろう。

沖縄の植生をみる場合には、リュウキュウマツとイタジイとイジュの順序で古さを求められる。リュウキュウマツの育成は早く、かつて何らかの伐採や開発が行われたであろうと推測できる。

3 沖縄市の文化財行政

1. 開発と遺跡の係わり

本市の遺跡は、消滅したのも含めて28件確認されている。遺跡の確認は、仲宗根貝塚が戦前(昭和8年頃)に行われ、残りは戦後である。遺跡の保存は、戦後～1990年代の諸開発によって多大な影響を被り、現状も様々でその中には消滅した遺跡もある。このような背景の下に遺跡の発掘調査が行われてきた経緯がある。発掘調査の概要は各遺跡の説明に委ね、本項では大まかに述べる。以下では、発掘調査の動向、開発と遺跡の係わりを紹介する。

1) 発掘調査の動向

1960年代: 仲宗根貝塚、本市最初の発掘調査

1980年代: 竹下遺跡・知花遺跡群・白川屋取集落跡・越来グシク跡等の発掘調査

1990年代: 津嘉山森遺跡・馬上原遺跡・室川貝塚東地区

室川貝塚崖下地区・八重島貝塚崖上等の発掘調査

2) 開発と遺跡の係わり

開発名	遺跡名(開発年代/保存状況)
基地建設	越来グシク(戦前、1945年以前/部分的に残存?)
	仲宗根貝塚(1950年代前後/部分的に残存?)
	馬上原遺跡(1950年代前後/ " " ?)
	越来グシク(1950年代前後/部分的に残存?)
	白川屋取集落跡(1980年代前半/僅かに残存)
コーラル採掘	知花遺跡群(1950年代前後/僅かに残存)
	明道遺跡(" " / " ")
都市区画整備	馬上原遺跡(1960年代前後/ " ")
ホテル建設計画	仲宗根貝塚(1960年代前後/部分的に残存?)
	津嘉山森遺跡(1970年代頃/ " ")
室川市営団地建設	室川貝塚(1960年代頃/部分的に残存)
学校建設	明道遺跡(1970年代後半/消滅)
沖縄自動車道建設	竹下遺跡(1980年代前半/消滅)
	知花遺跡群(" " / " ")

レジャーランド建設	津嘉山森遺跡(1990年代前半／僅かに残存)
沖縄市総合庁舎建設	馬上原遺跡(1990年代前半／消滅)
	室川貝塚東地区(1990年代前半／消滅)
	室川貝塚崖下地区(1990年代前半／消滅)
	室川貝塚中心部(1990年代前半／保存及び歴史公園整備)
個人住宅建設	越来グシク発掘調査(1980年代後半／僅かに残存)
	八重島貝塚崖上(1990年代前半／部分的に残存)

*開発時期は、年度が分かるものもあるが殆どは不明なので、大まかな年代を表示。

2. 文化財行政の動向

本項では、文化財行政の歩みを述べる。紹介の年度は、溯って確認が可能な昭和53年度～平成13年度までとする。作成は、係わった関係者からの聞き取り、文化財調査報告書、教育年報、文化財事業の年度綴等を参考に行った。以下では、最初は事務的な事に触れ、後半は各年度の主な業務の動向を紹介する。

1) 事務的な動向

●文化財保護法関係の制定

「沖縄市文化財保護条例」「沖縄市文化財調査審議会規則」(昭和50年度制定)

「沖縄市文化財保護条例施行規則」(昭和52年度制定)

●主管課

昭和53～57年度:社会教育課

昭和58～62年度:文化課

昭和63～現在:沖縄市立郷土博物館

●体制

昭和53年度:文化財担当は社会教育主事等が兼務

昭和54年度:文化振興と文化財を兼務する担当職員を採用

昭和55年度:文化財の担当職員を採用(文化財業務と沖縄市立郷土博物館の開館準備)

平成11年度:文化財の学芸員を採用

2) 業務の動向

●主な調査

①埋蔵文化財調査 ②民俗調査 ③開発に伴う調査 ④記念物調査(植物・野鳥・地質)

⑤建造物調査

●文化財指定(史跡・民俗文化財)

●民俗・考古・建造物・記念物等の報告書の発刊

●普及活動

アジマー展、中学校の総合学習との連携、文化財めぐり、その他

●文化財維持管理及び環境整備

文化財清掃、室川貝塚「歴史公園」整備、ふるさと園、説明板及び標柱等

●文化財パトロール

*業務としては、大まかに上記のように区分される。以下では、各年度の主な動向を述べる。

《昭和53年度》

①民具資料収集

②室川貝塚範囲確認調査

③文化財指定 泡瀬の京太郎(民俗文化財)

●『沖縄市の文化財第1集』昭和54年

●文化財調査報告書第1集『室川貝塚』昭和54年3月(1979年)

《昭和54年度》

①鬼大城の墓調査

②尚宣威王の墓調査

③第1回民俗資料展の開催/会場:琉米親善センター

④内喜納登窯跡の覆屋根保護

●『第1回民俗資料展要項』

●文化財調査報告書第2集『鬼大城の墓』昭和55年3月(1980年)

●文化財調査報告書第3集『尚宣威王の墓』昭和55年3月(1980年)

《昭和55年度》

①市内集落の文化財分布基礎調査

②文化財指定 鬼大城の墓 カフンジャー橋(2件・記念物)

《昭和56年度》

- ① 沖縄市市内遺跡詳細分布調査(第一次)
- ② # # ハジチ調査
- ③ 王府おもろ五曲七節の収録調査
- 文化財調査報告書第4集『沖縄市の埋蔵文化財』昭和57年3月(1982年)

《昭和57年度》

- ① 「宅地分譲住宅計画」に伴う室川貝塚周辺(旧パレス会館東側の斜面)の埋蔵文化財確認調査
- 文化財調査報告書第5集『王府おもろ』五曲七節 昭和58年3月(1983年)

《昭和58年度》

- ▲ 主管課が社会教育課から文化課へ移行、昭和62年度まで同一組織。
- ① 山内谷の植物記録保存調査
- ② 「室川市営団地 集会所建設計画」に伴う室川貝塚本体南側の埋蔵文化財確認調査
- 『沖縄市史跡めぐり』昭和58年

《昭和59年度》

- ① 下仲宗根門中の墓調査
- ② 白川屋取集落跡の記録保存発掘調査
- ③ 白川屋取集落跡の植物記録保存調査
- ④ 竹下丘陵の植物記録保存調査
- ⑤ 文化財パトロール
- ⑥ 文化財清掃(沖縄市シルバー人材センターへ委託)
- 文化財調査報告書第6集『下仲宗根門中の墓調査』昭和60年3月(1985年)
- 文化財調査報告書第7集『白川屋取集落』昭和60年3月(1985年)

《昭和60年度》

- ① 「個人住宅建設」に伴う越来グシク跡の記録保存発掘調査
- ② キャンプヘーグ跡の植物調査
- ③ 沖縄市立ふるさと園移築事業
- ④ 文化財パトロール

⑤文化財清掃

- 自然調査報告書第1集『山内谷の植物』昭和61年3月(1985年)

《昭和61年度》

①越来グシク跡の範囲確認調査

- ②「沖縄市総合庁舎建設計画」に伴う旧沖縄市役所庁舎一帯の埋蔵文化財確認調査

③市内の古民家分布調査

④沖縄市立ふるさと園移築事業

⑤文化財パトロール

⑥文化財清掃

- 文化財調査報告書第8集『針突-美里地区-』昭和62年3月(1987年)

- 文化財調査報告書第9集『ふるさと園復元概報』昭和62年3月(1987年)

- 文化財調査報告書第10集『泡瀬の京太郎』昭和62年3月(1987年)

《昭和62年度》

①「瑞慶山ダム改修工事」に伴う倉敷集落跡確認の分布調査

②文化財パトロール

- ③文化財の説明板・標柱・道標等の設置。その後平成12年度迄随時、立て替え・新設・修繕等の維持管理を実施

④沖縄市立ふるさと園管理(沖縄こどもの国へ委託)

⑤文化財清掃

- 文化財調査報告書第11集『越来城』昭和63年3月(1988年)

《昭和63年度》

- ▲主管課が文化課から博物館へ移行、平成13年度現在に至る。

①「個人住宅建設」に伴う満喜世遺跡周辺の埋蔵文化財確認調査

②「沖縄市総合庁舎建設」に伴う室川貝塚本体周辺の範囲確認調査

③「ゴルフレンジ建設」に伴う津嘉山森遺跡の範囲確認調査及び古墓の記録保存調査

④「ゴルフレンジ建設」に伴う津嘉山森遺跡一帯の植物記録保存調査

⑤比屋根湿地の野鳥観察

⑥文化財パトロール

⑦沖縄市立ふるさと園管理

⑧文化財清掃

●自然調査報告書第2集『竹下丘陵の植物』昭和63年3月(1989年)

《平成元年度》

①「沖縄市総合庁舎建設」に伴う室川貝塚本体周辺の範囲確認調査

②「沖縄市総合庁舎建設」に伴う旧バレス会館一帯の埋蔵文化財確認調査

③「沖縄市総合庁舎建設」に伴う室川貝塚東地区の記録保存発掘調査

④「沖縄市総合庁舎建設」に伴う室川貝塚崖下地区の記録保存発掘調査

⑤「個人住宅建設」に伴う八重島貝塚崖上の記録保存発掘調査

⑥「沖縄市総合庁舎建設」に伴う馬上原遺跡(室川貝塚崖上)の記録保存発掘調査

⑦「沖縄市総合庁舎建設」に伴う室川貝塚一帯の植物記録保存調査

⑧わらべ歌調査(登川・越來・宮里・与儀・古謝)

⑨旧美里地区の民話調査

⑩市内緑地帯生物調査

⑪比屋根湿地の野鳥観察

⑫文化財パトロール

⑬沖縄市立ふるさと園管理

⑭文化財清掃

《平成2年度》

①「沖縄市総合庁舎建設計画」に伴う室川貝塚崖下地区の記録保存発掘調査

②「沖縄市総合庁舎建設計画」に伴う馬上原遺跡(室川貝塚崖上)の記録保存発掘調査

③旧コザ地区の民話調査

④比屋根湿地の野鳥観察

⑤池原の美池自練西方一帯の植物調査

⑥文化財パトロール

⑦沖縄市立ふるさと園管理

⑧文化財清掃

●文化財調査報告書第12集『針突-コザ地区-』平成3年1月(1991年)

《平成3年度》

- ①博物館常設展示の様式変更に伴う各種調査及び展示作業等の応援
- ②文化財台帳に伴う民俗調査(6件)
- ③民話補足調査
- ④比屋根湿地の野鳥観察
- ⑤文化財パトロール
- ⑥沖縄市立ふるさと園管理
- ⑦文化財清掃
 - 文化財調査報告書第13集『津嘉山森遺跡調査概報』平成4年3月(1992年)
 - 文化財調査報告書第14集『池原・登川わらべ歌』平成4年3月(1992年)
 - 文化財調査報告書第15集『沖縄市文化財一覽及び分布図』平成4年3月(1992年)
 - 自然調査報告書第3集『キャンプヘーグ跡の植物』平成4年1月(1992年)

《平成4年度》

- ①文化財台帳に伴う民俗調査(4件)
- ②カフンジャー橋の発掘及び実測調査
- ③わらべ歌調査(高原・山内・泡瀬第1・3)
- ④比屋根湿地の野鳥観察
- ⑤第1回「アジマー展」(開催地:美里自治会/自治会と共催の文化財移動展)
- ⑥文化財パトロール
- ⑦沖縄市立ふるさと園管理
- ⑧文化財清掃
 - 文化財調査報告書第16集『カフンジャー橋』平成5年3月(1993年)
 - 文化財調査報告書第17集『室川貝塚』平成5年3月(1993年)
 - 沖縄市文化財啓発資料第1集『文化財めぐり』平成5年3月(1993年)

《平成5年度》

- ①歴史公園(室川貝塚)整備事業(事業費及び工事の主管は総合庁舎建設室、協議等を行って実施)
- ②「嘉手納飛行場基地内の埋設ケーブル工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ③「嘉手納飛行場基地内の施設立て替え」に伴う埋蔵文化財確認調査

- ④文化財指定に伴う実測及び聞き取り調査(3件)
- ⑤文化財台帳に伴う民俗調査(3件)
- ⑥わらべ歌調査(比屋根・泡瀬・胡屋・仲宗根)
- ⑦美里ジュリグワー松移植に伴う記録保存調査
- ⑧比屋根湿地の野鳥観察
- ⑨第2回「アジマー展」(開催地:池原自治会/自治会と共催の文化財移動展)
- ⑩文化財パトロール
- ⑪沖縄市立ふるさと園管理
- ⑫文化財清掃
- 文化財調査報告書第18集『与儀・比屋根わらべ歌』平成5年11月(1993年)
- 沖縄市文化財啓発資料第2集『むかしばなし』平成6年3月(1994年)

《平成6年度》

- ①文化財指定に伴う実測調査(5件)
- ②「個人住宅建設」に伴う知花焼き窯跡の埋蔵文化財確認調査
- ③わらべ歌調査(胡屋・仲宗根)
- ④文化財台帳に伴う民俗調査(4件)
- ⑤比屋根湿地の野鳥観察
- ⑥「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査(3件)
- ⑦第3回「アジマー展」(開催地:胡屋自治会/自治会と共催の文化財移動展)
- ⑧文化財移動展(2件)①開催地:泡瀬文化祭り②開催地:美里小学校PTA文化祭
- ⑨文化財パトロール
- ⑩沖縄市立ふるさと園管理
- ⑪文化財清掃
- ⑫文化財指定 美里セークガー 美里ヒージャガー(2件・記念物)美里の倉(民俗文化財)
- 文化財調査報告書第19集『池原・登川のわらべ歌』平成7年3月(1995年)
- 沖縄市文化財啓発資料第3集『古代の沖縄市』平成7年3月(1995年)

《平成7年度》

- ①「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査(2件)
- ②「嘉手納飛行場基地内の旧日本軍格納庫跡西側一帯の施設建設工事」に伴う埋蔵文化財確認

調査

③「嘉手納飛行場基地内のステアリーハイツ小学校北側一帯の施設建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査

④比屋根湿地の野鳥観察

⑤第4回「アジマー展」(開催地:城前自治会/自治会と共催の文化財移動展)

⑥文化財移動展(1件)①沖縄銀行コザ十字路支店

⑦文化財パトロール

⑧沖縄市立ふるさと園管理

⑨文化財清掃

《平成8年度》

①「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査(3件)

②「嘉手納飛行場基地内の管理棟建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査

③「泡瀬通信隊の埋設物建設工事」に伴う文化財分布調査

④比屋根湿地の野鳥観察

⑤第5回「アジマー展」ふるさと園開園10周年記念・パーク作り(開催地:ふるさと園)

⑥越来中学校3年生の選択教科(文化財体験学習)

⑦文化財パトロール

⑧沖縄市立ふるさと園管理

⑨文化財清掃

⑩文化財指定 室川井 室川貝塚 奉安殿 忠魂碑(4件・記念物)

●文化財調査報告書第20集『室川貝塚 崖下地区』平成9年1月(1997年)

●沖縄市文化財啓発資料第4集『文化財めぐり』平成9年3月(1997年)

《平成9年度》

①「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査

②文化財台帳に伴う民俗調査(3件)

③胡屋・仲宗根民俗地図作成に伴う分布及び聞き取り調査

④「室川市営団地建設」に伴う埋蔵文化財確認調査

⑤比屋根湿地の野鳥観察

⑥第6回「アジマー展」パーク作り(開催地:ふるさと園)

- ⑦越来中学校3年生の選択教科(文化財体験学習)
- ⑧文化財パトロール
- ⑨沖縄市立ふるさと園管理
- ⑩文化財清掃
- 文化財調査報告書第21集『池原のウステーク』平成10年3月(1998年)

《平成10年度》

- ①花織文化財指定に伴う聞き取り調査
- ②「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査(2件)
- ③「嘉手納飛行場基地内のいしぐむやー橋一帯の建物建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ④「嘉手納飛行場基地内のいしぐむやー橋一帯の建物建設工事」に伴う古墓分布調査
- ⑤「嘉手納飛行場基地内の滑走路南側一帯の建物建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ⑥「泡瀬通信隊の埋設物建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ⑦「仲宗根共友会館建設」に伴う仲宗根貝塚範囲確認調査
- ⑧「八重島貝塚一帯の畑不発弾確認の磁気探査」に伴う範囲確認調査
- ⑨比屋根湿地の野鳥観察
- ⑩第7回「アジマー展」バーキ作り(開催地:ふるさと園)
- ⑪文化財パトロール
- ⑫沖縄市立ふるさと園管理
- ⑬文化財清掃

《平成11年度》

- ①「キャンプズケラン基地返還後の跡地利用」に伴う文化財分布調査
- ②「キャンプシールズ基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査
- ③「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う文化財分布調査(4件)
- ④「嘉手納飛行場基地内の滑走路南側一帯の建物立て替え工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ⑤「室川市営団地建設」に伴う埋蔵文化財確認調査(2件)
- ⑥石垣市登野城小学校の「奉安殿」予備調査
- ⑦比屋根湿地の野鳥観察
- ⑧第8回「アジマー展」(開催地:古謝自治会/自治会と共催の文化財移動展)
- ⑨文化財パトロール

⑩沖縄市立ふるさと園管理

⑪文化財清掃

- 文化財調査報告書第22集『馬上原遺跡』平成12年3月(2000年)
- 文化財調査報告書第23集『むかしばなし』平成12年3月(2000年)
- 文化財調査報告書第24集『沖縄市文化財一覧及び分布図(改訂版)』平成12年3月(2000年)

《平成12年度》

- ①市内遺跡詳細分布調査(文化庁補助事業/第二次)
- ②「嘉手納飛行場基地内の建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ③「満喜世遺跡擁壁工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ④越來西森周辺の古墓分布調査
- ⑤「上地アジマー展」に伴う竹細工聞き取り調査
- ⑥宮古島「魚垣」調査
- ⑦比屋根湿地の野鳥観察
- ⑧文化財パトロール
- ⑨沖縄市立ふるさと園管理
- ⑩文化財清掃
- ⑪第9回「アジマー展」パーキ作り(開催地:上地郷友会・中の町自治会との合同)
- ⑫文化財指定 知花花織馬乗上着・知花花織馬乗袴・知花花織ウツチャキ(民俗文化財)
- 文化財調査報告書第25集『越來・美里のわらべ歌』平成13年3月(2001年)

《平成13年度》

- ①市内遺跡詳細分布補足調査(文化庁補助事業)
- ②「嘉手納飛行場基地内の持校宿舍建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査
- ③「嘉手納飛行場基地内の家族住宅建設工事」に伴う埋蔵文化財確認調査(2件)
- ④古木調査
- ⑤市内拝所の植物調査
- ⑥比屋根湿地の野鳥観察
- ⑦文化財パトロール
- ⑧沖縄市立ふるさと園管理

⑨文化財清掃

⑩ふるさと園修繕 高倉差茅(平成4年度以降4回実施)

⑪ " " 畜舎瓦漆喰塗り

⑫ " " アサギ " "

⑬遺跡及び拝所等への説明板設置45件(内訳:当教育委員会30件、他機関15件平成14年
2月1日現在)

⑭ " " 標柱設置33件(平成14年2月1日現在)

⑮文化財指定53件(内訳:市指定12件・県指定32件・国指定9件)

●文化財調査報告書第26集『わかしばなしⅠ』平成14年3月(2002年)

●文化財調査報告書第27集『わかしばなしⅡ』平成14年3月(2002年)

●文化財調査報告書第28集『沖縄市の遺跡-第2次分布調査報告書-』平成14年3月
(2002年)

●文化財調査報告書第29集『山内・諸見里のわらべ歌』平成14年3月(2002年)

旧石器時代

4 旧石器時代の遺跡

旧石器時代とは、今からおよそ1万年以上前、氷河期の終わりに相当する時代のことをいう。気温は現在よりも7～8度低く、少し肌寒くらいであった。

沖縄は石灰岩土壌のため人骨が化石化しやすく、他府県に比べて多くの洪積世人骨が発見されている。那覇市の山下町洞人(約32000年前)や具志頭村の港川人(約18000年前)などがその代表としてあげられる。

最近の研究では約2万年前頃に大陸と陸続きになったことが明らかになっており、その頃に舟や徒歩で沖縄へ渡ってきたと考えられている。

しかし、この時代の人々が使用した道具がまだ発見されていないため、具体的にどのような生活を行っていたかは分かっていない。

1 桃原洞穴遺跡





沖縄市南桃原と北谷町との境界上に位置する。入口は沖縄市側にあり、洞内の大部分は北谷町に属する。一帯は小規模なドリーネとなっており、その陥没により洞穴が形成されたと考えられる。標高は 100m である。本洞穴は支洞の一部で、主洞は南北に走行し、洞穴の南側を流れる川へ向かって流れていると推定される。

1966 年に洞穴内より成人男性の頭骨が発見され、約 1 万年前の更新世人骨であると推定されてきた。近年では、更新世人骨ではなく、むしろ中世・近世の人骨ではないかといわれている。

沖縄貝塚時代

5 沖縄貝塚時代の遺跡

沖縄の先史時代は沖縄貝塚時代と呼ばれる。この理由として、本土の縄文文化の影響を受けつつも独自の発展を遂げたことと、弥生文化を特徴づける稲作が認められないことなどが挙げられる。

沖縄貝塚時代は早・前・中・後の四期に分けられ、貝塚時代早期が縄文時代早期～中期にあたり、貝塚時代前・中期がそれぞれ縄文時代後・晩期に相当する。貝塚時代後期は弥生～平安時代に相当する。近年では、貝塚時代早・前・中期を縄文時代と呼ぶようになりつつある。

貝塚時代早期は、まだ沖縄の人口も少なかったようで遺跡数はあまり多くない。

貝塚時代前期になると遺跡数も増え、沖縄独自の土器文化が発達する。そして蝶型骨器にみられるような精神文化も発達した。

貝塚時代中期になると人々は石灰岩台地へと移動し、貝塚の形成が少なくなる。

貝塚時代後期には、県内の西海岸を中心に、主に九州と貝交易を行うようになる。市内では室川貝塚から弥生土器片が出土するのみである。また後期後半には内陸部の洞穴などで生活するようになり、この時期になって市内に再び遺跡が出現する。

- 2 津嘉山森遺跡
- 3 室川貝塚
- 4 仲宗根貝塚
- 5 馬上原遺跡
- 6 八重島貝塚
- 7 知花遺跡
- 8 明道遺跡
- 9 富里川原貝塚
- 10 八重島茶城原遺物散布地
- 11 泡瀬地先遺物散布地
- 12 那志原遺跡
- 13 上地長次原遺跡
- 14 インジグシク





仲宗根貝塚および馬上原遺跡の立地する石灰岩台地は、北側で落差 10m の崖となり、その先は緩やかな斜面となっている。その緩斜面に室川貝塚が立地する。標高は 100m 前後である。1974 年に発見されて以来、沖縄国際大学により 5 次にわたる発掘調査が行われ、沖縄の先史時代の解明に大きな成果をもたらした。

主な調査成果として次のことがあげられる。当時としては最古であった室川下層式土器が出土したことや、室川・室川上層式の設定、伊波・萩堂式土器の前後関係が判明したこと、石簾の所属年代がはっきりしたことなどである。螺形骨製品も多数出土している。

1989 年より、沖縄市役所庁舎の建設に伴い貝塚の取り扱いについて調整・協議が行われた。その中で、沖縄国際大学が調査した地点を保存し、その周囲を記録保存調査することになった。

歴史公園として整備された室川貝塚は、市指定文化財に指定されている。

なお、室川貝塚・仲宗根貝塚・馬上原遺跡は、その所属年代や遺物内容などから、広範囲に展開したひとつの遺跡であると考えられている。





沖縄市役所の南東にある仲宗根御願周辺に形成された遺跡である。

遺跡一帯は戦後に米軍基地として接収されていた。基地解放後の1956年、琉球政府文化財保護委員会によって史跡に指定された。

しかし1966年のホテル建設によって崖下の主要部分が破壊されることとなり、指定解除された。

仲宗根貝塚では、時代を隔てた人々の活動の痕跡が確認されている。標高110m前後の石灰岩崖下は主に貝塚時代前期に比定され、崖を登った標高120m前後の石灰岩の丘陵上にある仲宗根御願周辺は貝塚時代中期及びグスク時代に比定されている。

出土遺物には土器・石器・陶磁器・類須恵器・骨製品・貝製品・人骨・鉄器などがある。貝塚時代中期で特筆すべきこととして、抜歯された人の顎の骨が見つまっている。

またグスク時代の玉も発見され、なんらかの祭祀が行われていたと考えられる。

指定解除はされたものの、崖上はまだ包含層が残っており、遺跡範囲のさらなる広がりが注目される。





沖縄市民会館より東へ 350m の地点にある。一帯は標高 80m 前後の平坦な石灰岩台地が広がり、所々に比高差 10m 程の石灰岩丘陵が点在している。八重島貝塚は、その石灰岩台地の縁辺及び崖斜面に形成されている。崖斜面からは貝塚時代前期の土器が表採でき、当初八重島式土器として設定されたが、後に伊波式の範疇に入ることが確認された。

石灰岩台地上は 1989 年のアパート建設に伴って発掘調査が行われ、竪穴住居跡が検出されている。出土土器は貝塚時代中期の宇座浜式を主体とし、崖斜面とは時期が異なることが分かっている。





知花十字路より西へ700 m、南北に走行する沖縄自動車道一帯に知花遺跡があった。標高80m前後の石灰岩丘陵上に立地する貝塚時代前・中期の遺跡である。

遺跡の北方を比謝川の支流が流れており、西方300 mにはアカイジュマーと呼ばれる水量豊富な湧水がある。本遺跡は発見された時点で石灰岩の採石によりほぼ壊滅状態にあった。

したがって検出された竪穴遺構の一部や柱穴も様子が判然としない。

遺物は土器や石器や骨製品などが出土しており、なかでも石器の出土量が多い。

沖縄自動車道の建設に伴い記録保存調査が行われ、遺跡は消滅した。



馬上原遺跡

地図 13



標高 110m の石灰岩台地に立地する。北東側は崖となり、直下に室川貝塚がある。南東には仲宗根貝塚があり、わずか 150m しかはなれていない。

本遺跡は室川貝塚の記録保存調査に伴って発見された。竪穴住居跡が二基検出され、貝塚時代中期のものと考えられている。また、出土遺物は土器と石器に限られている。

津嘉山森遺跡

地図 21



津嘉山森遺跡は、古謝集落の北 600m の地点に位置する。標高 100m のクチャの丘陵に石灰岩が乗っており、一帯は具志川市との境界になっている。その石灰岩の付近から、沖縄貝塚時代の室川下層式土器やグスク土器などが表採されている。

1988 年に開発に伴う試掘調査が行われたが、具志川市側も含めて遺構や遺物包含層は検出されていない。

明道遺跡

地図 7



県立美里高校の裏手、標高70mの石灰岩丘陵に立地していたが、採石により破壊されたと考えられる。貝塚時代中期の土器が表採されているが、その後の分布調査では確認できていない。今回の分布調査でも確認できなかった。

富里川原貝塚

地図 13



沖縄こどもの国の北方200mの崖斜面でわずかな遺物の散布が見られた。現在では宅地化が進行しており、遺跡の確認は難しい状況となっている。

八重島茶城原遺物散布地

地図 10



八重島貝塚の南方 150m にある石灰岩丘陵上に、伊波・荻堂式と見られる土器の粒が散布している。

泡瀬地先遺物散布地

地図 22



泡瀬通信施設の東に広がる干潟上に、貝塚時代中期の土器が散布している。詳細は不明である。

那志原遺跡

地図 10



八重島貝塚より北東へ350mの地点にある。越来と八重島の間を流れる比謝川支流（セーシジャー川）沿いに石灰岩の断崖が連なっており、その岩陰にある。

貝塚時代後期の土器が散見されていたが、後世に墓として利用されているため、内部の確認は困難な状況となっている。

上地長次原遺跡

地図 12



本遺跡は嘉手納基地内にあり、第二ゲートより北方300mの地点に位置する。比謝川支流に面した標高90m台の石灰岩の岩陰に立地している。貝塚時代前期から後期の土器が表採されている。



沖縄市民会館に隣接する八重島公園内にある。標高 107m の石灰岩丘陵で以前貝塚時代中期の土器が表採されている。公園整備に伴い試掘調査を一部行っているが、遺物・遺構は確認されていない。

グスク時代

6 グスク時代の遺跡

琉球列島にはグスクと呼ばれる城塞的遺構が存在する。考古学の時代区分では12世紀から15世紀までをグスク時代と呼称しており、文献史の古琉球時代に相当する。

グスク時代の特徴として、本格的な農耕の開始・金属器の使用・中国を主とした対外貿易の活発化・先島諸島との文化的統一化などがあげられる。

当時の沖縄をとりまく東アジアの時代状況を見ると、10世紀に末を中心とした東アジア交易体制が発展し、12世紀には日宋貿易が行われるようになる。

このころから、長崎県で製作された滑石製石鍋や、奄美の徳之島で生産された類須恵器や、中国製陶磁器が流通するようになる。14世紀以降になると進貢貿易も始まり、現在の沖縄を特徴づける様々な文物がもたらされた。

グスクは県内に300近く分布するが、その性格はまだ明らかにされていない。

なお、現在では「グスク」が考古学的遺構をさす用語として広く用いられているが、本書で紹介するグスクの名称については地元での呼び名を掲載することにした。

- 15 越来グシク
- 16 知花グシク
- 17 竹下遺跡
- 18 満喜世遺跡
- 19 与儀遺跡
- 20 与儀御願所遺物散布地
- 21 比屋根遺跡
- 22 大里エーヤマ遺跡
- 23 石城原遺跡
- 24 センター公園内遺物散布地
- 25 天之岩戸向洞穴遺跡
- 26 アマグシク跡
- 2 津嘉山森遺跡
- 4 仲宗根貝塚





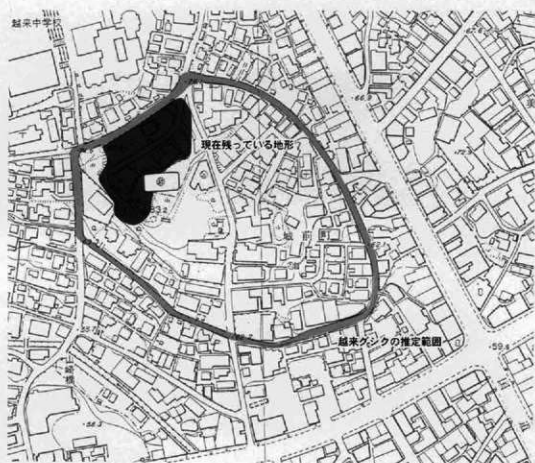
越来グシクは、尚泰久や尚宣威の即位以前の居城として知られている。オモロにも「ごそくもりくすく」と謳われている。地元では「ギイクグシク」と発音する。

標高 80m の石灰岩丘陵は宅地となり、地表からグスクの痕跡を確認することはできない。

1985 年、個人住宅建築に伴い発掘調査が行われ、2 棟の掘立柱建物跡や 40 にも及ぶ柱穴などが検出された。

出土した遺物には年代幅があり、貝塚時代後期のくびれ平底土器から近世の沖縄製陶器まで得られている。しかし中心となる遺物は 14 世紀から 15 世紀後半の中国製陶磁器である。特にベトナム陶磁や水注・酒会壺など、他のグスクではあまり見られない貴重な遺物や、刀のつば・切羽・鎧の金具といった武器の存在は、越来グシクが当時の琉球において重要な位置を占めていたことを物語る。





越来グシクの範囲

このように繁栄を誇っていた越来グシクであるが、道路工事のための石材調達や戦後の基地建設などで地形の大半を失い、現在では約8分の1程度しか残っていない。



知花十字路より北西へ300m行った地点にある。地元では「チバナグシク」と呼ぶ。標高87mのカルスト残丘地形をグスクとして利用している。

付近は具志川市天願と北谷町砂辺を結んだ天願構造線上にあり、沖縄本島北部と南部の植生が混在して見られる。

グスクの頂上は平坦地となっており、現在は展望台が建っている。その東側は一段下がって平坦地となり、遺物が表採できる。

知花グスクの城主が誰であったかという記述が見られず、明確な石積み痕跡も確認されていない。勝連グスクの阿麻和利を破った鬼大城が、この地で自害したという伝承があるのみである。鬼大城の墓は南側の崖中腹にある。





知花遺跡が立地する標高 80m 前後の石灰岩丘陵南端に占地していた遺跡である。崖下にも包含層があったが、それは丘陵からの投棄と考えられている。両者に時期差はない。出土遺物にはグスク土器や青磁・白磁・類須恵器・石器などがある。葉脈痕をもつ土器の底も確認されており、クワズイモと考えられている。

遺構は土壌や柱穴などが検出されている。

沖縄自動車道の建設に伴い記録保存調査が行われ、遺跡は消滅した。





知花遺跡が立地する標高 80m 前後の石灰岩丘陵南端に占地していた遺跡である。崖下にも包含層があったが、それは丘陵からの投棄と考えられている。両者に時期差はない。出土遺物にはグスク土器や青磁・白磁・類須恵器・石器などがある。葉脈痕をもつ土器の底も確認されており、クワズイモと考えられている。

遺構は土壌や柱穴などが検出されている。

沖縄自動車道の建設に伴い記録保存調査が行われ、遺跡は消滅した。





満喜世はマンジュと読む。高原十字路より南西 400m の地点にある。なだらかな緩斜面に、標高 30m で比高差最大 6m の小丘陵があり、マンジュウガンと呼ばれている。

遺跡からは土器や青磁などが表採でき、西側の斜面にはアラスジケマンガイの層が露出している。さらに西側一帯に遺物が広く散布している。2000 年に行われた予備調査の結果、マンジュウガン南側の貝層は、現代遺物を含む攪乱層のまま地山に達したので、比較的新しく形成されたことが分かっている。



与儀遺跡

地図 17



与儀集落内、上殿の周辺に形成された遺跡である。上殿周辺は標高 29m の小高い丘となっており、その南側に集落が広がっている。青磁などの古く時代の遺物が表採されており、与儀集落の形成・発展を知るうえで貴重な遺跡である。

与儀御願所遺物散布地

地図 17



与儀集落の北西約 300m の尾根上に与儀御願所があり、その周辺に青磁などが散布している。

比屋根遺跡

地図 17



比屋根集落の北側、標高 47m の小高い丘の上に位置する。青磁やグスク土器などの遺物が表採されており、南西部に広がる畑でアラスジケマンガイを大量に含む遺物包含層が確認できる。遺跡内には門中の屋敷跡が残っており、ここから集落が発展していった様子を窺い知ることができる。与儀遺跡同様、比屋根集落の形成・発展を知るうえで貴重な遺跡である。

大里エーヤマ遺跡

地図 20



大里集落の西 200m の傾斜地に位置する。標高は 40～30m で、地質はジャーガル土壌である。一帯はエーヤマと呼ばれ、大里の拝所が集中する。大里はかつてこの場所にあったと言われている。遺物は青磁やグスク土器などが得られている。

石城原遺跡

地図 23



倉敷ダム公園内、入口左手の丘陵一帯である。陶磁器片が数点表採されている。

センター公園内遺物散布地

地図 12



センター公園はコザ小学校の南西に近接しており、標高110mの石灰岩の小丘陵をなしている。丘陵の頂上付近からグスク土器の小片が表採できる。しかし遺物散布の密度は少ない。また、本地点より南側へ向けての平坦地で、以前土器の小粒が散乱していたのが確認されている。

天之岩戸向洞穴遺跡

地図 10



沖縄市民会館の東方約500mに位置する。標高100mの石灰岩丘陵の鞍部に洞穴がいくつかあり、本遺跡はその内の一つである。本遺跡から類須恵器やグスク土器が出土することが多和田氏により報告されているが、洞内はコンクリートで塗り固められ、確認することはできない。

アマグシク跡

地図 20



高原十字路の北東の一角にあった二ービの丘陵のことをアマグシクと呼んでいた。現在は平坦地となっており、戦後の郡道工事により地形改変された可能性が高い。遺物が表採されたという記録はなく、地形も消失しており、遺跡かどうかの確認はできないものの、グシク地名の例としてとりあげた。

近世以降

7 近世以降の遺跡

近世以降には考古学の時代区分概念はない。よって考古学的方法により確認できる遺構・遺物を中心に取り扱うことにする。

沖縄の古窯には古我知窯・喜名窯・知花窯・湧田窯などがあり、いずれもグスク時代に中国南部や東南アジアの影響を受けて生産されたといわれている。

1616年になると、王府が朝鮮陶工を呼び寄せて技術指導にあたらせている。その背景として、島津氏による貿易統制により島内産業を振興する必要があったためといわれている。

1682年には知花窯・宝口窯・湧田窯の3ヶ所の窯場を統合し、壺屋窯とした。壺屋焼きは、窯場が壺屋から移転した現在でも生産が続けられている。

27 知花焼窯跡

28 内喜納登窯



知花焼窯跡

地図 5



知花集落内にある。標高約50mで、すぐ西側を比謝川が流れている。壁面で陶片が確認できる地点があるものの、窯の跡なのかはまだ確認できていない。一帯にはチブヤヌサチー(壺屋の先)という地名が残っている。

内喜名登窯

地図 23



沖縄葬祭場内にある。大正末期に那覇の壺屋から移った島袋氏によって構築された。昭和初期までの短い期間の操業であった。現在では天井部が損壊しているが、壁面は残っている。長さ約9m、幅約3mで、天井の高さは約1.2～1.5mと推定される。

8 近世前後の古島と村落移動

— 沖縄市の事例 —

1. はじめに

グスク時代から近世にかけ形成された「村落発祥地」のことを、古島「フルジマ」とか元島「ムトウジマ」と言う。現村落近辺か、もしくは離れた場所に遺跡が立地する。字登川では後者で呼ばれているが、ここでは前者の呼称を用いる。

沖縄県下における近世の村落移動を分布調査によって報告している文献は少ない。高原三郎氏による昭和初期の調査では、172例(15は廃村)と報告されている(註1)。当時、172例中で現存する村157の内93例は「南島式村落」(基盤型を形成、井然型村落とも称す)であったと述べている。高原三郎氏以降、県内の村落移動分布を現地調査によって把握し提示したのは、仲松弥秀氏である。仲松弥秀氏は沖縄諸島を主体に、北は奄美、南は先島をくまなく歩いて村落の調査を行っている。地理学と民俗学の観点から村の立地と移動及び村落構造について、拝所と祭祀をとおして解明しており、『古層の村 沖縄民俗文化論』(1977年)の名著は有名である。仲松氏以降のフィールド調査は、沖縄大学「沖縄学生文化協会」によって、考古学・民俗学・地理学等から「村落構造と変遷」を視点とした精力的な調査が行われている。

移動村落とその形態については、発祥地、移動前の村落形態、それがいつの時代に現在地に移動を行ない、どのような要因で村の形態が形成されたか等の分析は充分に行われてない(註2)。

一般的には、村の疲弊、農業生産力の低下、風水の係わりなど、当時の首里王府による政策だと言われている。県内の村落移動は18～19世紀に多い。1736年に蔡温は三司官となり、就任後は、琉球の人口増加に伴い耕地を増やし生産を増大する意図のもとに、新しい村の形成、または移動と分村等を推進した(註3)。このために耕作地と生産が増えたと言われている。

本市において確認している事例は9例、ここでは戦前、旧美里間切に属していた石川市は除き、現在の市域に限定する。把握は、現場踏査、伝承、文献、金石文等から行った。村落規模、発祥年代、移動年代、移動理由等が分かるのは述べ、不明なのは省略する。

2. 村落移動の事例

1) 池原

登川区『祝 220周年』と登川の古老の談では、現在の場所へ村落を形成するまでに村を2回

移している(註4)。発祥地は「登川のスクブウタキ」北側になり、年代は近世前後(後述・登川との兼ね合いから)と推察している。この一帯は戦後米軍基地が造られ、解放されて数10年後の1980年代末頃に都市区画整理事業が行われている。度重なる土地造成によって地形が変貌し、更には宅地化が著しいため、古島の跡は確認できてない。

次の村落は、登川自治会の公民館東側約150mに位置する「ウズミグムイ跡」近辺に形成している。ここでの存続期間は不明で、その後再び移動を行い現在地に定住する。当地での古村落は所在する拝所が神アサギ周辺に多く分布するので、この近辺と推察している。景観は不井然型村落を形成し、後々、数100年を経て村落域が徐々に広がって現在に至ったと思われる。発祥地から現在地に至るまでの移動を簡略化すると

(発祥地)登川のスクブウタキ北側



登川のウズミグムイ近辺



(現在地)池原の神アサギ周辺

2) 登川

登川区『祝220周年』と古老の談では「北美小学校」一帯に位置する。北東200m余離れた池原から7世帯が移住し最初の村が形成された。移住理由は、この付近の道を往来する人達が「フエーレー(追いはぎ)」に度々襲われ被害が続発したので、その対策のためだと言う。その後、1739年に池原から更に7世帯を加わえ、本格的な村落移動が現在地に行われている。移動に際しては、当時の時代背景を加味すると首里王府の政策等も考えられる。

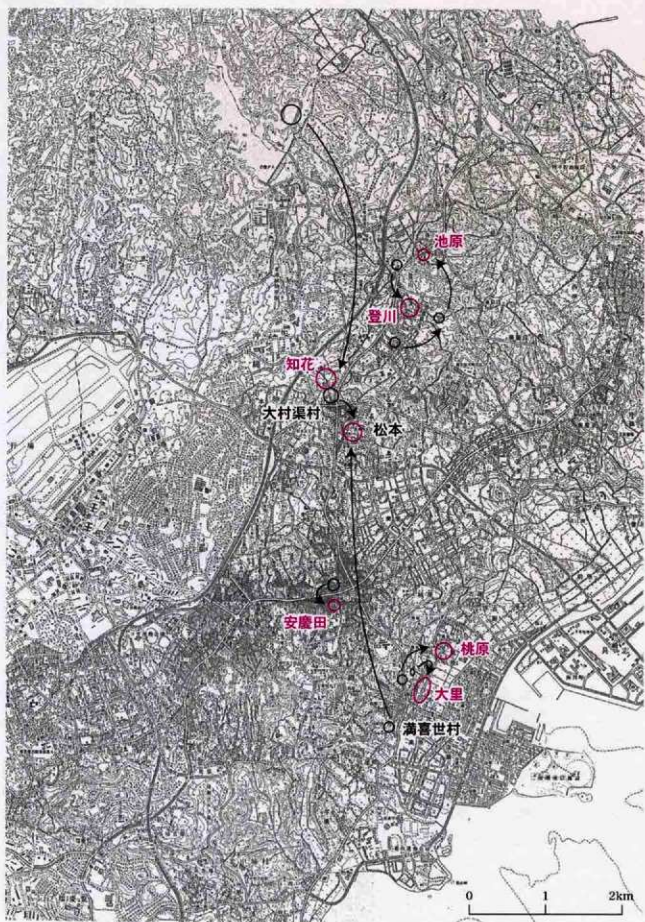
移動後の村落の特徴は、次のように略述される。

- ①村落の区画は典型的な井然型村落。
- ②村落の四力所にヨスミノカド(四隅の角)を配置。それぞれ二一石(微粒砂岩)を埋設。この範囲が移動当初の村落範囲。
- ③移動は風水師が関わっている。
- ④村落移動に係わったと思われる役職名及び姓等が記された「登川碑(分村碑)」の設置。

3) 知花

倉敷ダム管理棟の北側一帯に位置する。古老の談では、ここから南側約3km離れた知花グシク近辺に農作業を行うため通っていたが、不便を感じグシク近くに移動したと言う。この村落跡は確認できてなく、その後再び移動を行い現村落が形成されたと推察している。

何時のころか不明であるが、村落創建の時に首里王府から派遣された風水師が関わっており、





知花の古島

村のフンシー（風水）の中心も知花グシク裾野東側にある石灰岩転石「チブルシー（頭石）」だとの謂れもある。村落景観は不井然型村落を成している。

4) 大村渠村と満喜世村

大村渠村と満喜世村の二村落が移動し、合併後に名称が《松本》となる。合併前の前者の立地は知花グシクの南側一帯、後者は南側4kmの高原に隣接していた。村落の景観は、隣接する知花が不井然型村落から成るのと対比的に井然型村落を形成する。

5) 安慶田

越来グシク跡の南側斜面に位置する。『球陽』では、次の理由から1763年に竹口原に移住したと記されている(註4)。

- ①台風のたびに家屋が壊され、修復が大変である。
- ②生活用水を汲む泉が遠い。
- ③土地が狭く人口増による住居の確保が難しくなる事が予想される。
- ④竹口原は土地が広く泉も多い。

移住当初の村落は、「安慶田御嶽」周辺と推察している。ここは古島の跡から南側約300m余りに位置し、周辺の地名はウドンヂー（御殿地）との謂れがある。現在の安慶田1丁目3～4号、2丁目3～6号付近になる。



古謝の古島（津嘉山森遺跡）

6) 古謝

公民館北側約 500 m の津嘉山森（チカザンムイ・海拔 100 m 余）に位置し、丘陵は津嘉山森遺跡と称する。この一帯は、戦時中・日本軍の石部隊が駐屯していたため、周辺には数カ所の防空壕跡が 1980 年代初め頃まで分布していた。丘陵の地形も 1960 年代中頃まで残っていたが、1960 年代末頃と 1980 年代末頃に大規模な開発が二回行われ、殆どは掘削された。最初はホテル建設予定、次はレジャーランド建設など、何れも造成工事が原因で遺跡の発見と破壊等もそれらに伴って行われた経緯がある。出土遺物は、古いのが「室川下層式土器」、新しいのはグスク時代の土器等が出土している。

7) 東桃原

隣村落の大里の古老の談では、南西約 400 m 離れた大里の小字「野原（ノーバルー）」にあったと言う。1960 年代初め頃まで田圃地帯が広がり、大里のナーシルダー（苗代田）もこの一角に位置していた。1970 年代初頃までは面影が残っていたが、現状は一変し住宅地域になっている。

大里の古老の談では、昔ここから桃原が山原に移動させられそうになった時、大里の人達が同情して大里区域の土地北側を提供したので、遠くへ移らず事無く済んだと言う。

伝承と記録では違いがみられる。『球陽』では、次の理由から 1801 年に村人が越來下口原に

移住を願ったと記されている(註5)。

①村は子孫が繁盛しないので、地割の割り振りが難しい。

②風水師・宮城通事親雲上に検分してもらったら、村構えの風水がよくない

近隣村落の高原・泡瀬・古謝の人達は、ウフザトゥウバル(大里・桃原)と併称し呼んでいる。親戚付き合いが現在も盛んで、両村落の気質も似ている。昭和56年度(1981年)市内遺跡分布調査の際に踏査を行ったが、古島は確認できなかった。

8)大里

公民館西方約200mの斜面一帯に位置する。地元ではエーヤマと呼んでおり、殆どは畑地である。旧正月の時に若水を汲むエーガー(村の共同井戸)、トゥンチャー、アシビナー、その他の拝所等が分布する。

村落移動の原因は古老の談では、村落が度々地滑に見舞われたので現在地に移ったと語った。それ以外にも、当時の時代背景を考慮すると、首里王府による政策等も考えられる。年代は漠然とはあるが、グスク時代(上限不明)～近世前半頃と採集遺物から推察している。

村落の範囲は、遺物の散布、拝所の分布、地形等から約100m四方と推定している。確認を行うには、遺物の出土状況、遺構の広がり等を試掘で把握する必要がある。現状は、包含層が浅く、尚且つ数100年来の耕作による攪乱、更には畑表面の遺物の流失等により、条件的には厳しいと思われる。

畑の遺物散布は、食料残滓のアラスジケマンガイ等の貝殻が主体で、土器・陶磁器等の人工遺物は少ない。現在の海岸線は埋め立ての繰り返しによって、東方1km余りに位置する。今の景



大里の古島(大里エーヤマ遺跡)

観から古環境を想像するのは難しいが、当時海に面した村落であったことを窺わせる話が地元で聞けた。伝承では、公民館北側 20 m に船着き場の謂れがあり、古島との距離は 100 m 余りであり近い。実際に公民館近辺で地下を約 2 m 前後掘り下げると、貝殻混じりの海砂が堆積しているのを確認している。

県内のグスク時代遺跡からは炭化米が出土する。遺物は未発見であるが、ここでも稲作の可能性が考えられる。水田の候補地は、1960 年代前後まで使用されていたナーシルダー（苗代田）が想定され、距離的には古島の南側約 300 m になる。この一帯は 1970 年代以降の諸開発によって地形及び面影など全然残ってなく、現在では確認の術がない。

(注 1) 高原 三郎「沖縄県下の聚落(二)」『地理学』第 7 巻第 8 号 1939、古今書院

(注 2) 小川 徹「久米島民俗社会の基盤」『沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究』1982 弘文堂

(注 3) 農山漁村文化協会「解題 近世琉球の社会と農民」『日本農書全書 34』1996

(注 4) 登川区「祝 220 周年」1958、美里村字登川

(注 5) 沖縄市史編集委員会「検者・下知役への褒賞状関係史料」『沖縄市史第 2 巻資料編 1 文献資料にみる歴史』1984、沖縄市教育委員会

(注 6) 同上

9 民俗の世界と文化財

村びとの文化

村の先輩である私たちの先祖は、自然のなかで食料や道具の材料などを得てきた。畑や水田に関して村びとは、野菜や米などの豊作をもたらせてくれるように、と村の神々へ願った。そして、豊作をもたらしてくれた村の神々へお礼を述べ、来年も無事に収穫できるようにと、再度村びとたちは願った。これらは、海の漁でも同じである。村びとは、自然や社会のなかで学んだ体験を自分たちの子どもや他の村々へ伝え広めている。その生活の体験は精神面だけでなく、目にみえる形として土地の表面と地中に残されている。それが遺跡と呼ばれるものである。なぜ、遺跡や文化財を保護していく必要があるのだろうか。

日本では、先史時代から現代までの遺跡、音楽や芸術、自然の名勝などを文化財の対象とし、保護活動を行なっている。近ごろの日本では、人類の貴重な遺産の継承をめざし、日本各地の自然や文化の遺産を「世界遺産」へ登録する動きが目立つ。その動きは、沖縄でもグスクなどの登録で話題を呼んだ。

はじめて、遺跡や文化財を目にし、耳にする人たちは難しく考える必要はない。宮崎駿監督の作品である『天空の城ラピュタ』（1990）の映画やビデオをみた人は多いだろう。そのクライマックスのシーンを思い出したらいい。

例えば、主人公のバズーとシータがラピュタの古い建物のなかで王家の墓にたどりついたり、ムスカが伝承のとおり黒い石碑や巨大な飛行石を見つけ出したり、祖母から飛行石と呪文を継承したシータがラピュタを守るために「滅びのまじない」を唱えたりする場面は、700年前の祖先たちから700年後の子孫へ残し伝えた生活の記憶であった。それが古代の生活の風景を知るひとつの手がかりである。

さらに現在のマスメディアが発達した時代では、遺跡を探検する映画のSFXアドベンチャーの作品が多い。例えば、スティーブン・スピルバーグ監督の『インディ・ジョーンズ―最後の聖戦―』（1989）やスティーブン・ソマーズ監督兼脚本の『ハムナプトラ―失われた砂漠の都―』（1999）、その続編の『ハムナプトラ2―黄金のピラミッド―』（2001）などが知られている。これらの作品は、考古学の人気を高め、子どもたちへ夢を与え続けている。

それでは、「遺跡」とは何であろうか。遺跡は、英語でMonument（モニュメント）と呼ぶ。そのMonumentは、古代のローマ人が残したMonumentum（モニュメンティウム）というラテン語から由来しているらしい。その語のMonumentumに古代の人たちが残した言葉の意味が随々

れている。つまり、Monumentum(遺跡・記念物)は、動詞の monere(記憶する・思い出させる)と名詞の mentum(思い出させるもの)が合わさって生み出された言葉であった。過去から残されている遺跡(記念物)をみた子孫たちは、祖先たちの文化を継承し、次の世代へ伝承してきたのである。

遺跡は古代のローマ人だけでなく、多くの民族たちが生活のなかで道具や建物をつくったり、言葉で情報を伝えたり、神や自然や人の祭りなどを残している。それらの行為が祖先の文化を記憶し、今の世のなかに伝え続けている。それは文字をもたない民族たちでさえも同じである。記念物の保存と記録を主張した金閔丈夫は、「心から心に伝えられる記憶、これが真のモニュメント」であり、民族そのものの自体が広大な記念物であろうと話す。おそらく、私たち現代人は、村びとの心や遺跡をながめることで、過去の祖先との会話が可能になるのであろう。

そのような意味で文化財は、空間的・地理的環境のなかに残されている。決して地中に埋められているモノだけが遺跡ではなく、私たち人間が地表にみえるモノも対象にしなければならないし、村びとが話す言葉や習俗をも対象にしなければならない。

村びとの生活の推移を知るためには、ふたつの方法が考えられる。ひとつは、ふるさとを中心に各地の村々を歩いてみるやり方である。それは、地域の特性や文化の広がりを(伝播)を教えてくれる。もうひとつは、時間的な流れを意識して、村々の習俗を眺めてみるやり方である。それは、生活の発展や変化していく過程を教えてくれる。それらの方法は、村びとの風俗・習慣を研究する学問であるために「民俗学」と呼ばれている。

日本の隅々を歩いた宮本常一という学者は、生活の発展や変化していく「過程こそが祖先の努力が隠されているのである」と語った。その体験談は、古い原型のモノや生活を探る視点も大切であるが、現代の生活から過去の生活を見る視点も必要であろう、と私たちへ教えてくれた。これからの私たちには、祖先たちの文化を保存し、活用する課題が残されている。

村びとの暦と文化財

村びとは、自然のなかで生業や天候から暦を知っている。その季節の節目には、村の神々を祀る行事があり、村の旧家や役人たちが個々の拝所を訪れ、感謝・豊漁・豊作などの祈願が行われている。村に残る拝所は、遠い祖先から私たち子孫へ村の記憶を伝え続けている。

琉球諸島の村々を歩き、神事を通して村落の構造をはじめて明らかにした方は、仲松弥秀である。仲松は、『神と村』(1990)のなかで次のように話している。

このような、古代からほとんど変わることなく存続してきた神や拝所、祭祀、司祭者などは、

その村の歴史的過程や地理的過程の具象化したものと言えると思われる。たとえその村に古文獻がなくとも、伝説がなくとも、村びとが知っていなくても、その村の神や拝所と祭祀と司祭者の出自家を知ることさえできれば、それは、古文獻や伝説以上の村の地理的、歴史の変遷、その内部構造をも明らかにしてくれる最上のものと思われる。

豊富な事例に基づき仲松は、神の居所をグスク・本御嶽・お通し御嶽・テラ・ニライスクとし、村の拝所である祭祀場所を殿・神アシャギに分けた。そして、村の神事をながめれば、本御嶽とお通し御嶽の立地状況や旧祭祀場・井泉の所在から村落の移動過程が解明できる、と考えた。さらに「祖霊神と村人とは、血のつながる親子関係になっている」と話す仲松は、村の鎮守の神が「腰当神」であり、その神が鎮座している御嶽を「腰当森」であると述べた。つまり、それは祖霊神に対する信仰が村の構造に深くかかわっており、祖霊神とその後裔の血縁関係がオソイ（愛護）とクサティ（腰当）といった村落の立地や家の配置の関係を表現している、と位置づけたのである。それが自然村落の原型であると強調した。

沖縄市の各村落においても、御嶽を基点としたまつりは行われている。それは、沖縄市を対象に調査した多くの研究者が明らかにしつつある。

廣山實は、「沖縄市字山内の地名」（1993）のなかで山内における口碑の伝承や拝所の位置を悉皆調査し、「山内の発祥の地」を探った。

「胡屋・仲宗根における旧暦8月10日の行事」（1993）を記した宮城昭美は、胡屋共有会と祭祀者がどのように村のウブガー（産水を汲む井戸）やムラガー（村の共同井戸）を祀り、拝所で村の女性たちがウスデークを奉納しているのかを報告している。

「越来の拝所と年中行事」（1988）のなかで崎原恒新は、越来の村びとや祭祀者が年中行事の各節目で、どの拝所を訪れ、祭祀しているのかを詳細に記録した。その報告は、村の文化財であるウガンジュ（拝所）・旧家・古地名と村のまつりがどのような関連性をもつのかを民俗学的な調査から導いた。

知花の井泉の拝みを観察した宮城利旭は、「沖縄市知花の『カーメー行事』と『灸さおもろ』」（2000）のなかで知花のフルジマ（古い村落跡）の位置を明らかにした。さらに「登川村落の風水池『ウズミグムイ』」（2001）では、登川のウズミグムイに注目し、村の文化財である拝所から村落の発達過程を検証した。

沖縄市の南側にある与儀では、近世の時代に相当する与儀遺跡や与儀御願所の上に神の祭祀場や御嶽が残されている。とくに与儀御願所は、『琉球国由来記』（1713）にも記載されている。与儀の村びとたちは、稲作の行事に関わるまつりで双方の遺跡の拝所を訪れ、村の神へ祈願を

行っている。

比屋根では、近世の時代の遺跡が村落の北側に位置する。そこは、中国産の青磁器類が散布することから比屋根遺跡と位置づけられている。その遺跡は、『琉球国由来記』に「オシアゲ森、神名、オソクツカサノ御イベ」と記された山である。比屋根には重要な殿や旧家が立地し、稲作に関連する行事などで村の神が祀られている。

知花の稲作に関する祭りでは、周辺の松本や登川、そして池原の村落から村の役人や祭祀者たちが知花のヌドゥンチ（ノロの神役が住む屋敷）と知花のトゥヌ（祭祀場）へ集まってくる。その祭祀場で各村の代表者たちは、稲作や五穀の豊作・感謝などの祈願を行うのである。

稲作行事以外のまつりでも沖繩市の村々では、拝所を訪れる儀礼がいくつかみられる。例えば、稲作の行事に続いて重要なまつりは、村の井泉と井戸を巡拝する儀礼であろう。沖繩市の村々には、旱ばつの影響を受けやすい地域が多い。その要因から村の中心となる場所には古い湧き水があり、さらに村のなかにはクムイ（溜池）を供えている。雨乞いの行事がかつて行われていた事例からも、村びとにとっていかに水が重要であったのかがわかるであろう。また、沖繩市の先史時代の遺跡には、村落のなかで古い井泉が立地している点からも、貝塚人たちが生命の源を求めていたと想像しやすい。

池原・知花・胡屋・諸見里・与儀・比屋根・大里・古謝で行われている獅子舞は、村の重要な拝所や旧家を訪れ、村の神々へ獅子の舞いを奉納している。

秋頃に行われる与儀のシマカンカーは、村の境界へ豚の骨を吊るす習俗がみられる。それは、ムンヌキムン（物の怪払い）の為の呪いであり、村の上殿や火之神やクガニツターを訪れ、村の神々に安全祈願を行っている。そのシマカンカーの行事は、沖繩市の最北村落である池原でもかつて行われていた。村の中心地や境界や屋敷の出入口に豚や牛のカクジ（下顎骨）を縄で吊るし、魔よけとした。

山内では、村びとから「お宮」と呼ばれる拝所がある。その中心のほころには、「山内昌信大明神」と文字を刻んだ石碑がある。山内昌信とは、山内の村落を創設した人物と知られ、村びとから厚く祀られている。沖繩において個人を神仏化し、祭祀する最初の事例は第二尚王統初代の尚円王であると、平敷令治が『沖繩の祖先祭祀』（1995）で指摘した。山内の事例は、儀間真常や野國聰管などがどのような過程を経て神として祀られるようになったのかを見比べると興味深い。

このように沖繩市に残されている拝所や井泉などの文化財は、村の歴史的変遷・地理的発達を教えてくれる。

生活を記録した文化財

古来より祖先の知恵と歴史を記憶した記念物は、村の神々を祀る拝所だけではない。形に残らない芸能や言葉なども人と人の対話で記録する村びとたちは、自然の環境に適した道具や施設をつくったり、子どもの時に干潟やアシピナー（広場）で遊んだり、教育や政治の影響で軍施設や記念物を設けたりしてきた。それらの記念物は、人間の価値観によって、時代の流れから消えるものもあれば、貴重に残されたものまでもある。

生業に関する文化財としては、比屋根の海岸に残存するマースヤー（塩田跡地）がある。その小屋は、泡瀬干潟の立地を生かした生業の施設であった。さらに比屋根には、魚を大漁に捕獲する施設の一部が残されている。それは魚垣である。なぜ、村びとたちは魚垣を設ける必要があったのだろうか。沖縄において具体的な海洋文化が解明されていない今日に魚垣などの文化財は、大きな問題を孕んでいる。

沖縄市の文化財は、戦争遺跡に特色がある。知花の美里児童園（美里尋常高等小学校跡地）にある奉安殿や忠魂碑は、全国初のセットの指定文化財として位置づけられた。嘉手納基地内には、旧日本軍格納庫施設や降伏調印式広場が残されており、知花から白川へ通る県道 26 号線は、俗に「毒ガス道路」と呼ばれている。沖縄市の池原や与儀などには、戦時中に村びとが避難した防空壕が今でも確認できる。これらの文化財は、平和学習を学ぶうえで重要な役割を果たすであろう。

村びとの一生をながめるうえで重要な文化財のひとつに墓が大きな位置を占めている。とくに越来にある尚宣威王の墓や知花にある鬼大城の墓は、現在の家型の墓と見比べると村びとの死生観を知る手がかりと成りえるだろう。古謝に残存するガンヤー（籠を納める小屋）は、県内でも数少ない風景を保持している。

沖縄市にはウジマーと呼ばれる地層があり、その地層からなるニービの石は石碑や墓碑、石敢当などに多く利用されている。池原にあるサンスクリットの碑や胡屋のサンカーケーモーにある魔よけの石碑や与儀にある石碑・ヒーケーシーは、近世の宗教や風水を知るうえで重要である。また、池原にある木火土金水（もっかどごんすい）の碑や登川の創立記念碑や古謝の津嘉山墓碑も近世琉球の社会を教えてくれる。さらに琉球石灰岩で制作された石獅子は、村の境界と村落移動の手がかりとなる。

沖縄市において地理学に関連する文化財も残されている。美里の道路元標は、村の地図を作成する為に重要な意味を持っていた。登川や美里のシルビドテ（印部土手）は、小地名の境界を示す目印である。近世の琉球においてどのような竿入れが行われていたのかは、古文書と現地の文化財を照らし合わせる作業で新しい歴史がみえてくるであろう。

現在の沖縄市は、基地建設や土地整備でカルスト残丘が失われているが、かつては小高い山々と窪地がみえていたようだ。その地形から村びとたちは、石橋を建築することで、人びとの往来を増やしていった。美里のカフンジャー橋は明治以降の石造を基礎にしている。知花のメーヌカーガー橋や嘉手納基地内にあるイシグムヤー橋などは、アーチの工法を採用している。これらの石橋は、近世から近年にかけて造られた県内の石橋と比較する上で貴重な建造物である。また、大里の高原交差点には、かつてニービの小高い山があった。その付近は、ヤンバル船が停泊する場所であった言われている。地名を丹念に拾いあげると、ふるさとの風景がよみがえってくる。

自然に関する記念物の文化財は、比屋根と泡瀬の境界にある湿地帯、胡屋のメーヌマーチューや東桃原のアシビナーにあるガジュマル、知花グシクー帯の森林などがある。比屋根湿地帯には約50種の野鳥が確認されており、その湿地は泡瀬干潟と同じく、海生の小動物や植物が多く生息している。子どもたちが干潟や湿地で遊ぶ姿やイザイなどの漁をする村びとの姿はレジャー感覚の風景であり、昔ほどに生活に密着した生業の風景とはみられないであろう。

以上の他に沖縄市の文化財は、教育に関連する越来と美里の「教育の発祥之地」や美里尋常高等小学校跡・越来国民学校跡、村びとの衣食住に関わるフルヤー（豚小屋兼便所）や赤瓦の屋敷、憩いの場であった闘牛場跡や馬場跡、行政に関わる美里村役場跡やムラヤー（公民館）跡など、村びとと関わってきた場所が地名や建物で残されている。

沖縄市の文化財は、嘉手納基地建設に伴い土地を強制的に接収された村落や区画整理・農地開発・道路建設などの土地改良の開発によって移動されている。ある村では文化財が消滅したり、他の村では逆に保存されたり、移動を余儀なくさせられたりする。とくに文化財のなかでも拝所は、壊され消滅するのではなく、祠の形が変えられたり、場所も変わったりする。しかしながら、拝所の意義そのものは形を変えず口碑やまつりなどの儀礼として村の先輩たちが伝承し、後輩たちへ継承されている。

このような村の歴史的背景や過程を刻んでいる文化財や生活には、私たちの目にみえない祖先たちの努力の背景が隠されている。明日をみるために私たちは、文化財という遺跡や村びとの生活から自然の恩恵がわかる口と、ふるさとの香りがわかる鼻と、祖先の足音がきける耳と、祖先の姿をみえる目と、人と人の絆がわかる手を持ちたいものだ。

遠い祖先から伝えられ、残されてきた自然と文化は、ふるさとで暮らす私たちが祖先の知恵と体験を担わなければならない。それこそが真の記憶であり、自然と文化の背景を知る手がかりとなりえるだろう。



アサトガー【地図1】

柴野比発電所の西側に位置する。池原の「クシバル」の人たちは、村の共同の井戸として利用していた。この井戸をアサトガーと呼んでいる。旧正月の若水や子どもの出産の時には、この井戸から水を汲んでいた。現在は、旧暦9月9日のキクザケ(菊酒)の日にも拝まれている。



防空壕【地図1】

アサトガーの北側に位置する。防空壕のほら穴は4ヶ所確認できる。その前には、千枚岩を積んだ跡がみられる。沖縄戦時中のときに池原の人たちが隠れ潜んだ場所とされる。当時の飲料水は、アサトガーから汲んでいた。



ジョーミチャー墓【地図2】

池原公民館の北側に位置する。この墓は、外観からみるとジョー(門)が3ヶ所にみえる。そのために村びとは、「ジョーミチャー」「ジョーミチャーバカ」と呼び、役職のノロが葬られていると言われている。旧暦4月5日のムラ・ジミー(字の清明祭)は、自治会や有志たちがこの墓などを拝む。



ガンヤー【地図2】

北美小学校の北側に位置する。火葬が普及する以前は、葬式のときに死者を墓まで運ぶための道具を利用していった。それがガン(龕)である。その道具を取める小屋が「ガンヤー」と呼ばれた。村の人たちの語りでは、何回か移転し、昭和29(1954)年に現在の場所へ建てられたようだ。

サンスクリットの碑【地図 2】

池原公民館の南西側に位置する。島袋家の屋敷内の3ヶ所に点在している。昔ひとりのお坊さんがヤンバル（山原）へむかう途中に現在の屋敷へ泊まったらしく、そのときに屋敷の立地がよくないと判断されたという。梵字の石碑は、康熙56(1717)年にたてられたのであろう。毎年の旧暦9月9日に島袋家の親族たちは、酒・米・果物・菓子・白紙をそなえ、子孫の繁栄を祈願する。



アシビナー【地図 2】

池原公民館の南西側に位置する。村びとは、ウィヌアシビナー（旧池原公民館跡）と対称に現在のアシビナーを「シチャヌアシビナー」と呼んでいる。旧暦8月15日には、敬老会も含めながら村の組踊や獅子舞が披露される。



木火土金水碑【地図 2】

池原公民館の南西側に位置する。石碑は、当真重陳（伊地知太郎右衛門）が鳩目銭の鑄造を記念して、民暦3（1657）年に建てたと考えられる。石碑の表には、「木火土金水（もつかごんすい）」と大きな字が彫りこまれている。その裏は、石碑をたてた理由の「このくにくたりたうまのしまくたされ」「やまとからゆるしなされ此地」などが刻まれているが、表面が磨耗して一部読みとりが困難になっている。



精人泉【地図 2】

池原公民館の南西側に位置する。村びとは、俗に「スニングー」と呼んでいる。自治会や有志によって、旧暦9月9日の行事に水への感謝として拝まれる。



**妙泉【地図 2】**

諸人泉の南側に位置する。自治会や有志によって、旧暦9月9日の行事に水への感謝として拝まれる。

**神アサギ【地図 2】**

池原公民館の南側に位置する。村の人は「ウガンジュ」とか「カンサギ」とも呼んでいる。その村の重要な拝所は、旧暦の5・6月のウマチー（両月の15日）、エイサーの奉納（7月13日）、シーシ（獅子舞）とウスデークの奉納（8月15日）、菊酒（9月9日）、ウタキマーイ（11月11日）の各行事に自治会と有志によって拝まれている。

**シーシャー【地図 2】**

神アサギの南東側に位置する。この小屋は、村のシーシ（獅子舞）を収めている。旧暦8月15日の行事では、自治会や有志によって村の繁栄を祈願する。その後に獅子舞のミチズネー（仮装の行列）がはじまる。

**ビジュール【地図 2】**

神アサギの南側に位置する。この拝所は、自治会と有志が旧暦の9月9日と11月11日の行事で拝んでいる。

メヌカーヌイジュン【地図2】

池原公民館の南東側に位置する。旧暦9月9日の行事で拝まれている。俗に「メヌカー」とか「メヌカーガー」と呼ばれている

**ヌールガー【地図2】**

メヌカーヌイジュンの南側に位置する。俗に「ヌールガー」とか「ヌールカーガー」と呼ばれている。この拝所は、自治会と有志が旧暦の9月9日の行事に拝む。すぐ隣には、「池原ガー」もある。

**ムトッガー【地図3】**

北美小学校の西側に位置する。1994年に改修されたこの井戸は、登川の一番古い井戸とされている。村びとは、正月の元旦の時に家族で訪れ、東に向い「トッシャカサディ、イルヤワカク（年を重ねて心は若く）」と唱えながら洗顔を行った。また、子どもが生まれるとこの井戸から水を汲んだり、稲や豆の豊作を願って拝んだりした。

**雷之御嶽【地図3】**

沖縄市立北美小学校の正門前に位置する。石碑には、「登川邑発祥之地」とある。1713年、赤嶺親方と呼ばれる風水見により、この場所から登川の村は現在地へ移動させられた。





ミーガー【地図3】

北美小学校の南東側に位置する。この井戸は、ムートゥガーが村はずれにあり、村びとは水汲みが不便であったので、村の近くへ水汲みの場所を求めた。それがミーガーのはじまりであった、との口碑が残されている。



印部土手【地図3】

登川公民館の北側に位置し、そこに土もりがある。村の図根点とされ、地籍図からでも確認できる。また、すぐ隣には、クムイ跡が残っている。



北の四方神【地図3】

印部土手の南西側に位置する。村の四方神は、俗に「ヨスミノカド」と呼ばれている。その横には、クムイ（溜池）を示すコンクリート製の箱が設置されている。もともとのクムイの場所は、カンジャーウカイであった。



西の四方神【地図3】

登川青年会館の西側に位置する。現在は小高い場所にある。俗に「フンムー」と呼ばれており、その音読みが四方神の背景を解くカギとなろう。

東の四方神【地図3】

登川公民館の北側に位置する。すぐ隣には、クムイ(溜池)跡が確認できる。

**南の四方神【地図3】**

登川公民館の南東側に位置する。かつてこの場所にもクムイ(溜池)があったが、道路の開発や屋敷の拡張工事に伴って消滅したようだ。現在は、1本のリュウキュウマツと石碑だけが残されている。

**神アサギ【地図3】**

村の中心地にあるこの祭祀場は、登川公民館の北側に位置する。神アサギでは、旧暦の5、6月のウマチーや6月カシチーの日に村の有志たちが集まり神を祀る。その裏側には、クラントーのウガンジュ(拝所)がある。村びとは「カミヤー」と呼んでいる。神アサギの北側には「ナカイケ」と呼ばれる溜池跡があり、防火用水として大事にされていた。

**火又神【地図3】**

登川公民館の北側裏に位置し、石灰岩のブロックを積んで造られた祠である。





分村碑【地図 3】

登川公民館の西側に位置する。石碑には、登川村が池原村から分かれ、現在地に移転した年代（1739年）とこの事業にかかわった人びとの屋号と名前が刻まれている。17世紀から18世紀にかけて沖縄では、盛んに行われていた集落の移動を知るうえで、大変に貴重な資料である。



ウズミグムイ【地図 3】

かつては、かなりの敷地を占めていたようだ。現在は、ゲートボール場などができ、グムイ跡がわずかながら残っている。グムイ跡には、水生植物が確認できる。ウズミグムイの役割は、「農作業用水、火災時の防火用水池、村落周辺イシヤマーへの風水上のヒーゲーシー」とされている。



スクブ御嶽【地図 3】

登川公民館の南東側に位置する。この山はカルスト残丘の一部であり、池原村落の拝所である。池原の自治会と有志たちは、旧暦11月11日のウタキマエの時にスクブウタキなどを巡拝する。この付近に池原の古い村があったとの口碑が残されている。



ウガンヌシー【地図 4】

知花グシクの北東側に位置する。この山はカルスト残丘の一部であり、「ムイグチヌウカミ」の拝所が設けられている。また、山の南側には知花のヌンドウンチ（神につかえるノロを輩出する家）もある。知花の神につかえる女性たちは、5月と6月のウマチーの前日にこの山でまつりに使うカブイ（冠）をつくる。

ユナガー【地図4】

知花のヌドウンチの東側に位置し、知花のなかで最も古い井戸とされている。俗に「ヌールガー」とか「ヌルクサイヌカー」と呼ばれている。昔は生活の用水や飲み水に利用し、現在は村の農作物の豊作・安泰の祈願や旧暦の8月14日の行事で拝まれていた。土地改良が行われる前は、井戸の南側に按司の馬を浴びせるクムイ（溜池）があった。

**火の神【地図4】**

ユナガーの南側に位置する。この拝所は知花自治会に管理されている。

**奉安殿【地図4】** **市指定文化財**

美里児童園（美里尋常高等小学校跡地）の一角に位置する。奉安殿は天皇・皇后の御真影（写真）を保管し奉る建物であり、火事や水害などの緊急の場合に職員は命がけて御真影を守るのが義務とされていた。戦時中は、戦火から御真影を守る為に命を失った校長先生もいた。現在の沖縄県において完全な形で残っている奉安殿は、2ヶ所ほどである。

**忠魂碑【地図4】** **市指定文化財**

美里児童園（美里尋常高等小学校跡地）の一角に位置する。忠魂碑は、国の為に戦争で犠牲となった兵士の魂を供養する意味で全国各地の学校や役場の敷地内に建てられた。県内において奉安殿と共に保存されている事例は沖縄市だけであり、平和を考えるうえでもきわめて重要な文化財である。



**ビジュル【地図5】**

池武当交差点の北側に位置する。沖縄自動車道の建設に伴いビジュルガマがあった山を壊わした。現在は、沖縄自動車道の東側の山に拝所を設けている。その祠には、当時のガマにあった鍾乳洞を安置し、松本や多くの人びとから祀られている。

**ミーヤウタキ【地図5】**

知花グシクの北側に位置する。この拝所は、新屋敷と呼ばれる人の土地に近いために「ミーヤウタキ」と呼ばれている。

**カンサチヤー(神アサギ)【地図5】**

知花グシクの北側に位置する。この広場は旧暦の5月15日と6月15日の行事に知花の古島へ遷拝するために拝まれる。その行事に参加する集落は、池原・登川・知花・松本である。現在の建物になる前は、かやぶきであった。かやぶき以前には建物はなく、祭りの際にクログの葉などで仮小屋が造られた。

**上ヌ殿毛(イヌトウヌモー)【地図5】**

知花のカンサチヤーの南西側に位置する。この広場には石製の祠がある。知花と松本の自治会と有志たちは、旧暦の5月15日と6月15日の行事に拝んでいる。

ウガンジュ【地図5】

知花グシクの中腹に位置する。この拝所は、知花の自治会や有志たちが1年間の閉めを拝む時に訪れる。

**鬼大城の墓【地図5】** **市指定文化財**

知花グスクの南側の丘陵地に位置する。大城賢勇は大柄で武勇にすぐれ、俗に鬼大城と呼ばれた。1458年、首里王府軍の総大将として勝連按司の阿麻和利を討伐し、その功績で越來間切の総地頭に任ぜられた。その後の政変で第一尚氏王統は滅び、鬼大城も知花グシクに追われ自害した。墓の形式は、名嘉真宜勝分類のいわゆる「岩穴囲い込み墓」である。

**夏氏大宗墓の石碑【地図5】**

成豊3(1853)年に夏氏の子孫が建てた碑文である。墓誌によれば、康熙55(1716)年に知花の夏氏の墓から美里の宮里村中間原の墓へ遺骨を移し、双方の墓を記したが、風水見の鄭良佐と儀親雲上は知花の墓の方が風水の良い場所と判断した。さらに知花の墓には鬼大城前後の遺骨もあった。それらの理由から知花村の人へ新しく墓を仕立て与え、移葬したという。

**祝女墓【地図5】**

鬼大城の墓の東側に位置する。村びとは「ヌールバカ」と呼んでいる。岩陰を利用して、前面を石積みにし、墓口をアーチ工法にしている。墓の形式は、名嘉真宜勝分類のいわゆる「岩穴囲い込み墓」である。ある葬式の時にヌールバカへ入った村びとは、約30基の歳骨器をみたという





カーグラー【地図5】

知花グシクの南側に位置する。この辺りは、比謝川の支流とユナガーの合流地点となっている。かつてはウフンダカリ村の人たちが使用していたが、松本へ移動された後は知花の人たちが利用した、と言われている。ニーガンヌールが仕立てた井戸であるために「ニーガンウカー」とか「イカンガー」とも呼ばれている。旧暦8月14日の行事で拝まれていた。



フクマガー【地図5】

知花グシクの南東側に位置する。村びとは、ウフンダカリの村があった時に利用されていたと口碑を伝えており、旧暦の8月14日の行事で拝んでいた。



ナーカントーイジュングラー【地図5】

知花グシクの南側に位置する。昔は川の側にあったが、現在は面影がなく、コンクリートの拝所となっている。この泉は、知花のウマチーの行事に参加したクディングワが着物を洗った場所、と言われている。旧暦の8月14日の行事で拝んでいた。



イヌカー【地図5】

知花橋の南西側に位置する。知花の集落の上側にあることから呼び名がつけられた。俗に「ハラタチガー」とか「ハルダチガー」とも呼ばれている。昔は石積みの立派な井戸であったが、河川の工事で壊されたようだ。池武当の村びともこの井戸を利用していた。現在の拝所は、平成3年に改修された。旧暦8月14日の行事で拝まれていた。

シチャウジュンガー跡【地図5】

下泉川橋の北側に位置する。この泉は知花と松本の簡易水道の水源地であり、昭和35年から平成6年まで生活用水として使われていた。もともと泉の西側の背後には、ゴーチと呼ばれる風水山があった。旧暦8月14日の行事で拝まれていた。

**メーヌカーガー橋【地図5】**

下泉川橋の南側に位置する。すぐ近くには、メーヌカーガーもある。この石橋は美里のカウンジャ橋や県内の石橋と比較するうえで興味深い。

**メーヌカーガー【地図5】**

メーヌカーガー橋の東側に位置し、現在はコンクリートのマンホールで形をとどめている。昔は子どもたちの遊び場であった。松本の人たちは、松本のウブガーとしてクンダガーの他にこのメーヌカーガーも拝んでいる。知花では、旧暦8月14日の行事で拝んでいた。

**シーシャー【地図5】**

知花公民館の東側に位置する。ウスデークの時には旗頭と獅子舞の踊りが奉納され、獅子舞たちは知花公民館（アシビナー跡）へ向って出発する。





アグリカー【地図5】

知花公民館の北東側に位置する。井戸の周辺は、屋敷地である。平成4年に改築されたようだ。村びとは、子どもが生まれた時に名づけで使う水や獅子の顔を拭く水をこの井戸から汲んだ。俗に「ウブガー」とも呼ばれ、旧暦8月14日の行事で拝まれていた。



クシヌカー【地図6】

白川駐屯地の南側に位置する。白川のヤードゥイ（屋取）と呼ばれる村びとたちが使用していた。



クカー【地図6】

白川駐屯地の南側に位置する。現在は形が残っていない。白川のヤードゥイ（屋取）と呼ばれる村びとたちが使用していた。



アカイジマー【地図6】

白川駐屯地の南側に位置する。この一帯は湧水の水量が豊富であり、野鳥や小動物が多く確認される。白川のヤードゥイ（屋取）と呼ばれる村びとたちが使用していた。

ソナンウガンジュ【地図7】

松本公民館の北東側に位置する。旧暦5月15日と6月15日のウマチーの時に自治会は、知花グスクから帰ってくるソナンウガンジュで拝む。

**クンダガー【地図7】**

まつもと幼児学園の南西側に位置する。村びとは、集落の創設と関係が深い井戸であると口碑を伝えている。その理由から村びとは、子どもが生まれた時に産湯に使う水を汲んだ。また、この湧き水は豊富な水量を保持し、苗代田の水源として重要されていた。

**カフンジャー橋【地図8】 市指定文化財**

沖縄県立美咲養護学校の西側に位置する。明治末期から大正の初期にかけて造られた石橋である。橋の移り変わりを知る上で大変に貴重な建造物である。この橋にまつわる口碑も残っている。

**ビジュール【地図8】**

沖縄県立美咲養護学校の南側に位置する。拝所は丁寧に整備され、美里村落の北側の境界にある。石碑には「んざとびじゆる」とある。



**イジュンガー【地図8】**

沖縄市立美里小学校の東側に位置する。石碑には「泉川」と刻まれており、井泉の跡を残している。

**印部石【地図8】**

美里公民館の北側に位置する。この石は、村の原名の境界を示す。かつては多くの基準点となる石があったようだが、現在の美里に残っているのはこの印部石だけである。

**ジナンヌシチャヌカー【地図8】**

沖縄市立美里小学校の南側に位置する。この井戸の周辺は畑地である。住宅街のなかにひっそりと昔の風景を残している。

**キッチャガー【地図8】**

沖縄市立美里小学校の南側に位置する。この井戸は昔の風景を残しており、現在でも農業用水として利用されている。

ニーブガー【地図 8】

沖縄市立美里小学校の南側に位置する。俗に「サークヌカー」と呼ばれ、井戸の周辺には畑地があり、住宅街のなかにひっそりと昔の風景を残している。井戸の周辺には敷石と思わせる遺構が残っている。

**ヒンジャン御嶽【地図 8】**

美里公民館の北側に位置し、イリアトーヤマと呼ばれる小高い山のなかにある。イリアトーヤマに対置して、向かいにはあがりアトーヤマがある。しかしながら、この山は、住宅の拡張工事などで昔の風景はとどめていない。

**ヒチャヌウカー【地図 8】**

イリアトーヤマの南東側に位置する。この井泉はカルスト残丘の下に湧水があり、村びとたちが押みの対象としている。

**ヒージャーガー【地図 8】 市指定文化財**

美里公民館の北東側に位置する。村では、ヒージャームンチュウが使用した井戸と言われている。現在の井戸は、昭和29年に改修されたようだ。この泉から流れ込んで小川やむかいの溜池の底に溜まった土は農家の肥料として利用された、と言われている。





ヒージャー池跡地【地図8】

ヒージャーガーの南側に位置する。現在は、美里自治会ゲートボール場となっており、その片隅に拝所が設けられている。セメントでつくられた石碑には、「『元』樋川池」と「馬口口」とある。



シリーモーガー【地図8】

ヒージャーガーの北東側に位置する。現在は、昔の風景をとどめておらず、コンクリート製の箱のみが置かれている。



セークガー【地図8】

市指定文化財

美里公民館の南側に位置する。堰は、堅固な石積みで、ふたつの取水溝と四角いぞく穴がある。戦後に改修された記録はなく、往年の技法を伝える重要な文化財である。ヒージャーガーとともに美里集落の発祥にかかわる井泉だと伝えられている。建造年代は不明である。



道路元標【地図8】

松水眼科の西側に位置する。昔は美里村役場があった。その敷地内に美里村道路元標が残っており、地理学の情報源としてもっとも重要な遺構である。

メーデーガー【地図 8】

美里公民館の東側に位置する。この井戸の周辺は住宅街であり、子どもたちの遊び場となっている。

**地頭代火之神【地図 9】**

美里公民館の南側に位置する。石碑には、「美里間切地頭代火の神ガー」と記されているが、井戸の痕跡は確認できない。

**ヌンドゥルチャー【地図 9】**

美里公民館の南側に位置する。ヌンドゥルチャーは「美里之殿」とされており、戦前に造られた赤瓦の建物である。

**チンガーアタイ【地図 9】**

美里公民館の南東側に位置する。コンクリート製のブロックで造られた井戸である。俗に村びとは「ウカー」とも呼んでいる。





グシクヌニー井戸【地図9】

美里公民館の南東側に位置する。俗に村びとは「ソニーヌチンガー」とも呼んでいる。井戸の横には香炉があり、南東の方向へ向っている。



美里グシク【地図9】

美里公民館の南東側に位置する。現在は拝所があり、その祠なかには「美里御城」と記されている。拝所の香炉は、北東側に向いている



尚宣威王の墓【地図9】

沖縄県立中部工業高等学校の南西側に位置し、小高い山の中腹にある。墓の型式は、名嘉真宜勝の分類の「岩穴囲い込み墓」である。尚宣威王は、第二尚氏尚円王の弟で、尚円王が即位すると越来間切の総地頭に任ぜられた。それで越来王子と称された。1476年に尚円王が亡くなり、尚宣威は1477年に王位を継いだ。在位6ヶ月にして王位を尚真にゆずった。その後、越来間切へ隠遁し、同年8月に没した。



トゥンチヌスバヌヒヌカン【地図9】

沖縄県立中部工業高等学校の南側に位置する。尚宣威王の子孫が暮らしていた場所と口碑が伝えられている。現在は、湧川門中の子孫たちが拝んでいる。

當原ガー【地図9】

沖縄県立中部工業高等学校の南東側に位置する。村びとは、正月の元旦にこの井戸から若水を汲んでいた。現在は、住宅街のなかにコンクリート製のマンホールが設置されている。

**ワクガー【地図9】**

杉の子保育園の西側に位置する。尚宣威王の子孫であるワクガー（湧川）按司が使用していた井戸と石碑が伝えられている。

**西森公園の拝所【地図9】**

越來小学校の西北側に位置する。村びとは、この山のことを「ニシムイ」と呼んでいる。祠のなかには「ウガン南方御嶽」「ウガン西之御嶽」「西森之御嶽」と記された石碑がある。かつて現在の越來中学校の敷地内には、「ニシヌウタキ」「フェーヌウタキ」「ウフウタキ」があった。中学校の建設に伴い現在地へ移動させられた。

**ヒジュールガー【地図9】**

越來小学校の北側に位置し、現在は住宅街のなかにひっそりと残されている。





拝領の白樺【地図9】

越来小学校の北側に位置する。越来王子時代(1418年)に尚泰久王は、世利久との間に子どもができた。その記念としてみかんと白樺の木が植えられた。沖縄戦でみかんの木はなくなり、白樺は幹に樞砲射撃を受けたにもかかわらず、根が残り再生した。しかし、白樺は平成9年2月に枯れてしまった。現在は、その木の2代目が屋敷地内と隣のターチューガーに植えられている。



ターチューガー【地図9】

越来小学校の北側に位置する。俗に「イシガー」と呼ばれている。現在の井戸は、昭和3年に越来村が模範衛生集落に設定されたのを機会に造られた。水汲み用には、吸い上げポンプが2台取り付けられたために「ターチューガー」と呼ばれるようになった。村びとは、正月の元旦の時にこの井戸から若水を汲んだり、子どもが生まれると産湯用の水も汲んだりした。



ヌルドゥンチガー【地図9】

越来小学校の南東側に位置する。現在は住宅街に囲まれ、セメント製のマンホールを設置している。



御殿川ヌメヌメカー【地図9】

越来小学校の南東側に位置する。現在は住宅街に囲まれ、セメント製のマンホールを設置している。

ヌルドウンチャー【地図9】

越来小学校の南東側に位置する。コンクリート建築で大きな拝所を建てたが、祠のなかには香炉だけしかみられない。

**越来グシクの拝所【地図9】**

越来小学校の南側に位置する。越来グシクは、15世紀ごろの尚泰久王や尚宣威王が管轄していた場所とされる。そして、沖縄戦などで遺跡の大部分が破壊された。村びとは公園の南側にある拝所を「ギークヌウガンジュ」と呼んでいる。祠のなかには「火の神」「越来城殿」と刻まれた石碑がある。越来のウマチーの行事などで拝まれている。

**大工廻の拝所【地図10】**

尚宣威王の墓の西側に位置する。小高い森のなかに「久保御嶽」「井戸」「大工廻御嶽」などが設けられている。これらの拝所は、倉敷ダム建設の開発などで現在地へ移動させられた。

**ヤシマガー【地図10】**

沖縄市中央公民館の西側に位置する。カルスト残丘の山の下にあり、それを村びとは「ヤシマガー」と呼んでいる。井泉の近くには、八重島貝塚も立地する。





ムトウジマガー【地図 11】

越来の児童公園の南側に位置する。安慶田の集落が現在地に移動する前に村びとが利用した井戸と言われている。俗に「クシバルガー」とも呼ばれている。



安慶田の拝所【地図 11】

安慶田小学校の北西側に位置する。小高い丘の上に拝所が設けられており、祠のなかには「火の神」などの石碑がある。



アグリガー【地図 11】

安慶田小学校敷地内の北東側に位置する。村びとは、子どもが生まれた時にこの井戸から水を汲み、子どもへ名づけを行った。



アグリヌウタキ【地図 11】

照屋公民館の南東側に位置する。拝所は「ムート屋」の仲宗根がハワイに移住する理由で管理ができなくなった。そこで村びとは、現在地へ拝所を設けた。

アガリヌカー【地図 11】

照屋公民館の西側に位置する。村びとは、子どもが生まれた時に産湯の水をこの井戸から汲んできた。また、正月の元旦には若水も汲んだ。

**ビジュル【地図 11】**

宮里の東児童公園の南東側に位置する。宮里原にあったアガリガー、城前町前原のティカガーやミーガー、その他にシリーガーやウフィガー、拝所6ヶ所を1998(平成10)年に現在のビジュルへ移し合祀された。俗にこの場所は、「ピージュル」とか「ビジュル」と呼ばれている。

**アシビナー【地図 12】**

中の町公民館の南東側に位置する。広場では、村びとたちが熊スガシー(旧7月16日)とエイサー、ウステーク(旧9月18日)を奉納する。1956年に上地の各地にあった「にしぬびじゅる」「うがん」「まちしごー」「めーぬびじゅる」「ひぬかん」「あがりゆうーうたき」「あがりゆうひぬかん」をアシビナーへ合祀された。その拝所では、上地郷友会の有志たちが区民の繁栄と健康を願って、旧暦の1月2日のハチウビー(年始まりの祈願)に伴ひ、フトッチヌウガン(年終わりの祈願)も旧暦12月24日に行われている。

**ウフガー【地図 12】**

中の町公民館の南東側に位置する。正月元旦の若水や子どもが生まれた時は、このイジュン(湧水)から水を汲む習わしになっていた。戦後は銭湯の水源として利用された。復元の竣工は、1979年2月5日に行われたようだ。





イジュンガー【地図 12】

中の町公民館の南東側に位置する。ユーザガーの水流をたどっていくと、インジュンガーがある。これらは、比謝川の支流になっている。この湧水も上地の人たちの生活用水であった。



ユーザガー【地図 12】

中の町公民館の南東側に位置する。上地の人たちは、「ユーザガー」とも呼んでいる。このイジュン（湧水）から生活に必要な水を得ていた。戦後は銭湯の水源として利用され、1999年に改修の整備が行われた。



ムルガー【地図 13】

沖縄市役所の北東側に位置する。この井泉は、琉球石灰岩と泥岩の間から水が湧き出ている。かつてのムルガーの東側には、苗代田や水田が広がっており、村びとから重要な場所とされていた。現在は、農業用水として利用されている。



室川井泉【地図 13】

市指定文化財

沖縄市役所の北東側に位置する。大旱ばつに見舞われても水が枯れなかったと言われ、村びとは、「ムルカーガー」と呼んでいる。現在の井泉は、昭和3年に改修された。村では、旧暦8月10日に拝んでいる。

照又井【地図 13】

仲宗根御願の東側の崖に位置する。琉球石灰岩と泥岩の間から水が湧き出ている。村びとは、「ティラマタガー」「ティラガー」「上地ガー」とも呼び、村では旧暦8月10日の行事に拝んでいる。


あがりゆう一拝所跡【地図 13】

戦前は、「ティーラ・マタバル」「ティーラ・シツタイ」「あがりゆう御嶽」と呼ばれていた。上地の先人たちが生活していた跡地であった為に上地の拝所のひとつとされていた。上地の各拝所を1956年に現在のアシビナーへ合祀した。1997年に上地郷友会の有志たちは、「先人たちの思いを馳せるゆかりの地」という目的で石碑をたてた。


仲宗根ウガン【地図 13】

沖縄市役所の南東側に位置する。この広場一帯は、「ウンサクモー」とも呼ばれており、村では5月ウマチーなどに拝んでいる。また、地頭代火之神も祀られている。


ミーガー【地図 13】

胡屋自治会館の敷地内にある。俗に「ウフガー」とも呼ばれている。胡屋の集落でもっとも新しく造られた井戸である。昭和6年にポンプ式に改修され、馬の水浴びや村の飲料水として多く利用されていた。村では、旧暦8月10日の行事に拝んでいる。




石碑【地図 13】

諸見小学校の東側の十字路に位置する。石碑は、胡屋の集落の西側にあり、悪霊などがやって来るのを防ぐ意味で、大正9年に設置された。刻まれている文字は、『鎮宅霊符縁起集説』の鎮宅霊符七十二道と新宮館発行の『神道神言妙術秘法大全』に掲載されているものと同じ、と考えられている。


シーサー【地図 13】

コザ中学校の南西側に位置する。メーヌマータッチューと呼ばれる広場では、集落の南側に向けて石製の獅子像が設置されている。この広場は、「グングッチモー」とも呼ばれていた。かつて、フンジルー跡を中心に集落の周辺には、辟邪の石などを置いていたようだ。


アグリ森【地図 13】

コザ中学校の南側に位置する。この高台は、通信施設などの敷地が胡屋の村びとへ返還され、各地にあった獅子舞の安置所や拝所などを1980年にアグリ森一帯に移設された。その森には、胡屋の御嶽や神を祀る広場の殿毛、慰霊之塔や獅子舞の安置所があり、旧暦8月10日にウスデーク、同月の15日に獅子舞が奉納される。その他の行事でも御嶽を拝む習わしとなっている。


フサトガー【地図 13】

コザ中学校の南東側に位置する。俗に「フサトガー」とも呼ばれ、村びとは子どもが生まれた時や正月の元旦に水を汲んだり、旧暦8月10日の行事に拝んだりした。水道ができる前は、村の飲料水として多く利用されていた。

ナチチガー【地図 13】

コザ中学校の南東側に位置する。フサトガーよりも低い丘陵地にあり、かつて一面には水田や苗代田があり、村では重要とされていた。村では、旧暦8月10日の行事に拝んでいる。

**イリーガー【地図 14】**

自動車道路の環状線の工事に伴いマンホールでかさ上げされた井戸は、沖縄市営闘牛場の南側に位置し、俗に「クシントーガー」とも呼ぶ。村びとたちは、「落ち武者がイリーガーの水をたよって住み着いた。」と口碑を伝え、山内の発祥の地としている。

**シリカーヌカー【地図 14】**

沖縄自動車道の工事に伴い沖縄少年院の西側に移された井戸は、俗に「イーザクヌカー」とも呼ぶ。村びとは、旧暦12月24日の屋敷ウガンの際に拝んだり、元旦の若水の際に水を汲んだりした。

**トゥイヌフヌウタキ【地図 14】**

1974年の市営住宅建設がはじまる前の拝所は石造りの祠であったが、建設後はコンクリートの祠に改修された。その時に「シマブクアタイ」と呼ばれる場所にあったクムイ(溜池)と山内昌信の屋敷の火ヌ神は、トゥイヌフヌウタキへ合祀された。旧暦8月10日の行事に村びとはウステークを奉納し、祈願する。





メーヌカー【地図 14】

山内のアガリ(東側)で暮らす村びとは、「イリーガー」と呼んでいる。明治時代に造られた井戸は石圍いのかたちをしていたが、現在はコンクリートの井戸に改修されている。村びとは、子どもが生まれた時や元旦の正月の時に水を汲んでいた。



マーニヌネカタ【地図 14】

お宮の東側に位置し、クロツグの植物がおおい茂っている。する。村びとは、「山内昌信が生まれて、まもなく捨てられた場所である。」と口碑を伝えている。旧暦8月10日のウスデークの時は、マーニヌネカタを村の女性だけしか拝まない。



お宮【地図 14】

お宮の敷地内には、中央に「山内大明神(山内昌信)」、むかって右側に「ウタキ」と「慰霊之塔」、むかって左側に「火之神」が祀られている。また、「越来節の碑」や「20年運動の碑」も設置されている。旧暦の8月10日の行事は、山内昌信をたたえてウスデークを奉納している。



アシビナー【地図 14】

山内自治会館の敷地になる前は、凹地の地形になっていた。その広場は村の諸行事を行う中心的な場所であり、旧暦8月10日のウスデークやハタスガシーなどが奉納される。旧盆やエイサーのシーズンの時になると、村の青年たちはエイサーを練習する。

メーアガリガー【地図 14】

山内のイリー(西側)に暮らす村びとは、「アガリガー」と呼んでいる。また、「メーヌカー」とも呼ばれている。自治会は、旧暦の12月24日の屋敷ウガンや8月10日のウスデークの時に拝む。村びとは、子どもが生まれた時や元旦の若水の時に水を汲んでいた。

**ナカマチガー【地図 14】**

いつの時代に造られたのかは知られていないが、ナカマチペーチンという人が造ったと言われている。沖縄自動車道の工事に伴い現在の場所へ移される前は、石囲いの井戸であった。この井戸の近くに暮らしている村びとは、子どもが生まれた時や元旦の若水の時に水を汲んでいた。

**タケーラビジュル【地図 14】**

かつては、ノロ(神を司る女性)の関わる行事が殿毛であったらしく、その時に村の娘たちはこのタケーラビジュルで控えた。また、娘たちはノロや村の神へ奉納する踊りをその拝所で練習していたという。現在は、市の運動公園施設地の建設に伴って、諸見里のお宮へ合祀されている。

**メーヌカー【地図 14】**

上武川原にあったイリスカーとナカヌカーは、市の運動公園施設地の建設によって、現在のメーヌカーへ移された。とくにメーヌカーはウプガーとも呼ばれ、1945年頃に正月の若水や出産の時の水をこの井戸から汲んだ。1955年頃から個人経営の簡易水道や銭湯の水源地となった。旧暦9月吉日のミジナディーの時に拝まれる。





ヤマガーカー【地図 14】

旧暦 9 月吉日のミジナディーの時に拝まれる。



フサトウガー【地図 14】

旧暦 9 月吉日のミジナディーの時に拝まれる。



お宮【地図 14】

拝所の敷地内には、もともと慰霊之塔があった。しかし、市の運動公園施設地の建設に伴って、村の各地にあった森城ビジュル・松下丘ビジュル・竹園ビジュル・巫女火神・地頭火神・セークヌヤー・根神・諸見里村大殿内・ヌール火の神・セークヌヤー火の神が合祀された。



メーヌハラガー【地図 14】

旧暦 9 月吉日のミジナディーの時に拝まれる。

創元之宮【地図 15】

諸見里の創始者たちの墓は、もともと久保田原の東・中・西、石迫原の東・西、前迫原、上武川原の7ヶ所にあったという。それらの墓は戦争で壊され、軍施設内にあった理由で、1961年に字とマチジョウ(松門)の人たちが現在の場所へ移し、お宮として祀った。

**ソンドガー【地図 15】**

胡屋の集落の南側に位置する佐運田原は、屋取の集落があった。その村で暮らしていた人たちが利用していた。

**ソージガー【地図 15】**

諸見里の自治会や有志たちは、旧暦9月吉日のミジナディーの時に拝んでいる。

**ヒャーナー【地図 15】**

この拝所は、普天間宮へ遥拝する場所とされている。



**シーサー【地図 15】**

大きなウスクギー(アコウ)の木の根元に琉球石灰岩で造られたシーサーがあり、津堅島に向けて設置されている。

**ウガン【地図 17】**

拝む日は、旧暦の5月15日、6月の15日と25日、9月9日、12月24日である。

**与儀御願所【地図 17】**

村びとは、拝所がある辺りを「ヤマグラー」と呼んでいる。西北にある拝所を「ウィースヤマグラー」で、南東にある拝所を「シチャヌヤマグラー」と呼んでいる。これらの拝所は『琉球国由来記』(1713年)にも記載されており、旧暦の5月15日、6月15日、6月25日、12月24日に拝まれている。南東の拝所付近にある井戸は「ヤマグラーガー」と呼ばれている。さらにこの森は、与儀に人間が初めて住み着いた場所と伝えられ、「ナコウジマ(名幸島)」と呼ばれている。

**アナガー【地図 17】**

はじめて村にやってきた与儀の祖先たちは、この湧水から生活の水を得たと言い伝えられている。村びとは、「ワクガー」とも呼んでいる。現在の井戸は、昭和52年に改築されたようだ。現在は、旧暦8月10日に拝まれている。

アシビナー【地図 17】

旧暦6月15日の祭りに子どもたちがシマズモー(沖縄の角力)を行う。

**上殿【地図 17】**

与儀遺跡の中に上殿がある。与儀を創始した仲加の祖先が暮らした場所と言われている。この拝所は旧暦の1月1日、5月15日、6月15日、6月23日、7月17日、8月10日、9月9日、11月10日、12月24日の行事で拝まれている。現在の祠は1969年に改築されたようだ。とくに11月10日のシマカンカーは、この辺りを境に豚肉がついた左縄を吊るす習わしになっている。

**アタンジャガー【地図 17】**

村びとは、「アダンチガー」とか「アカンジャーガー」とも呼んでいる。旧暦8月10日に行われるカーの拝みでは、祀る井戸のひとつとされている。

**トニーヌカー【地図 17】**

現在は、空き地内にある。旧暦8月10日のカーウガン(井戸の拝み)の行事で拝む。





防空壕跡【地図 17】

与儀の村は、地質が二一ビである。二一ビの地質は、比較的掘りやすい。そのために与儀では、防空壕や墓として利用されている。



トニー【地図 17】

獅子舞を踊る場所とされている。他にも旧暦の1月5日、5月15日、6月15日、6月25日、9月9日、12月24日に拝まれる。広場の奥側にはカミヤー（神を祀る屋敷跡）があり、火の神などが祀られている。村びとは、この地を「ナーカアサギ」とも呼んでいる。仲加の祖先が住居を構えた場所であると伝えられている。



ヒーケーシー【地図 17】

村びとは、「イシガントウ」とも呼んでいる。その石柱は屋敷内にあり、南西側（村の東側）を向いている。石柱の表面には、「□□泰山石敢當」と記されている。



ウブガー【地図 17】

村びとは、「キヌガー」とも呼んでいる。正月の若水や子どもが生まれた場合は、この井戸から汲む習わしになっていた。現在は、旧暦8月10日に拝まれている。

石碑【地図 17】

石敢当のように畑地の隅に置かれている。二一ピ石でつくられたその石碑には、「□□□西方 廣 □ 百羅無」と記されている。なぜ、この位置に石碑が置かれ、どのような意味があるのかは知られていない。

**火の神【地図 17】**

公民館の北側に位置する。この火の神は、シマカンカーの日に拝まれる。その理由は村びと全員がこの場所へ集まり、豚を殺し食べたからだという。

**ジトヤー【地図 17】**

渡口の屋敷跡の片隅に祠がある。地頭代の役人が暮らしていたと言われている。村びとは、「ジトヤー」とか「シルドゥンヤー」と呼んでいる。拝む日は、旧暦の1月1日、5月15日、6月15日、6月25日、9月9日、12月24日である。

**イヌモー【地図 17】**

村の北東側にある高台には、村の慰霊塔と知念村へ遥拝する拝所がある。村びとは、「知念大屋」とも呼んでいる。現在、拝所の香炉はひとつである。本来はふたつなければいけない。その理由は、ひとつの香炉から知念グスクと知念大屋へ、もうひとつの香炉から玉城のミントンとミフダーへ遥拝するためだと言われている。旧暦の5月15日、6月の15日と25日に拝む。





渡口の屋敷跡【地図 17】

渡口の祖先に按司がいたと伝えられている。その屋敷跡は、旧暦の1月1日、5月15日、6月15日、6月25日、9月9日、12月24日に拝まれている。



クガニチュー【地図 17】

村びとは、「クガニツツー」とか「クガニツー」とも呼んでいる。この拝所は旧暦の5月15日、6月15日、6月25日、9月9日、11月10日、12月24日に拝まれている。戦前までこの拝所の左側には海石で造られたシーサーがあったという。それは、クガニチューと同様に「魔よけの神様」として信じられたようだ。とくに11月10日のシマカンカーの行事は、祠を境に豚肉や骨がついた左縄を吊るす慣わしになっている。



ウルグチガー【地図 17】

村びとは、この井戸の当て字を「下口井」としている。旧暦8月10日のカーウガン（井戸の拝み）の行事に拝む。



ウガン【地図 17】

ウガンヤマと呼ばれる丘陵に位置する拝所である。村の自治会や有志たちは、旧暦の毎月1日に拝む。

トゥングワー【地図 17】

ウフドゥンの北西 70 m に位置する。俗に村びとは、「ニバンドゥス」とか「クガニドゥス」とも呼ばれている。村の自治会や有志たちは、旧暦の毎月 1 日に拝む。

**シーシャー【地図 17】**

イリー門中のカミヤー（神を祀る屋敷）の敷地内に位置する。獅子舞は、旧暦の 7 月 17 日に演じられたが、最近では盆踊りの際に行われている。

**ウフドゥン【地図 17】**

比屋根公民館の北側にあるオシアゲムイ（森）の頂上に位置する。その森は、『琉球国由来記』（1713 年）に「オシアゲ森、神名、オソクヅカサノ御イベ」と記されている。村の自治会や有志たちは、旧暦の 6 月ウマチーや獅子舞の行事や毎月 1 日に拝んでいる。

**アシビナー【地図 17】**

オシアゲムイの中腹に上仲門門中屋がある。その屋敷の東側に位置する。この広場には、慰霊之塔、カークワーやヒヌカン（火の神）の拝所がある。



**拝所【地図 17】**

比屋根公民館の西側に位置する。村の自治会や有志たちは、旧暦の毎月1日に拝む。

**ジョーヌスバ【地図 17】**

比屋根公民館の北東に位置する。村の自治会や有志たちは、旧暦の毎月1日に拝む。

**ウフガー【地図 17】**

マースヤームイと呼ばれる森の北側裾野に位置していた。しかし、土地の区画整理により50 m北に移設された。村びとは、子どもが生まれた時や元旦の若水の時に水を汲んでいた。俗に「アガリガー」とか「カミガー」とも呼ばれている。

**オーグワービジュル【地図 18】**

県総合運動公園内の池の東側に位置する。オーグワー屋取の村びとが旧暦の9月9日に拝んでいた。

塩田跡地【地図 18】

沖縄県総合運動公園内奥武島の北側に位置する。泡瀬の塩田跡地は埋め立ての土地改良で失われたが、比屋根区内のものは残存している。その文化財は、祖先がどのような製塩を行っていたのかを知る上で大変に貴重である。

**魚垣【地図 18】**

沖縄県総合運動公園内奥武島の北東側に位置する。魚垣は、沖縄県内でも残っている例が少ない。比屋根区内にある魚垣は、泡瀬の干潟の立地をいかした構造をもっている。その文化財は、祖先がどのような生業を行っていたのかを知る上で大変に貴重である。

**イヌカー【地図 19】**

高原公民館の北西側に位置する。この井戸は村一番の水量が湧き出る。井戸の付近には、伊波普猷が高原に来た記念として記念樹がうえられていたらしいが、枯れてしまったと伝えられている。

**トヌヌ【地図 19】**

現在の公民館の敷地内に祠がある。この拝所では、ハタスガシや菊酒などの行事に村の安全祈願として拝まれている。





ウブガー【地図 19】

高原公民館の南西側に位置する。村びとは、正月の若水や子どもの誕生や死者の身体を清める時にこの井戸から水を汲んできた。



シードゥーモー【地図 19】

現在は、高原のゲートボール場になっている。その敷地内には祠があり、「チンジュのカミ」と呼んでいる。かつて、シードゥーという人が村びとたちに学問などを教えたので、その人物を称えて拝所を祀っている。



エークラガー【地図 19】

高原公民館の南西側に位置する。村の古老によれば、この井戸は生活の用水所であり、各家庭へパイプをひき、利用していた。



満喜世殿【地図 19】

高原公民館の南側に位置する。この辺りに高原の古い集落があったとされる。

マンジュウガンジュ【地図 19】

高原公民館の南側に位置する。小高い山のなかに拝所が2ヶ所確認できる。この山の辺りに高原の古い集落があったとされる。

**トゥンチャー【地図 20】**

エーヤマと呼ばれる森の近くに位置する。村の火の神を祀っている。旧暦6月25日の綱引きのときは、この拝所でウンサク（神酒）をつくり、ノロと呼ばれる神人へ捧げたという。

**ウサチガー【地図 20】**

戦前は、国道329号線にあったという。道路建設に伴って、1974年10月14日に現在の場所へ移されてきた。大里のなかで一番古い井戸とされている。村の人たちが飲み水として利用していた。

**エーガー【地図 20】**

エーヤマと呼ばれる森の片隅に位置する。村の人たちは、この井戸から若水を汲むという。俗に村びとから「オヤカー」とも呼ばれている。





エーヤマガー【地図 20】

エーヤマと呼ばれる森のなかに位置する。井戸の造りが三日月に似ていることから「ミカツキガー」とも呼ばれている。エーガーだけでは、村の生活用水が足りなくなり、この場所に井戸を設けたという。俗に「ウブガー」よも呼ばれている。



タキグサイ【地図 20】

エーヤマと呼ばれる森のなかに位置する。1942年ごろの大里の人たちは、毎月1日、この拝所を訪れ、海外で暮らす家族や親戚たちの健康と安全を願った。この場所での拝みが終ると、村の各拝所をめくったと言われている。



カンジャーガー【地図 20】

エーヤマと呼ばれる森のなかの南側に位置する。



地頭火又神【地図 20】

公民館からの西側の山へ登っていくと、大里のアシビナーがある。2000年から拝所を設けたらしい。祠のなかには、火の神の象徴である二ービの石が3個みられる。石碑には、「地頭火の神」とある。このアシビナーは、大里のシーシが踊る場所だとされている。

ソーリーガー跡【地図 20】

この井戸は、公民館の南西に位置する。大里で人が死ぬと、この井戸から水を汲んで死者を清めたという。

**シーシ【地図 20】**

大里公民館では、村のシーシ（獅子舞）とミルク神を祀った祭壇がある。シーシの踊りは旧暦の7月17日とされ、ミルク神も安置されている。

**ヌールガー【地図 20】**

ノルと呼ばれる神人が使用する井戸と言われている。諸見里からイリチリー（住み込み人）がやってきて、この井戸を利用して成功したので、俗に「ムルンザトガー」とも呼ばれている。

**カーウリーガー【地図 20】**

ウマアシビクムイの側に位置する。かつて、大里で子どもの出産があった場合は、この井戸に妊婦の母親や姉妹が訪れ、この水で出産時に汚れた衣服や布などを洗ったと言われている。





ウマアシビクムイ【地図 20】

現在は、屋敷地となっている。1960年ごろのクムイ(溜池)は、2mほどの深さがあったという。ここは溜池の跡地である。



ウサチウガンジュ【地図 20】

ウスクギーと呼ばれるアコウの木の下に位置する。ウサチとは、その木の由来であるという。この木の樹齢は約100年と考えられている。俗に村の人たちは、「ウサチヒヌカン」と呼んでいる。



ウガングワーヤマ【地図 20】

森の近くには、アマグシクモーや美東尋常高等小学校があった。しかし、戦後の土地改良によって、昔の面影はみられない。壊される前の山には防空壕もあり、大里の舟つき場もあった。阿麻和利からモトフミアガリを奪った鬼大城は、この場所で逃げ隠れたと言われている。どのような時にこの拝所を祀るのかは、不明である。



大里のウブガー【地図 20】

東桃原のアシビナーから北側の丘陵地に位置する。この湧水は、大里の人たちの井戸である。村の人たちから「ウブガー」と呼ばれている。子どもが生まれた時は、この井戸から水を汲んだ。赤子の成長を願って、額に水をつけてやった。

ヒーゲーシー【地図 20】

大里公民館の北東側に位置する。現在のクムイ(溜池)には水はみられない。クムイの跡として現存している。このクムイは、村のヒーゲーシー(火を返す)のために設置されたと言われている。

**アシビナー【地図 20】**

アシビナーの敷地内には、村の「土地の神」が祀られている。今の祠は、1976年に改築されたようだ。自治会は、旧暦の5月15日の5月ウマチーと9月9日の菊酒の際に拝んでいる。

**カーミンスクー【地図 20】**

村の共同の井戸である。子どもが生まれた時や正月の若水は、この井戸から汲む習わしであった。井戸の底が甕の底になっているために、「カーミンスクー」とか「カーミンシークー」(甕の底)と呼ばれるようになった。

**ソーリガー【地図 20】**

村で人が亡くなった場合は、この井戸から水を汲んで死者を清めたという。百姓だけが使う井戸とされていた。



**ソーリガー【地図 20】**

この井戸は、村の位の高い人だけしか水を汲んではいけないとされていた。

**知念大屋久の墓【地図 21】**

外形からみた墓は、名嘉真宜勝の分類の「掘り込み墓」である。知念大屋久が葬られていた墓だと口碑が伝えられている。知念の子孫たちは、1981年に新しい墓を造り、津嘉山森の墓碑・知念門中の石碑・知念大屋久に納められていた厨子甕(骨蔵器)を移した。しかし、1996年に厨子甕と津嘉山森の墓碑は、もとの知念大屋久の墓へ戻された。

**津嘉山森墓碑【地図 21】**

専門家によれば、万暦元(1573)年に設置されたと考えられている。「祀」が記された碑文の文字は鮮明であるが、内容を読みとるのは困難である。

**ヌサラシガー【地図 21】**

この井戸は、水がない。津嘉山の村びとたちが機織の布をさらした。現在は、宗教的職能者が祀る「五臓の神様」「布さしら井戸神・夫婦井(女神)」「唐船堂之碑(送迎の地)」と記された石碑が設置されている。

シーサー【地図 21】

石獅子は、村の北側の丘陵地に位置し、南の方角（海の方角）にむけて設置されている。戦後になって設置されたと言われている。

**イシビラ【地図 21】**

古謝の村とその北側の台地とつなぐ重要な道であったようだ。古謝は、クチャの土壌であるので、雨が降ると歩きにくかったのであろう。そのために石灰岩の石を敷いたと考えられる。

**ウーチュガー【地図 21】**

正月の時は、この井戸から若水を汲む習わしとなっていた。この井戸は、土砂崩れなどの影響で、1998年5月に改築の工事が行われた。旧暦8月15日のカーウガンでは、ウブガー、ミーガー、ウーチュガーの順序で拝まれている。

**ミーガー【地図 21】**

俗に「ヌールガー」とも呼ばれている。それは、ノロが髪洗いや身体を清めるために利用されたようだ。1935年4月に改築され、現在は農業用の水源として使われている。村の有志たちは、旧暦8月15日のカーウガンに拝む。





アシビナー【地図 21】

アシビナーの敷地内に「古謝之殿」がある。旧暦の1日と15日に村の有志たちは、村の無病息災と五穀豊穡を願って拝む。旧盆ではエイサーを踊る。日常のアシビナーは、古老たちのゲートボール場となっている。



ソーリガー【地図 21】

アシビナーの敷地内にある。この井戸は、死者の身体を清めるために使う水を汲む習わしになっている。また「ソーリガー」とも言う。



イーウガン【地図 21】

旧暦の1日と15日に村の有志たちは、村の無病息災と五穀豊穡を願って拝まれている。



カミヤー【地図 21】

改築以前のカミヤーは、石柱の上は瓦葺であり、壁のない建物であつたらしい。1960年ごろに改築された。改築前は、神アシャギの建物であつたと考えられる。現在のカミヤーのなかには、火の神と位牌が祀られ、獅子も納められている。石碑には、「古謝之殿」と記されている。村の有志たちは、旧暦の5月と6月の15日や旧暦の毎月1日と15日などに拝んでいる。7月16日の行事では、獅子舞を踊る。

ウブガー【地図 21】

村で子どもが生まれた場合は、産湯に使う水をこの井戸から汲んできた。1935年ごろ、井戸付近に村共同の風呂屋が造られた。その井戸は、風呂の水源として利用されていた。旧暦の8月15日のカーウガミに神人たちは、有志たちと共に村の健康と安全と発展の祈願を行っている。


地頭火之神【地図 21】

戦前は、イーウガンの敷地であったと言われている。戦後一時期に古謝の村が難民収容所となり、学校の敷地にもあった。石の祠は、戦後に仕立てられた。有志たちが拝んでいる。


クモコウタキ【地図 21】

俗に「ヒチャウガン」とも呼ばれている。『琉球国由来記』巻十四には「クモコ嶽神名オソクツカサノ御イベ」とある。美里のノロが祈願する場所であった。村の有志によって、旧暦の1日と15日に、村の無病息災と五穀豊穡を願って拝むことになっている。この日は、カミヤー、トゥン、イーウガン、ヒチャウガン（シチャウガンとも言う）、ビジュルの順に拝まれている。


イリヌシーサー【地図 21】

この石獅子は、「シシキューモー」と呼ばれている森へむけられている。この森は火山とみたくて、「火返し」「ヤナムンゲーシ」「ムラゲーシ」の意味で設置されている、との口碑がある。





メーヤードゥイカー【地図 21】

メーヤードゥイ（古謝の屋敷）の人たちが使用していた。それで「古謝以前のウブガー」とも呼ばれている。子どもが生まれた時や正月の若水は、この井戸から汲んだ。1996年6月30日に改築され、現在は農業の用水として使われている。



アガリヌシーサー【地図 21】

屋号でイリナカジョーと呼ばれている屋敷敷内に位置する。公民館前の道路の拡張工事に伴い1995年6月26日に移動され、現在の場所に南の方角の津堅ドゥー（津堅の海峡）へむけて設置された。戦前は、石獅子の後ろ側にクムイ（溜池）があった。それで「火返し」の意味もあると伝えられている。



ビジュール【地図 21】

大きなアコウの木の下に祠がある。俗に「ビジュール」とか「ビジュール」と呼ばれている。ビジュールの石は、ある村びとが海からひろってきたと伝えられている。村の有志たちは、旧暦の1日と15日や旧暦9月9日に拝んでいる。もしも、過去1年間に村で子どもが生まれた場合は、健康の祈願をする。昔、古謝に大きな津波があつて、丘の上からアコウの木の葉だけがみえたと言われている。



ガンヤー【地図 21】

古謝のガン（倉）は、泡瀬のセークトーマグラー（大工当間小）と言われる人によって、造られたようだ。村では、昭和27（1952）年ごろから火葬が採用されたようである。そのために死者をのせる倉は、昭和33（1958）年ごろまで使われていた。古謝のガンヤーは、県内でも数少ない風景をとどめている。

ウフシーのシーグラー【地図 21】

ウフシヌシーと呼ばれている大きな石灰岩の下には、戦後に避難民の収容所の人たちが利用していた井戸がある。現在は、農業の用水として使われている。俗に「ウフシヌカー」とも呼ばれている。

**ジョーミチャー墓【地図 21】**

この墓は、名嘉真宜勝の分類の「掘り込み墓」である。ただし、墓の外形の特徴は、墓口の前に3つの入口を設けている。3つの門があることで、村びとは「ジョーミチャーバカ」と呼んでいる。俗にその墓は「ムエーバカ（横合という組織で所有する墓）」とも言われているので、村のある知人や有志などで共有する墓であると考えられる。

**ビジュール【地図 22】**

泡瀬交差点の南東側に位置する。村びとは、「ビジュール」とか「ピージュール」と呼んでいる。泡瀬のビジュールには海にまつわる口碑が残されている。神体は、「海に浮いていた石」を祀っている。ビジュール参詣（ピージュールムヌメー）は旧暦5月5日と9月中の祭があり、祈願の内容は子安、子育て、旅の安全などである。現在は、一帯に鳥居と神殿が建てられており、各地からの参拝者が絶えない。

**メーヌウタキ【地図 22】**

ビジュールの東側に位置する。石碑には「前之御嶽 昭和五六年九月吉日 改築」とある。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。





ウブガー【地図 22】

メーヌウタキの東側には、ウブガーがある。井戸は形だけで水量はない。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。



火之神【地図 22】

ビジュルの東側に位置する。拝所の石碑には、「火之神」と刻まれている。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。



ミーガー【地図 22】

ビジュルの東側に位置する。拝所の石碑には、「新井泉 昭和六十年九月吉日 改築」とある。この井戸は形だけで水量がみられない。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。



アガリヌウタキ【地図 22】

ビジュルの東側に位置する。拝所の石碑には、「東之御嶽 昭和六〇年九月吉日 改築」とある。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。

カーヌモー【地図 22】

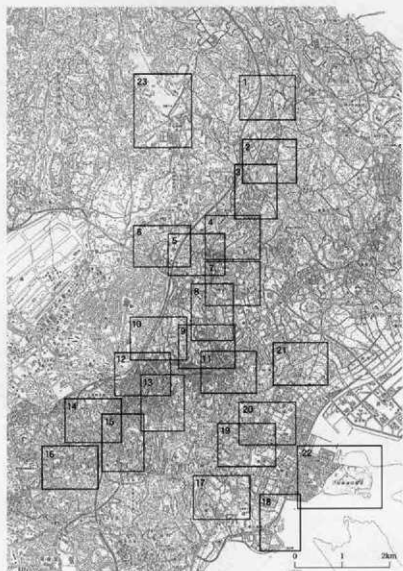
泡瀬の共同井戸である。この一帯は、20年ほど前まで畑地であったが、近年住宅街へと変わった。井戸の改修は、昭和60年である。まつりなどで村びとたちが巡礼する拝所のひとつとなっている。

**クボヌウタキ【地図 23】**

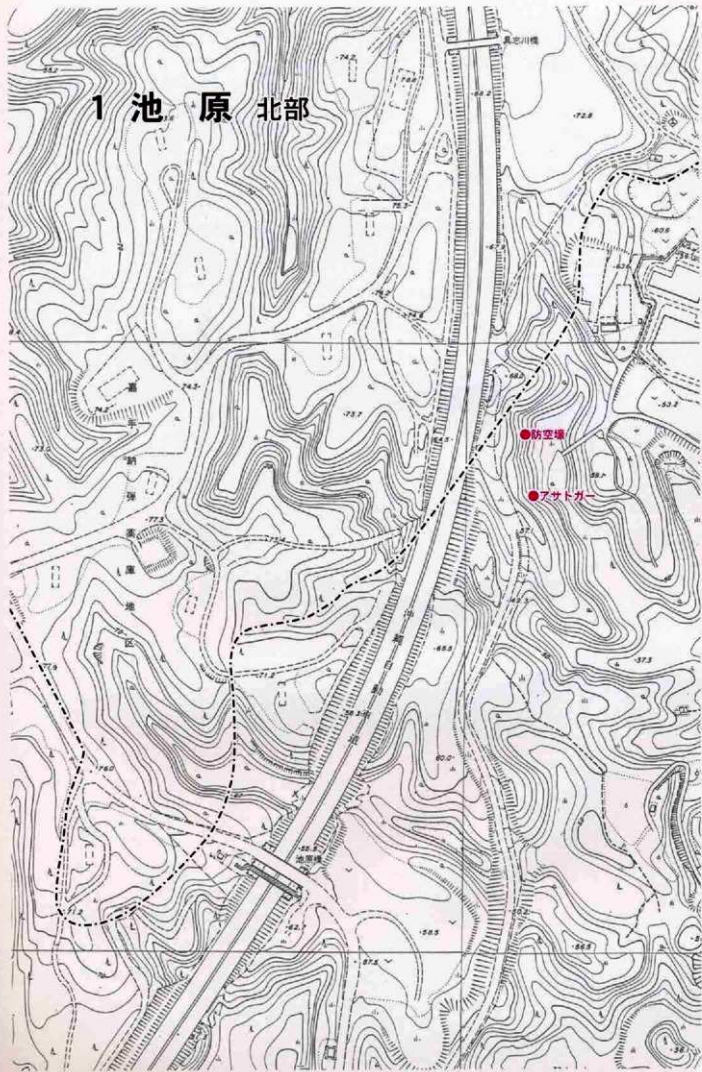
現在は、倉敷ダムの一部になっている。大工廻の拝所などは、八重島の森に移されている。その拝所から村びとたちは倉敷ダム一帯へ通拝しているようだ。

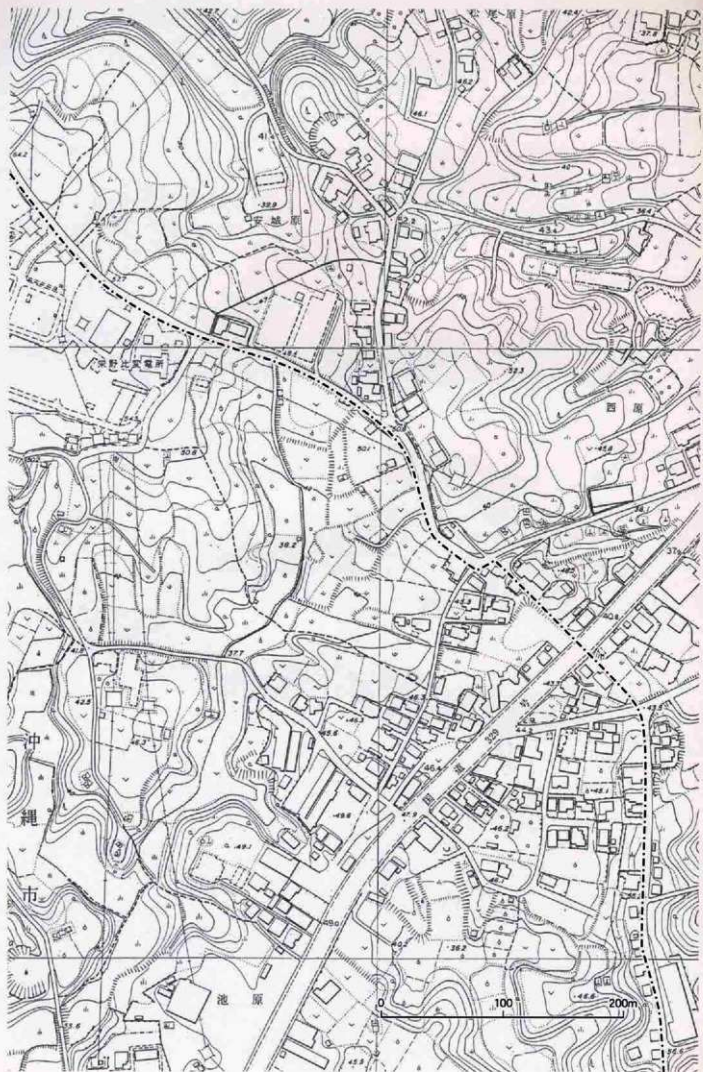


地図

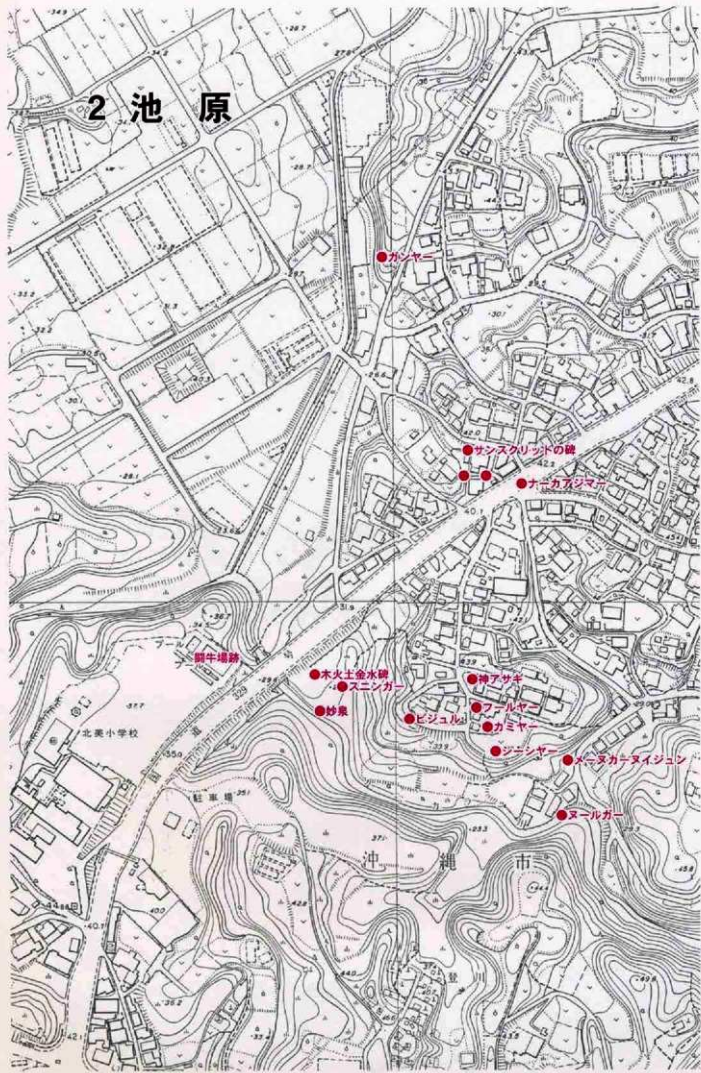


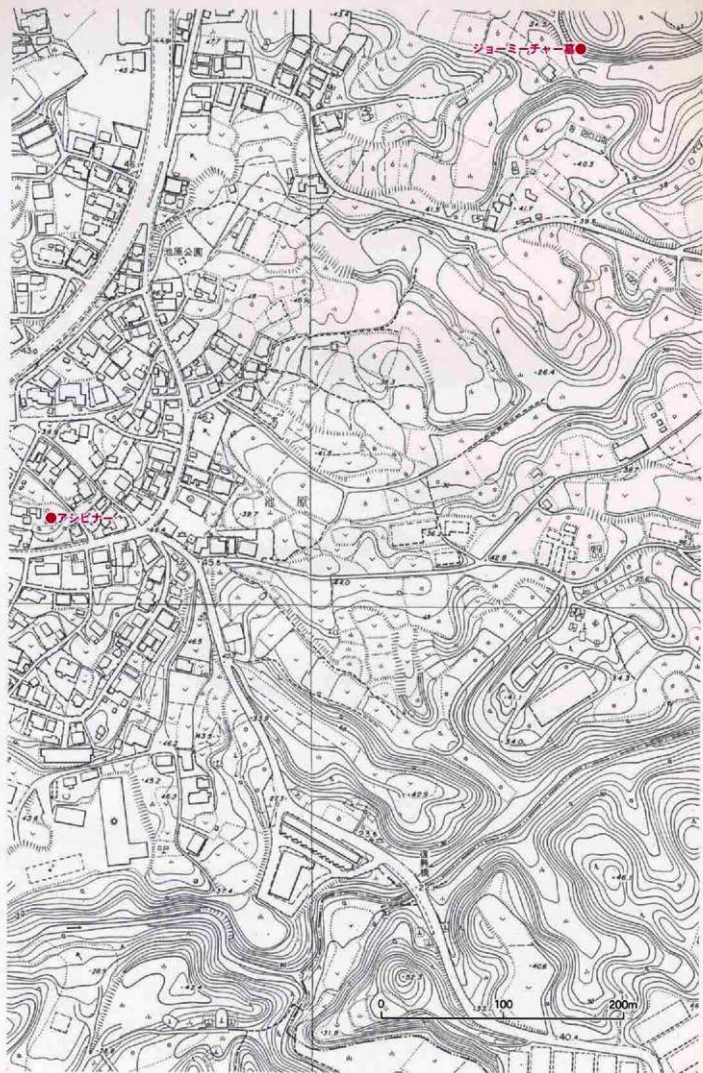
1 池原 北部



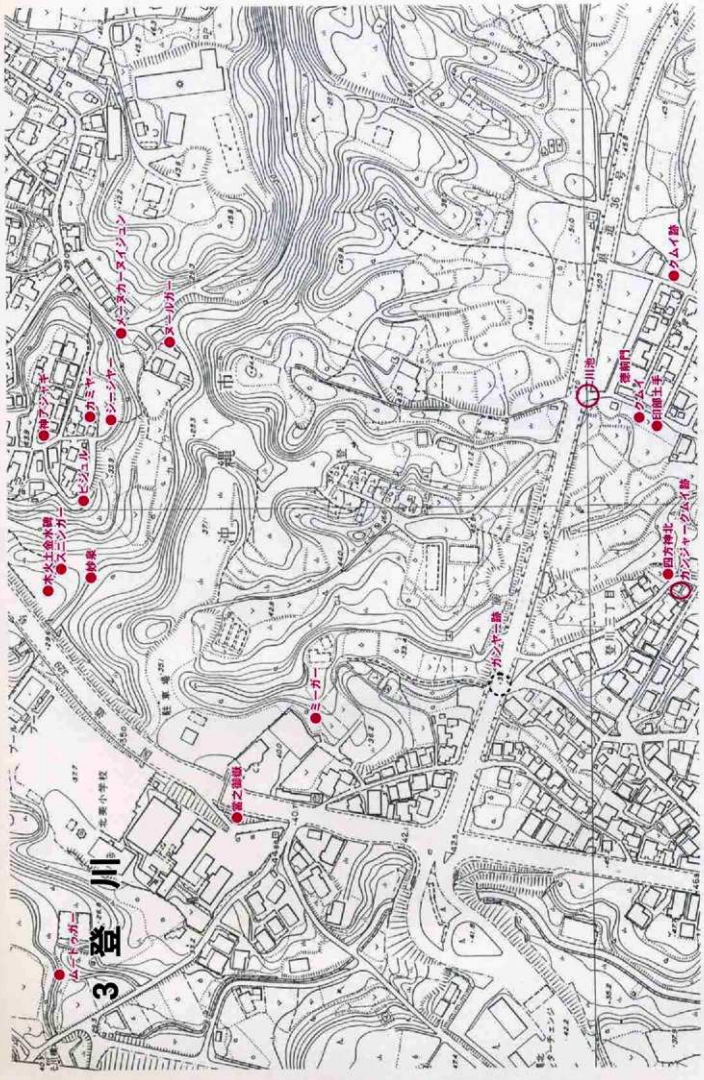


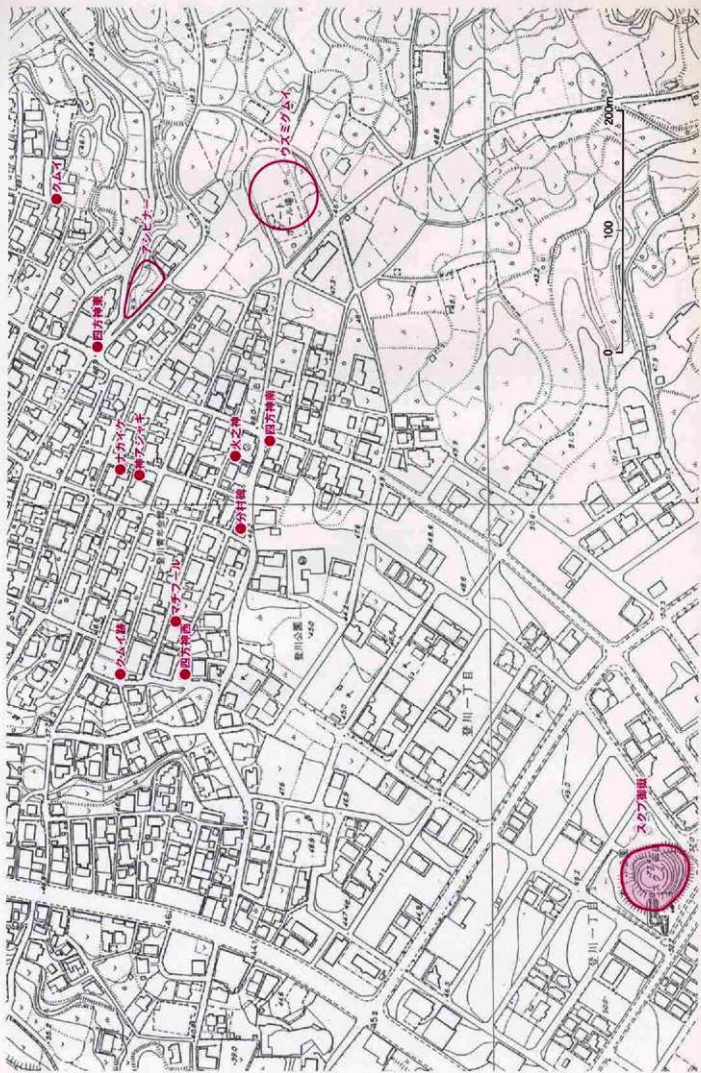
2 池原



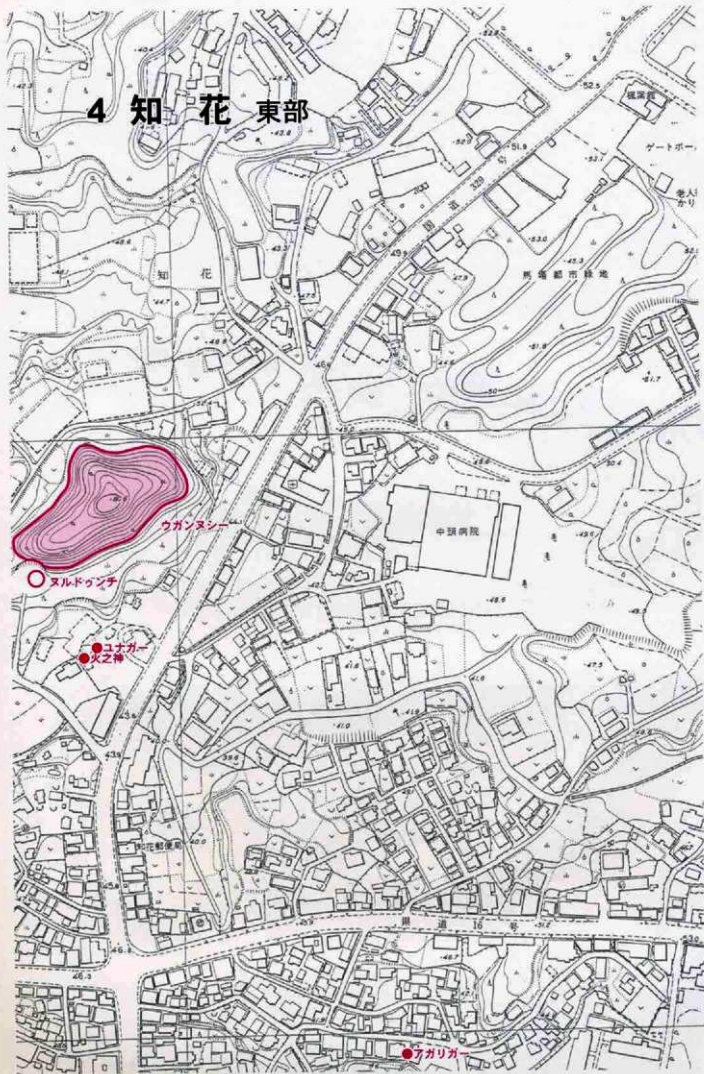


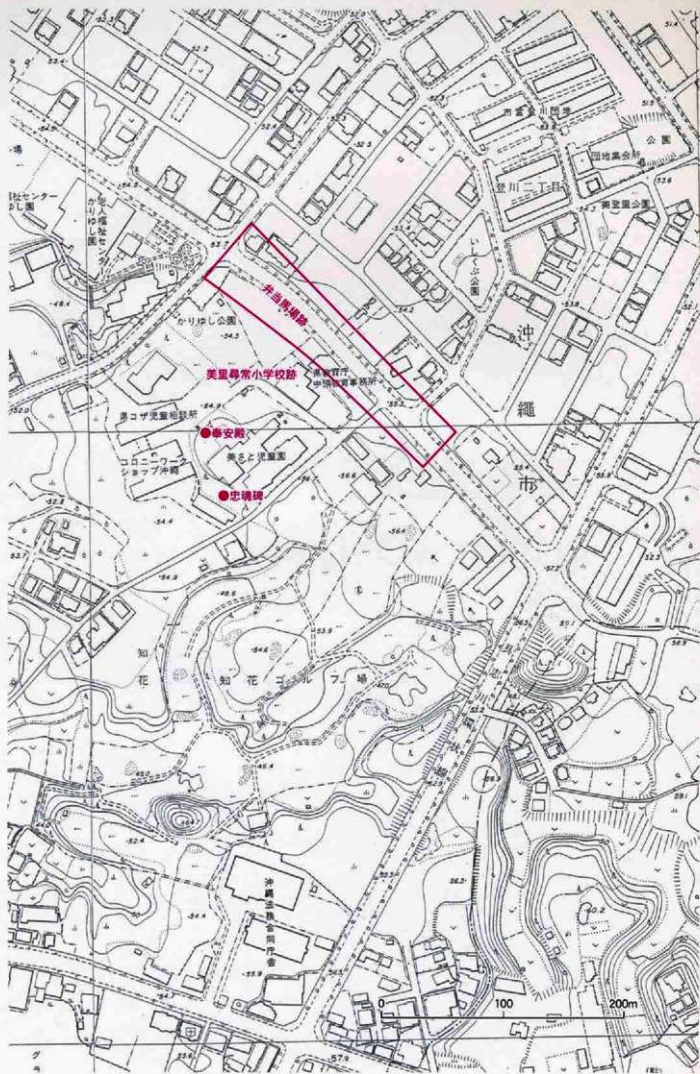
3 登川





4 知花 東部





5 知花

大城物産ファルト工場

沖 細 市



モーヤマウガン

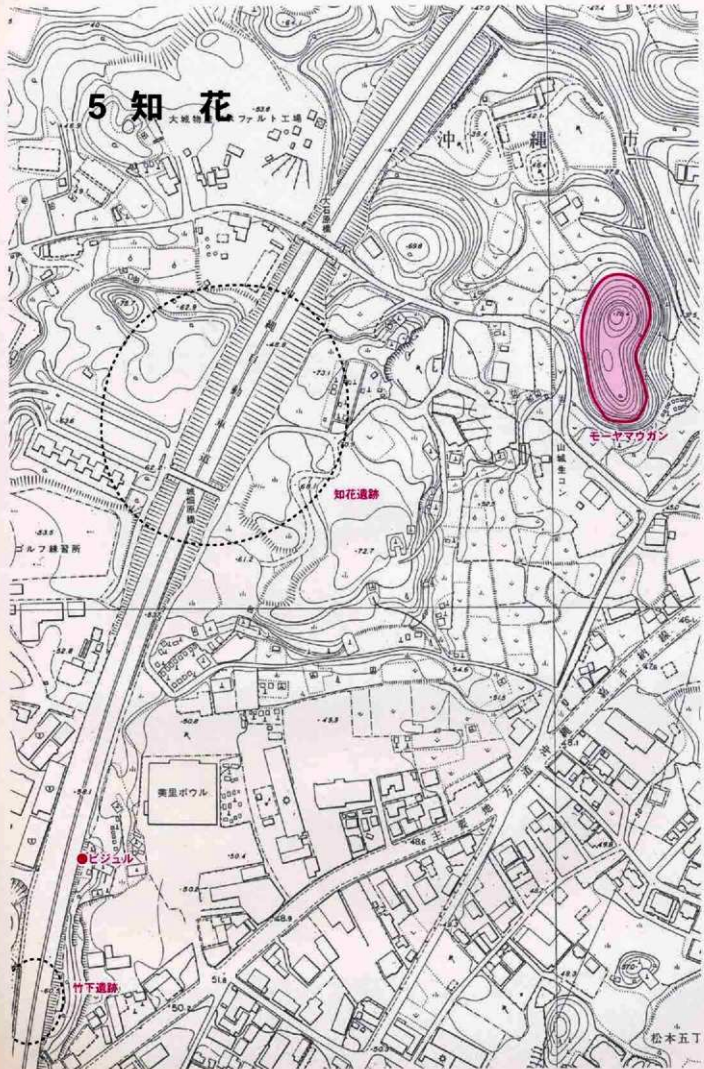
知花遺跡

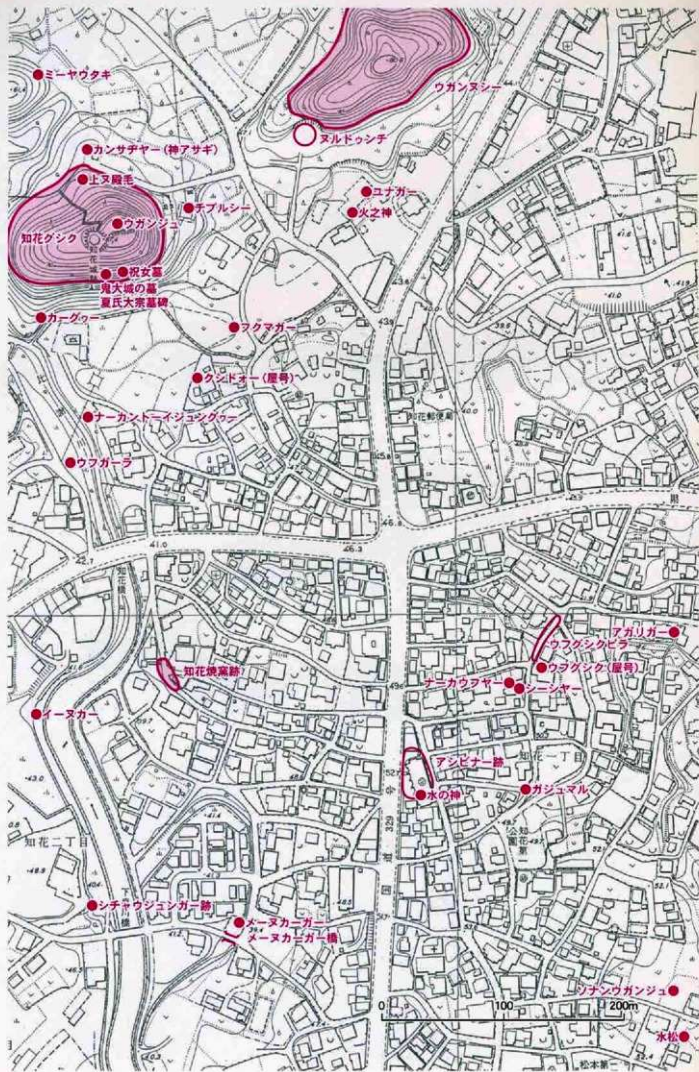
栗里ボウル

●ピジニル

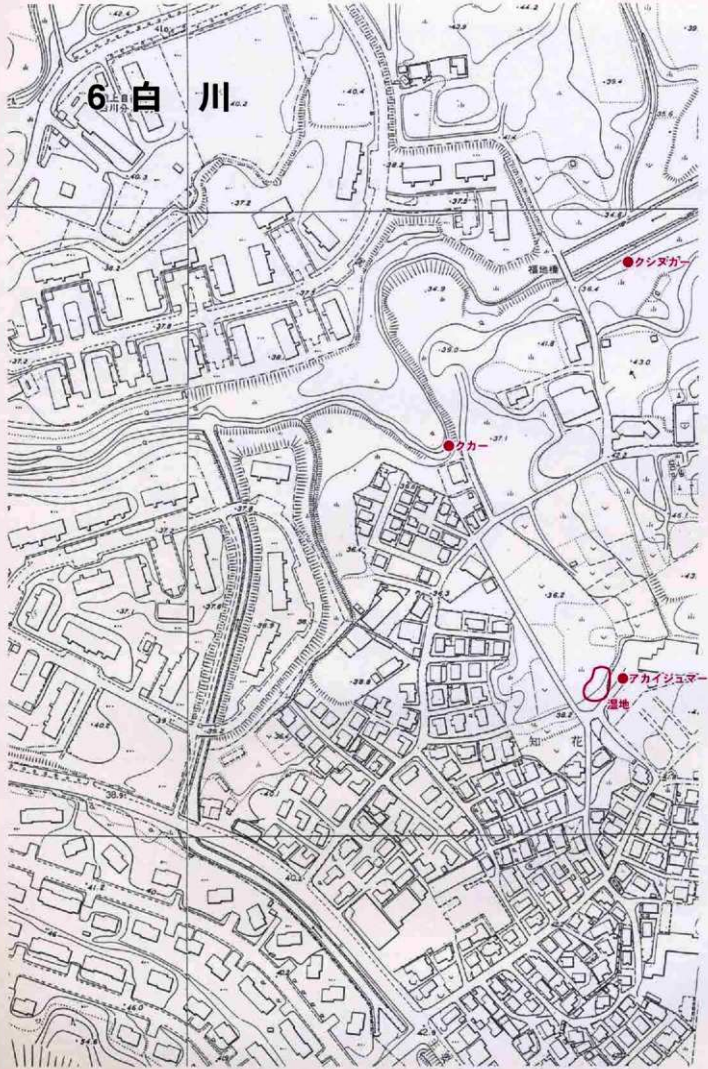
竹下遺跡

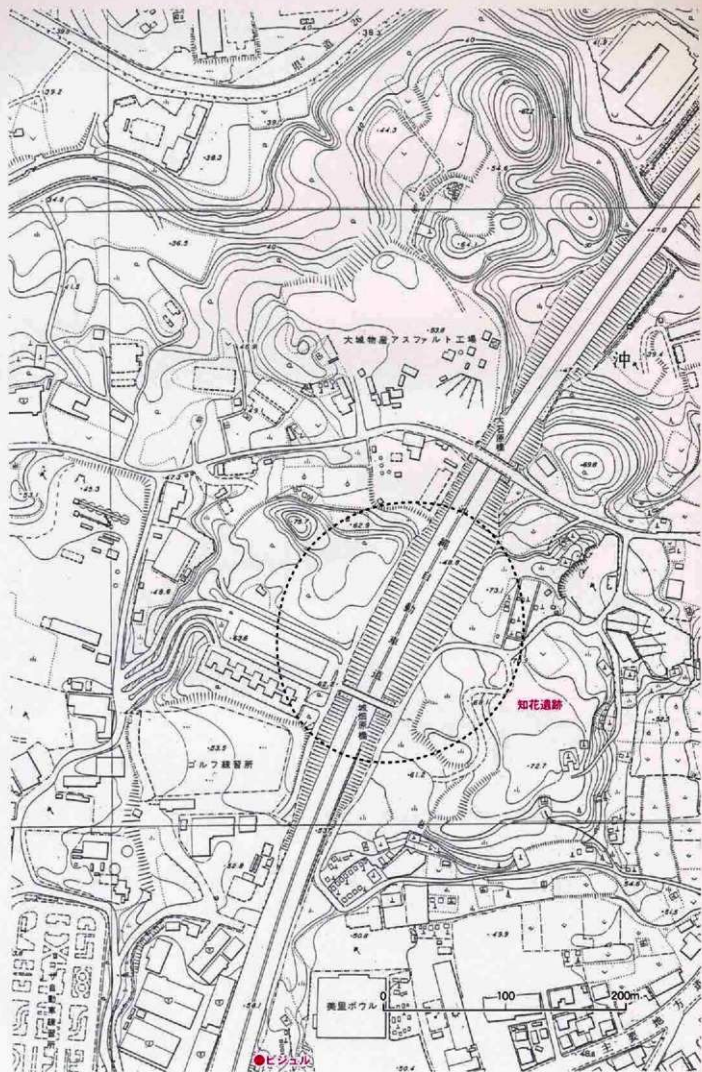
松本五丁





6 白川





7 松本

●ソナンウガンジュ

●水松

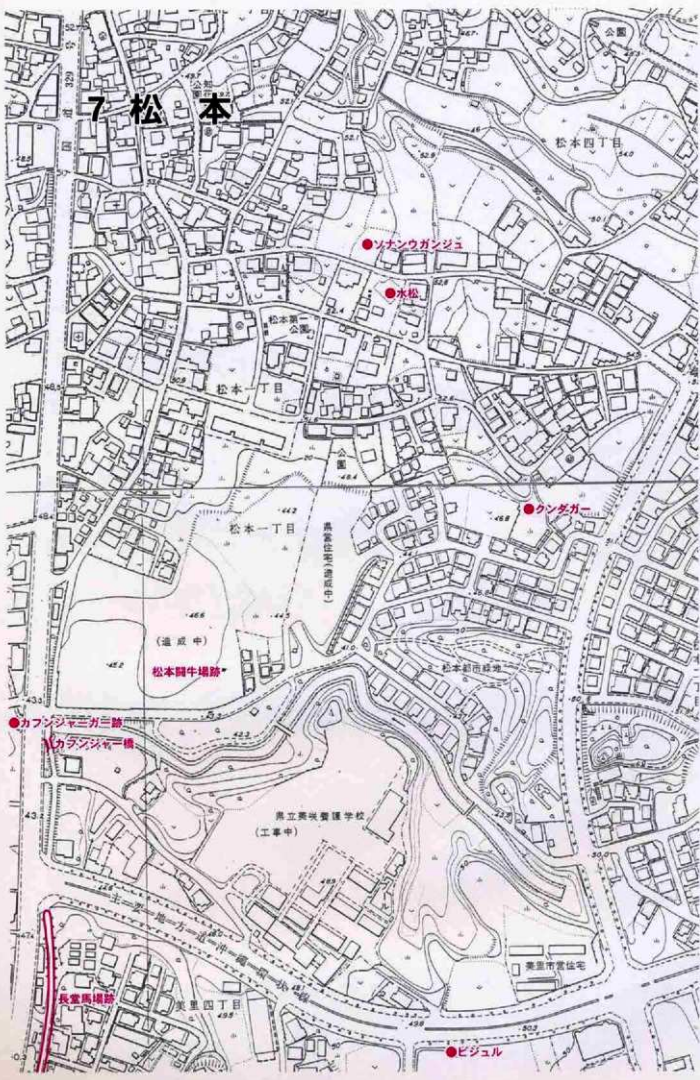
●クンダガー

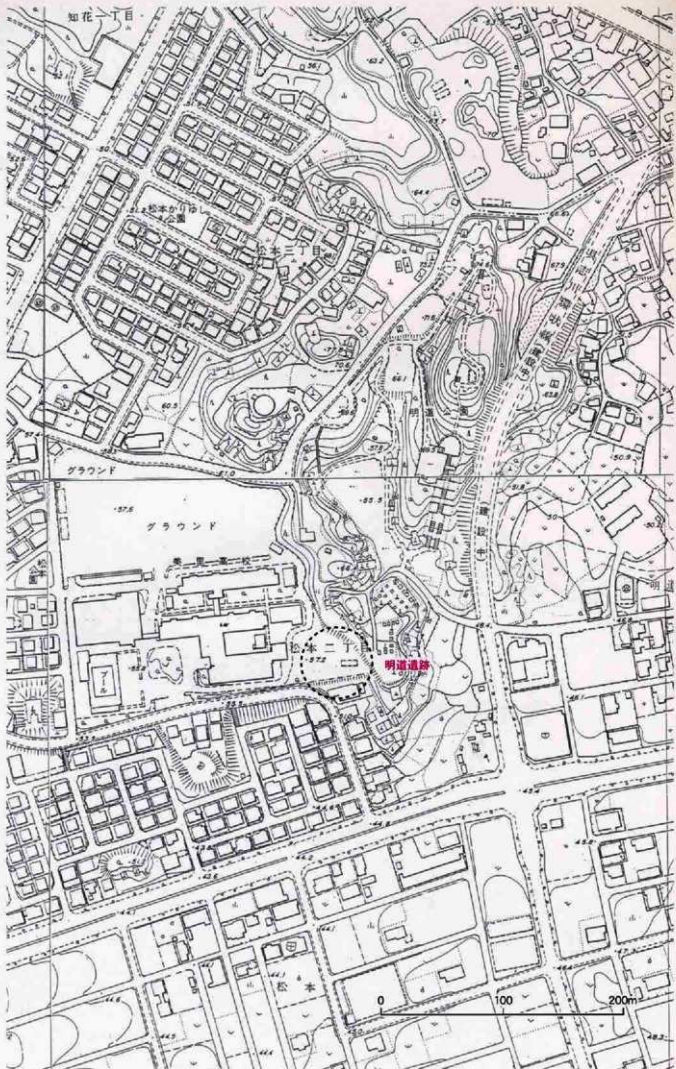
●松本岡中場跡

●カフンジャミガ三跡
カタクジヤ一機

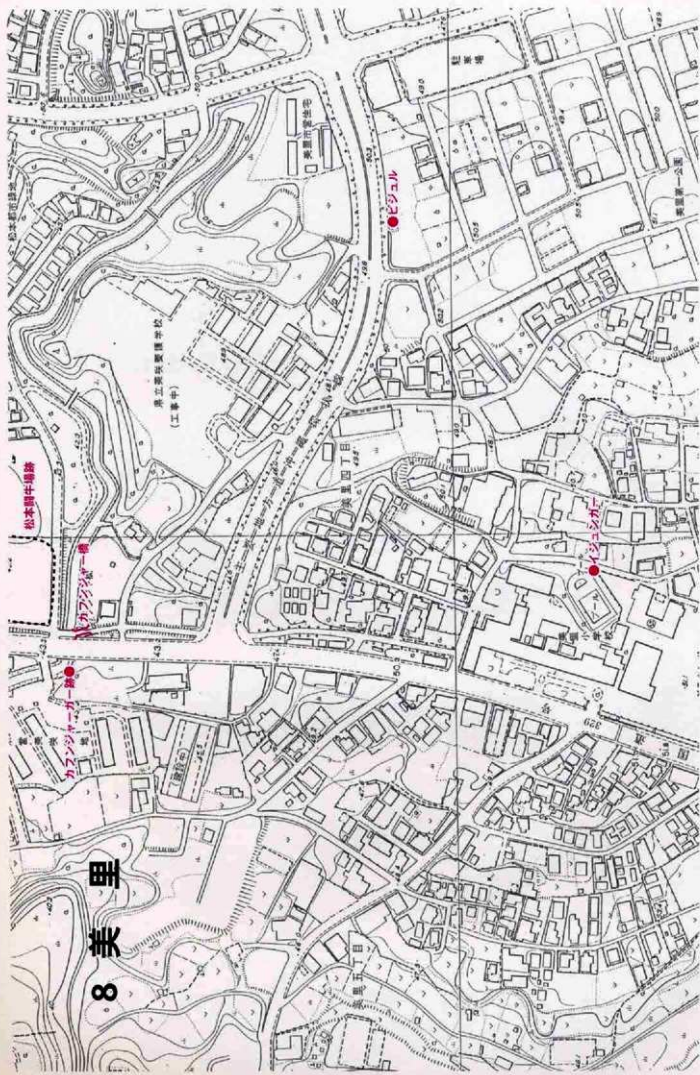
●長堂馬場跡

●ビジュアル

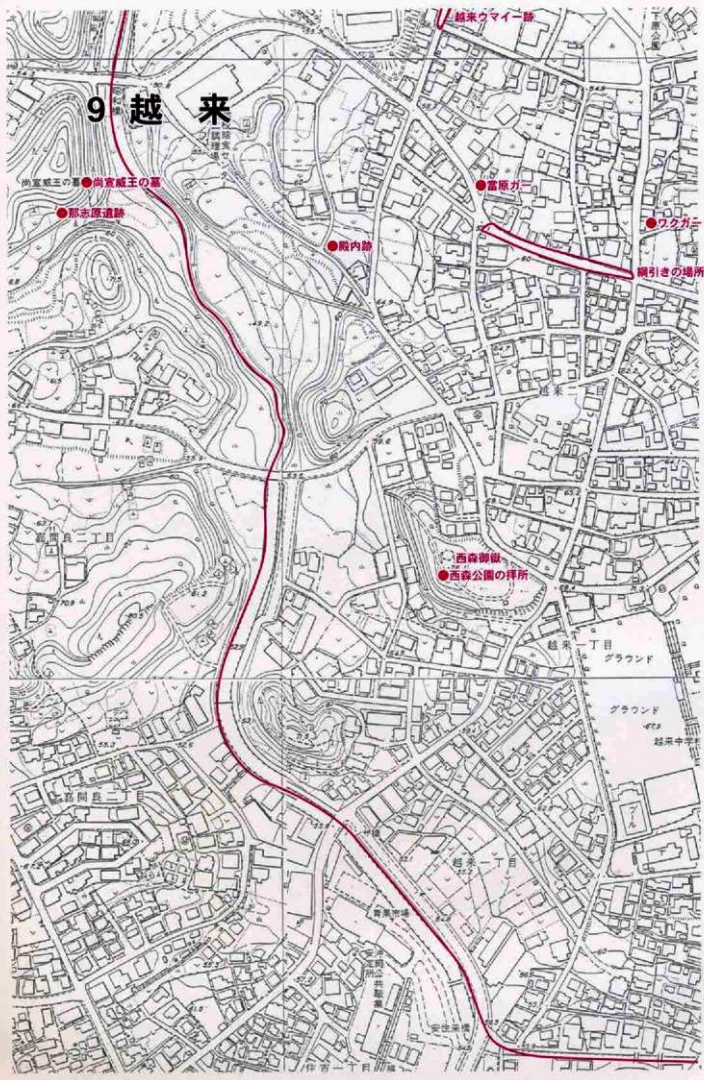




8 美里



9 越 来



越来ウマイ一跡

●尚宣威王の墓 ●尚宣威王の墓

●那志原遺跡

●殿内跡

●富原ガレ

●ワタガニ

綱引きの場所

●西森御殿
●西森公園の拝所

越来一丁目

グラウンド

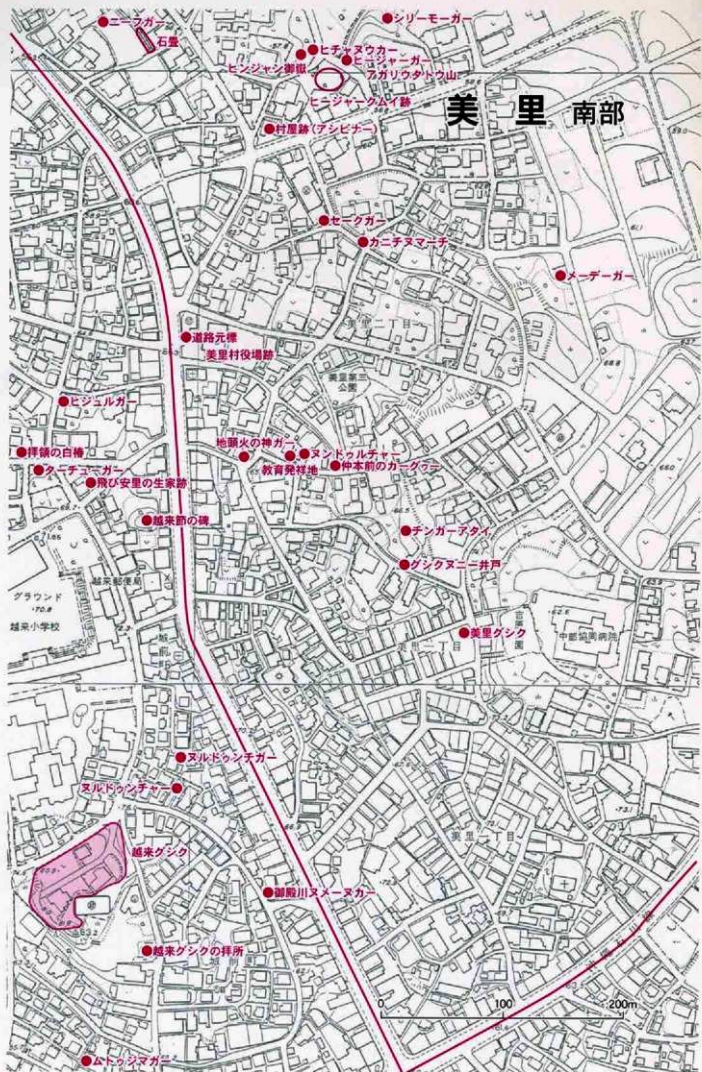
グラウンド

越来中学校

越来一丁目

香取市場

安住菜園



美里南部

●ニワカガ
石壁
●シリーモーガ
●ヒチャヌウカー
●ヒヨチャーニガ
●ヒガリウタツ山
●ヒンジャン御殿
●ヒニジャク公園
●村屋跡(アシビチ)

●セークガ
●カニチヌマニチ
●メーデーガ
●道路元樞
●美里村役場跡
●美里第三
●公園

●ヒジニルガ
●拝領の白楯
●クニチユメガ
●鷹ひ安里の生家跡
●地頭火の神ガ
●教育発祥地
●ヌンドルチャー
●仲本前のカクグワ

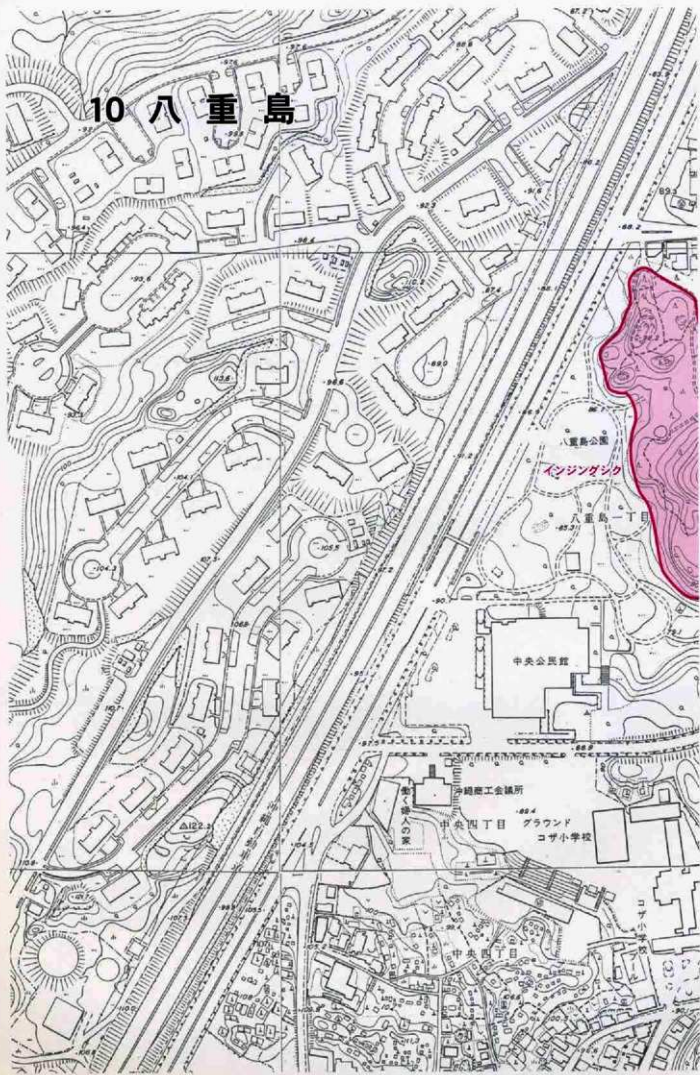
●越来節の碑
●チンガーアタイ
●グシクヌニ井戸
●美里グシク
●越来節の碑
●越来節の碑

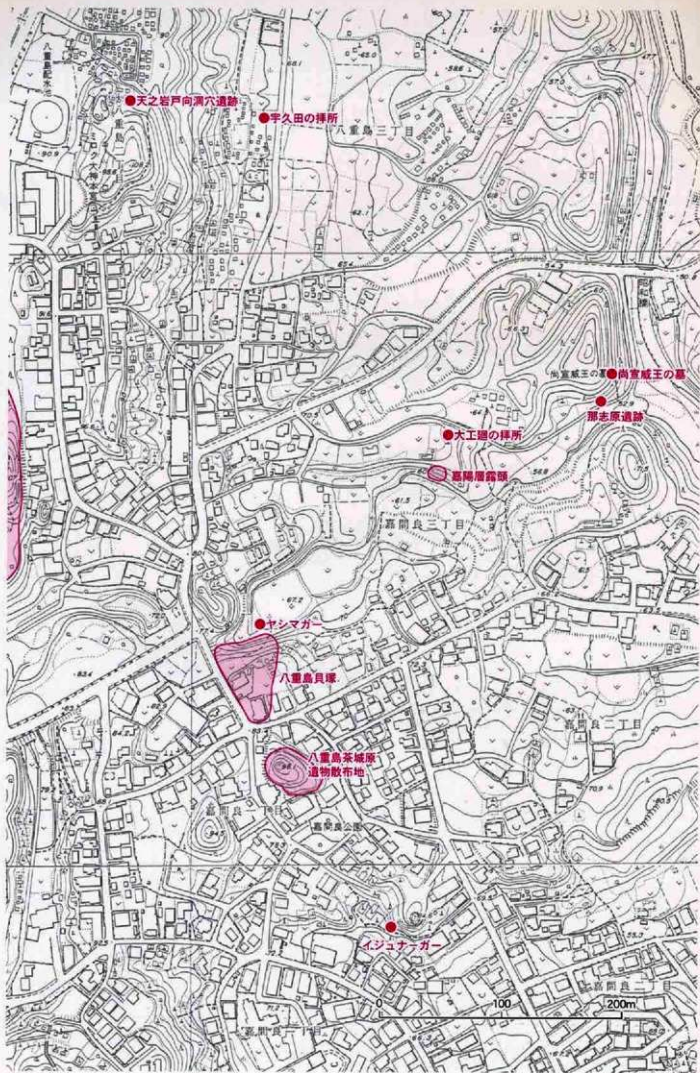
●ヌルドウシチガ
●ヌルドウチャー
●超来グシク
●超来グシクの拝所
●御殿川ヌメヌカ
●越来グシク
●超来グシクの拝所

●ムトウシマガ



10 八重島





11 安慶田

●ヌルドゥンチガー

●ヌルドゥンチャ

越来グジク

●朝殿川ヌメヌカ

●越来グジクの碑所

●ムトウジマガー

●安慶田の碑所

●アガリガー

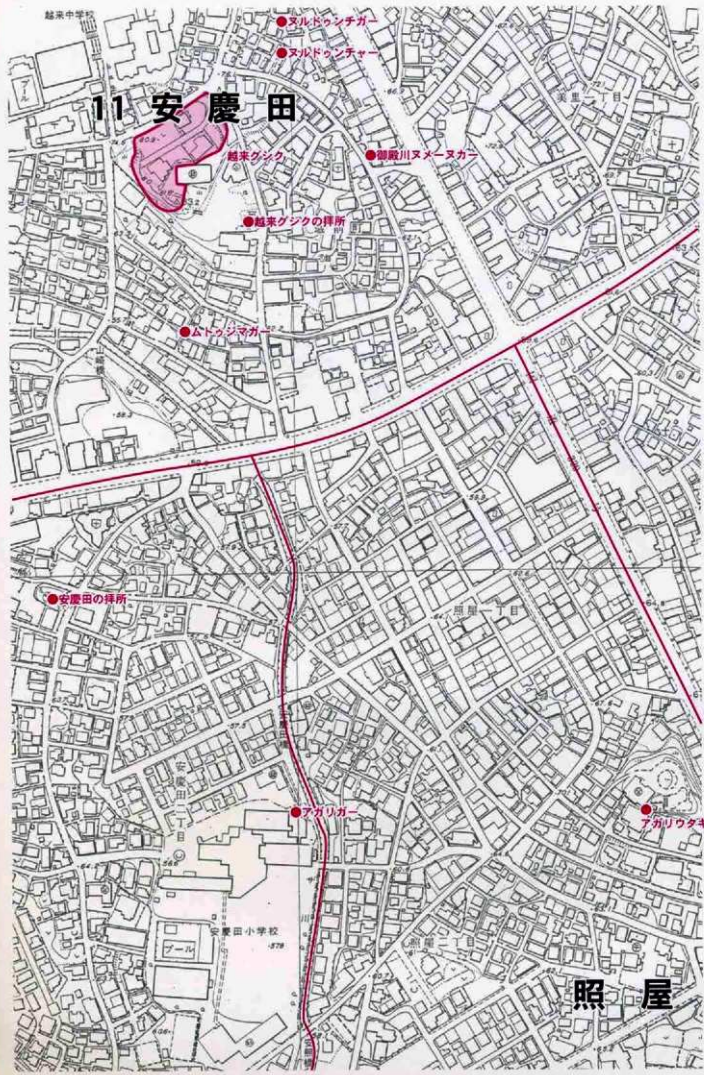
●アガリウタキ

安慶田小学校

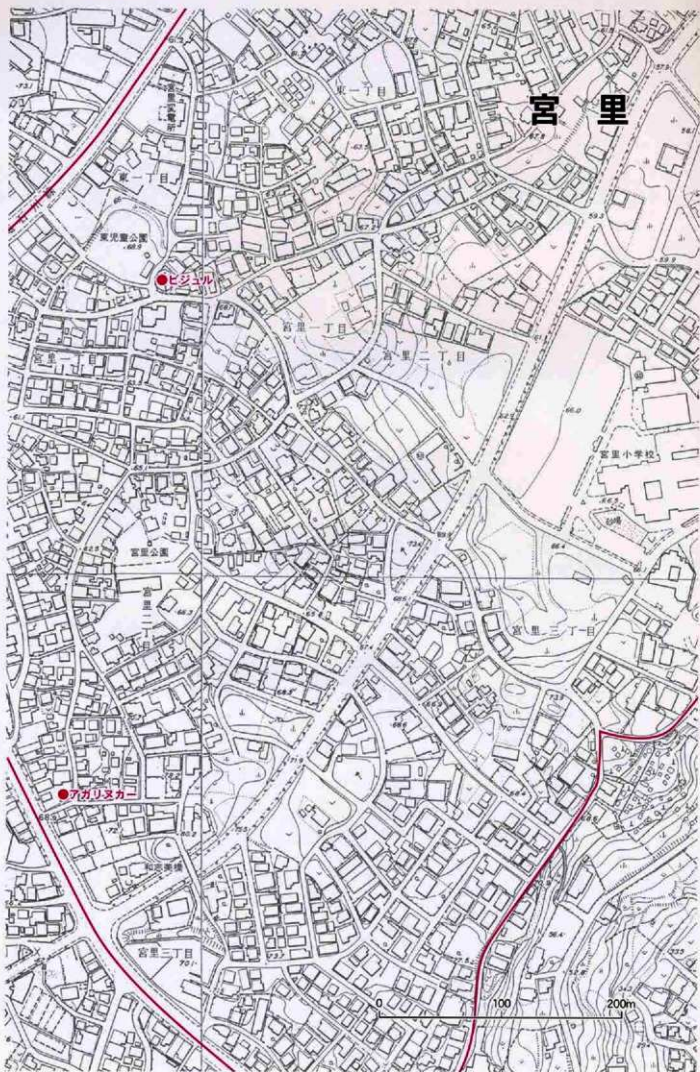
プール

1978

照屋



宮里



12 上地

上地長次原道路

上地都市緑地

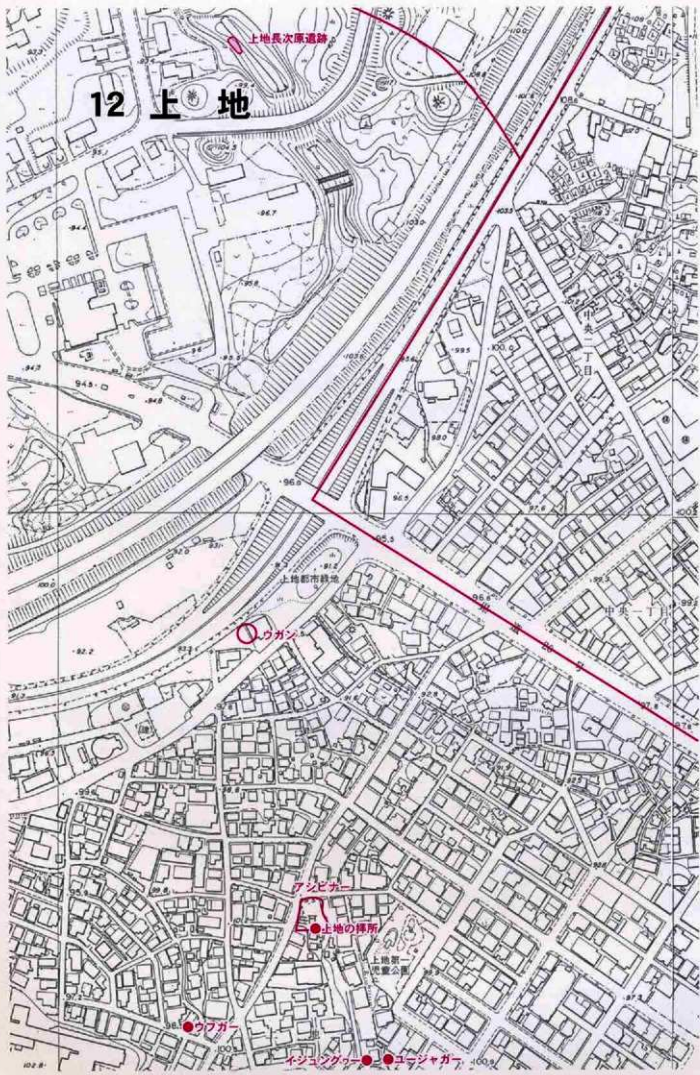
ウガン

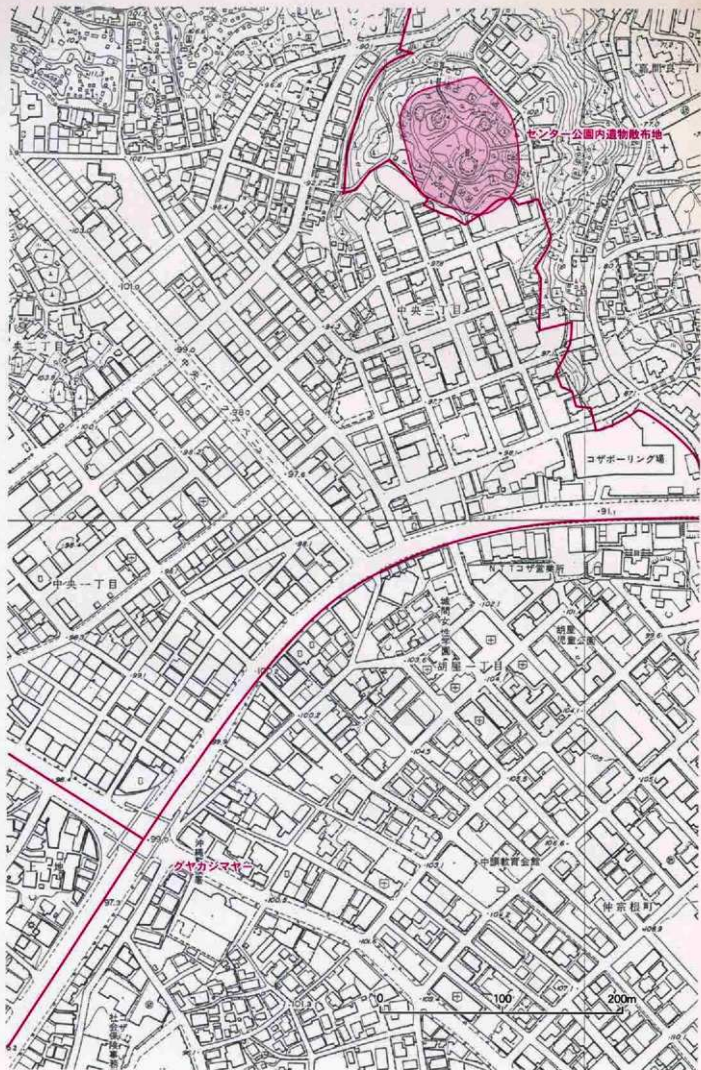
アシビナー

上地の種所

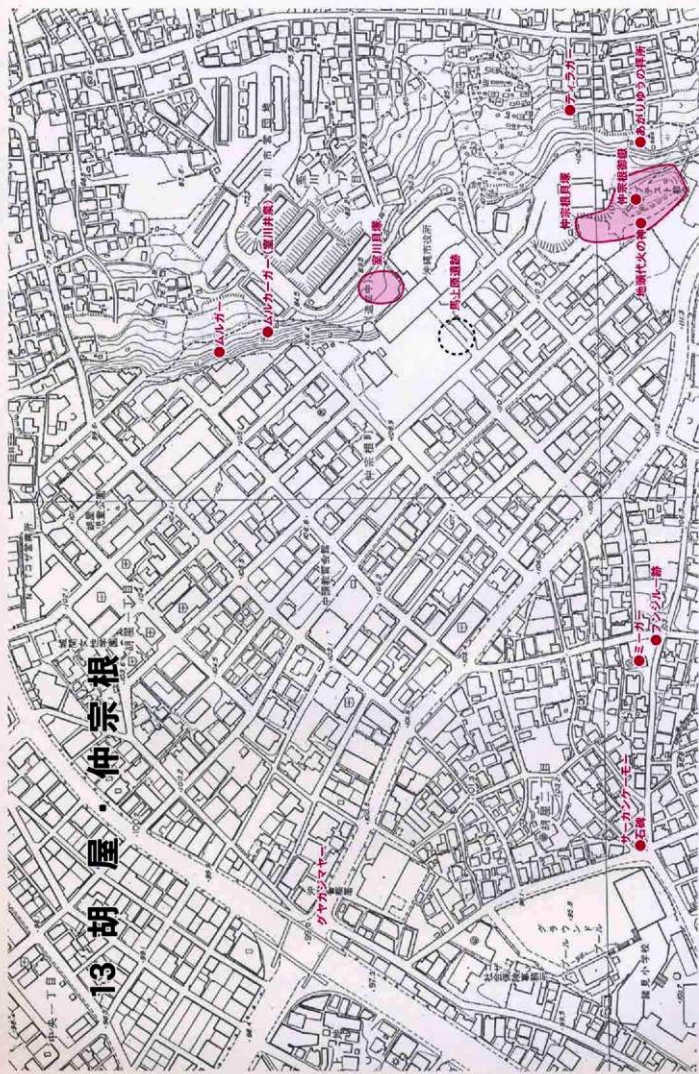
ウアガー

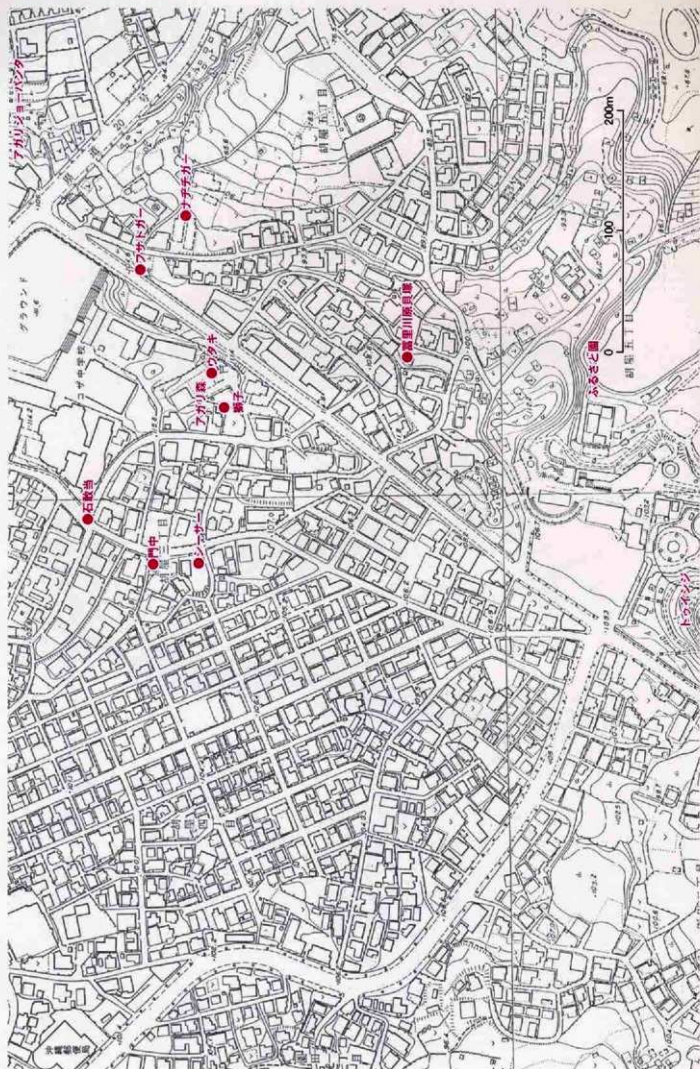
イシユングラー ● ● ユラジャガー





13 胡屋・仲宗根





アガリジローパンタ

フクロトラー

石蔵島

門中

アガリ屋

アガリ子

高田山腹貝塚

ふるまご園

200m

100

0

アガリ子

14 山内

●イリーガー

○イチヤムイ

●シンカーヌカー

●ドライヌフツヌウタキ

●メーヌカー

●お宮

●マーニヌネカク

●通来節の碑

○アシビナー

●メーデガリガー

沖縄女子学園

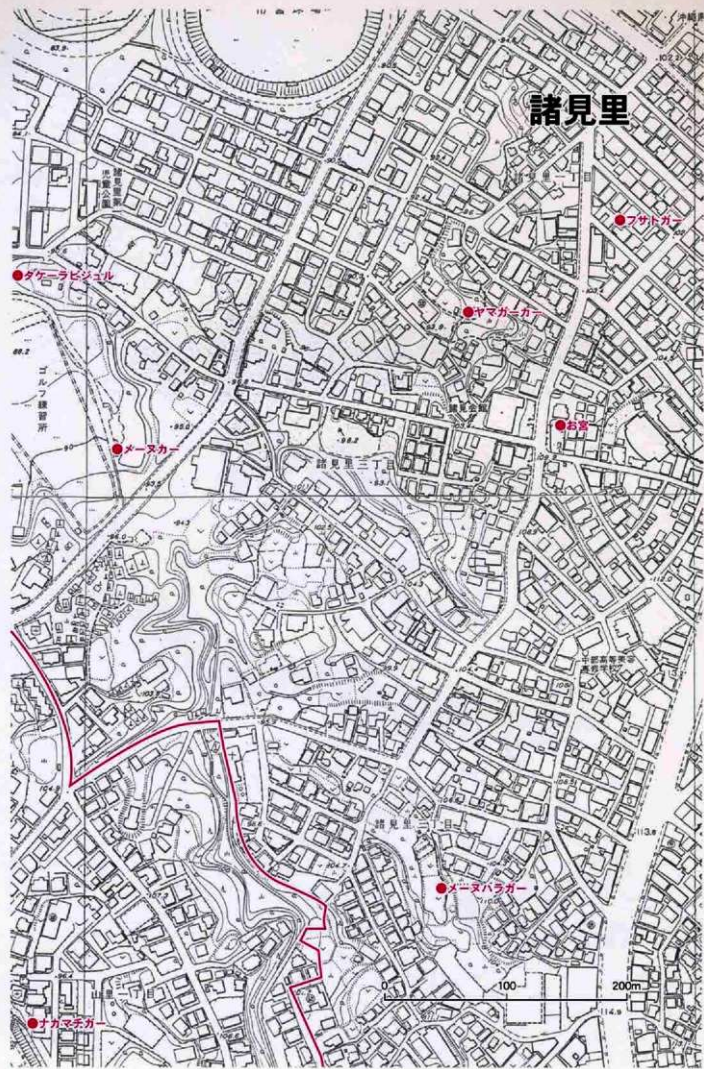
沖縄の原野

山内丁目

山内三丁目

山内二丁目

諸見里



●ダケーラビシユル

●メーヌカー

●ヤマガニガ

●お宮

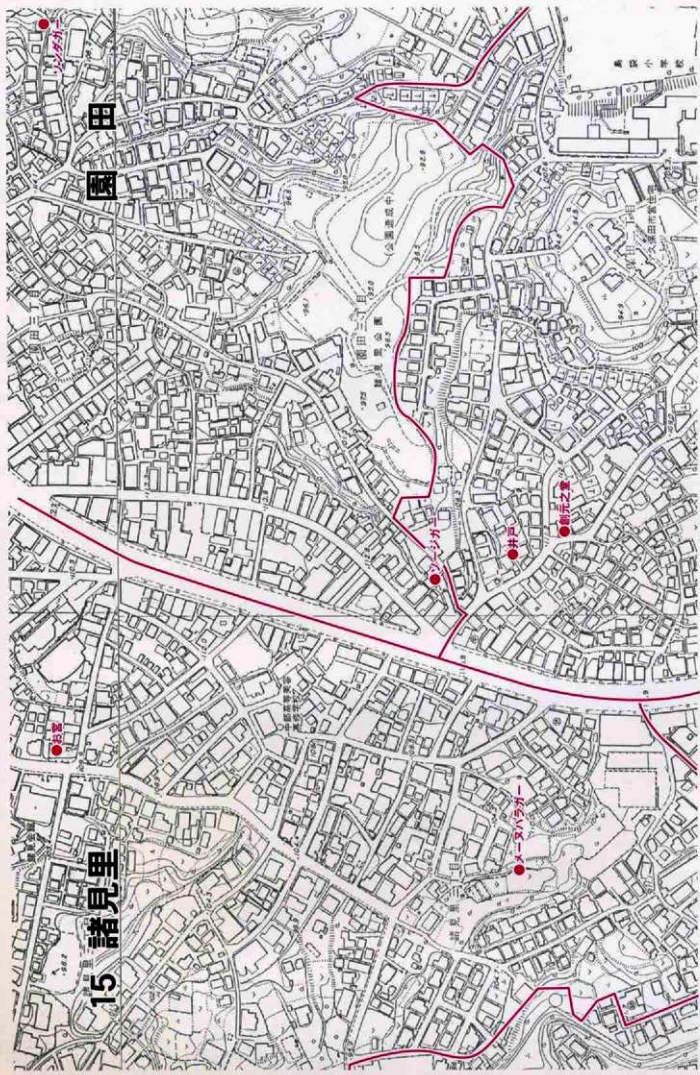
●メーヌハラガ

●ナカマチガ

100 200m

15 諸見里

田園



城島小神社

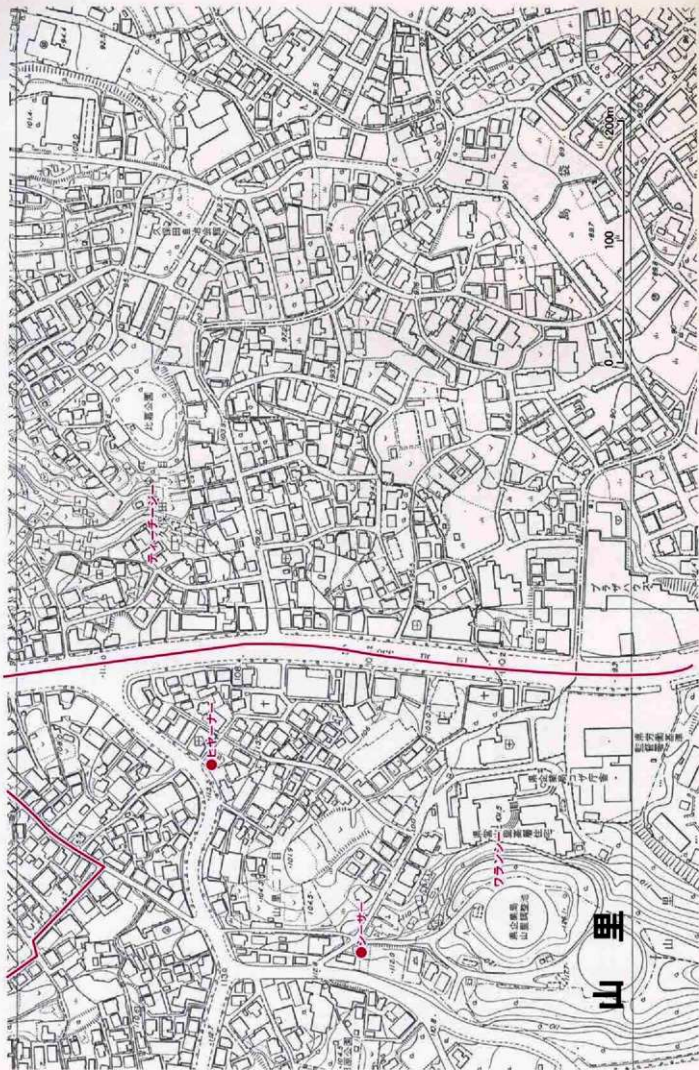
田園地帯中
野田三丁目
野田公園
野田三丁目
野田公園

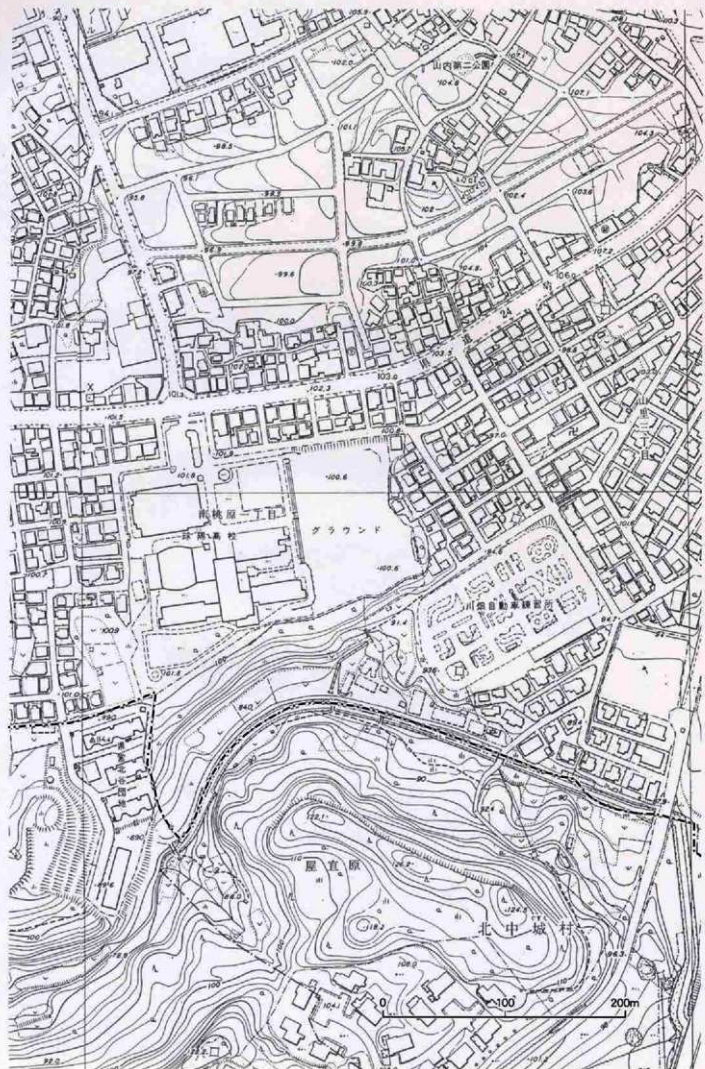
新井之堂

井戸

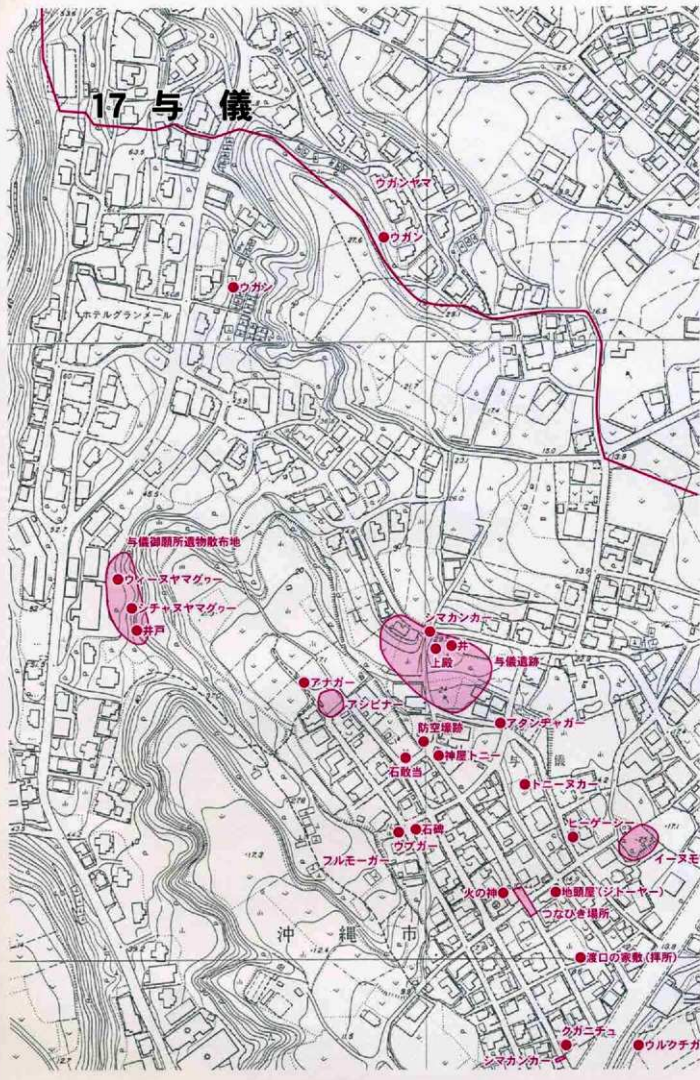
ニュー・スハラガ-

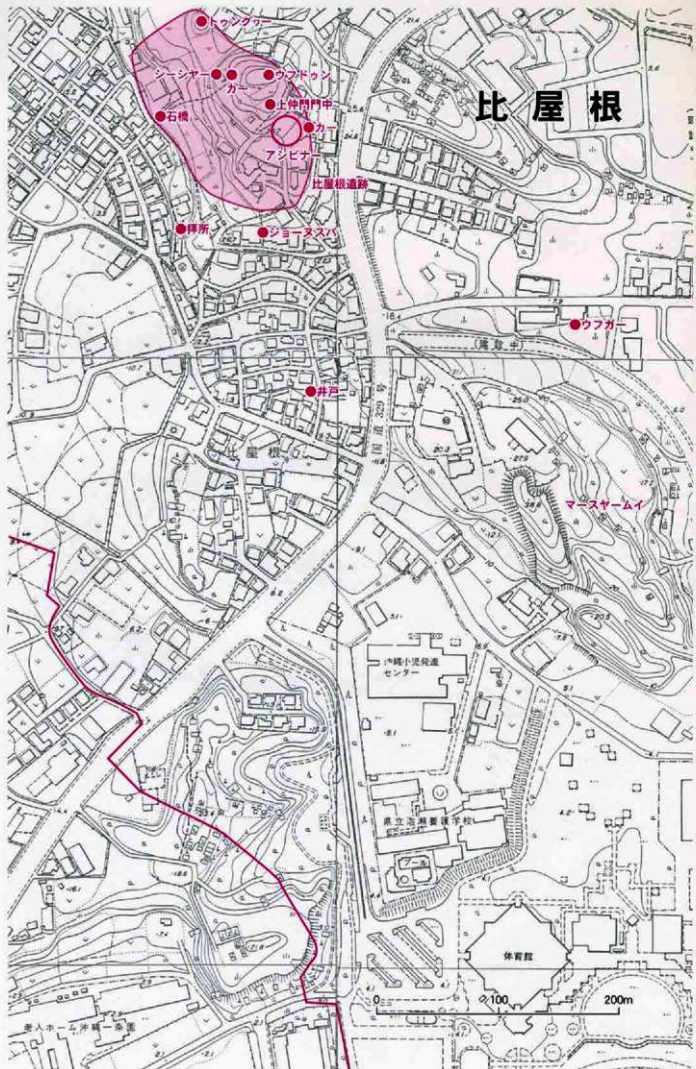
新井





17 与儀





比 屋 根

- トンネル
- シューシャーカー
- ウブドゥン
- 石橋
- 上件門中
- カー
- アシヒナ

- 碑所
- ショーヌスバ

● 井戸

● ウブカー

マースヤムイ

戸崎小児童センター

県立志摩養護学校

体育館

老人ホーム 井戸一楽園

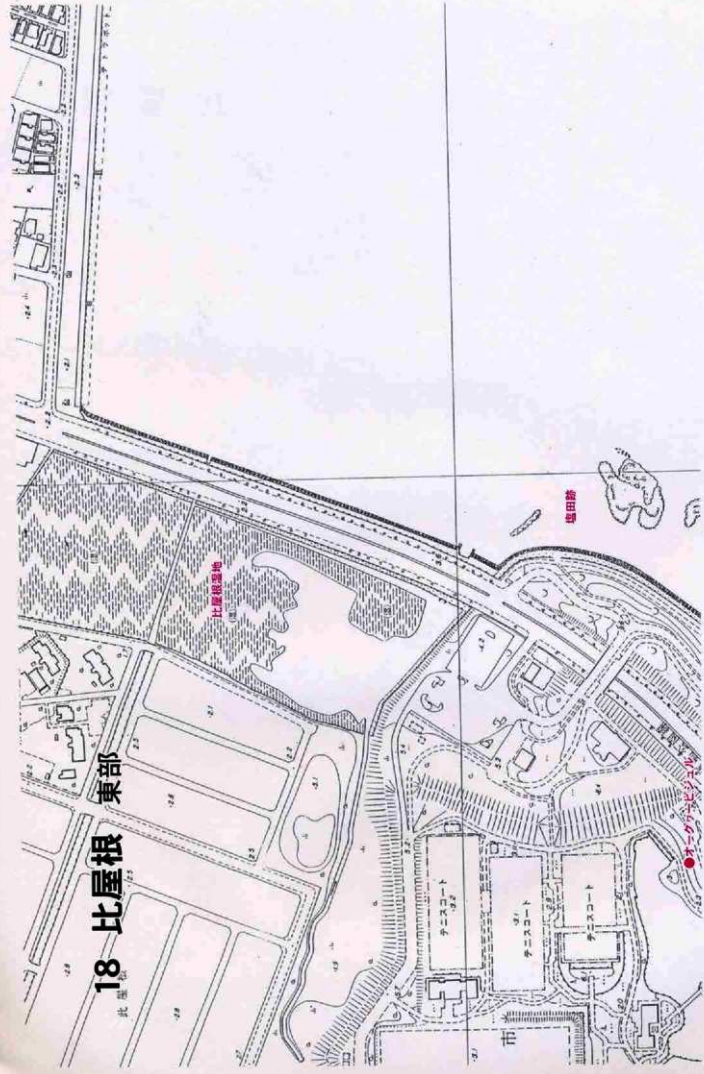
0 100 200m

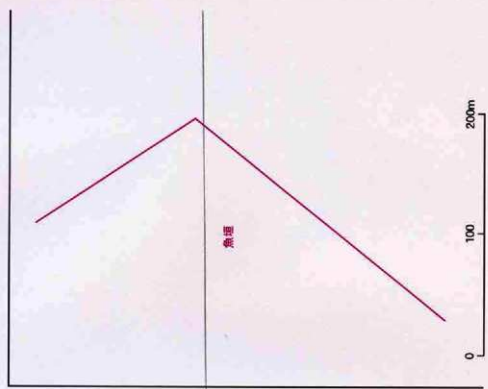
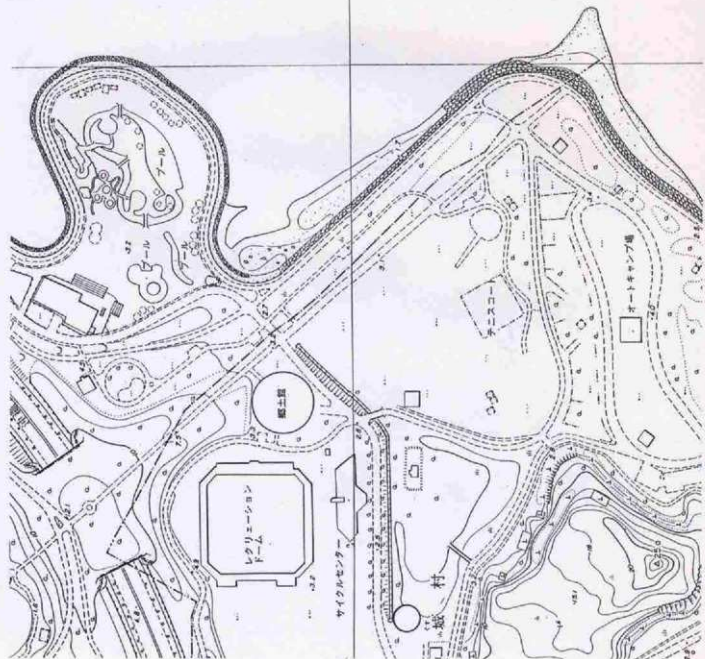
18 比屋根

東部

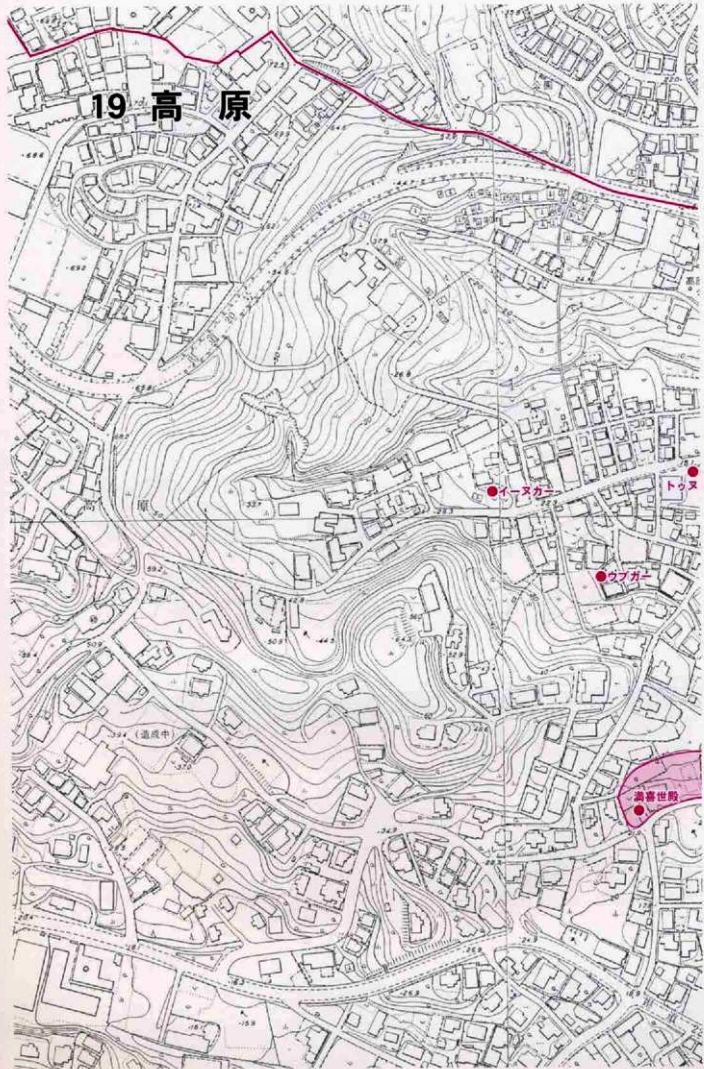
比屋根池地

比屋根池





19 高原



● イースカー

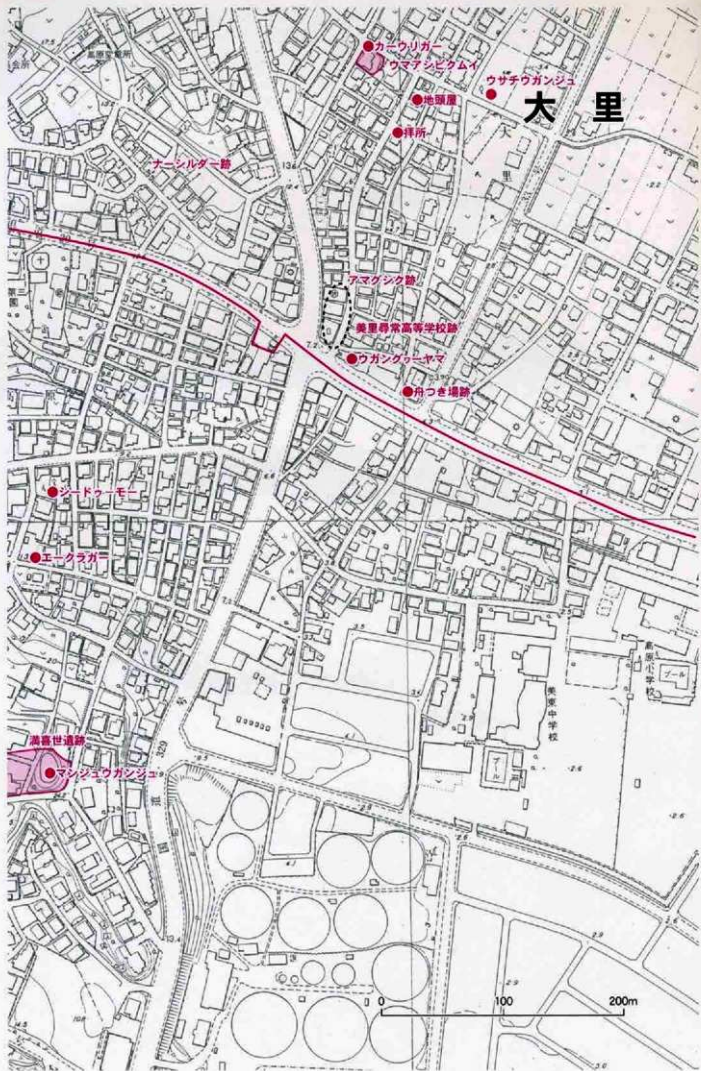
● トム

● アップガー

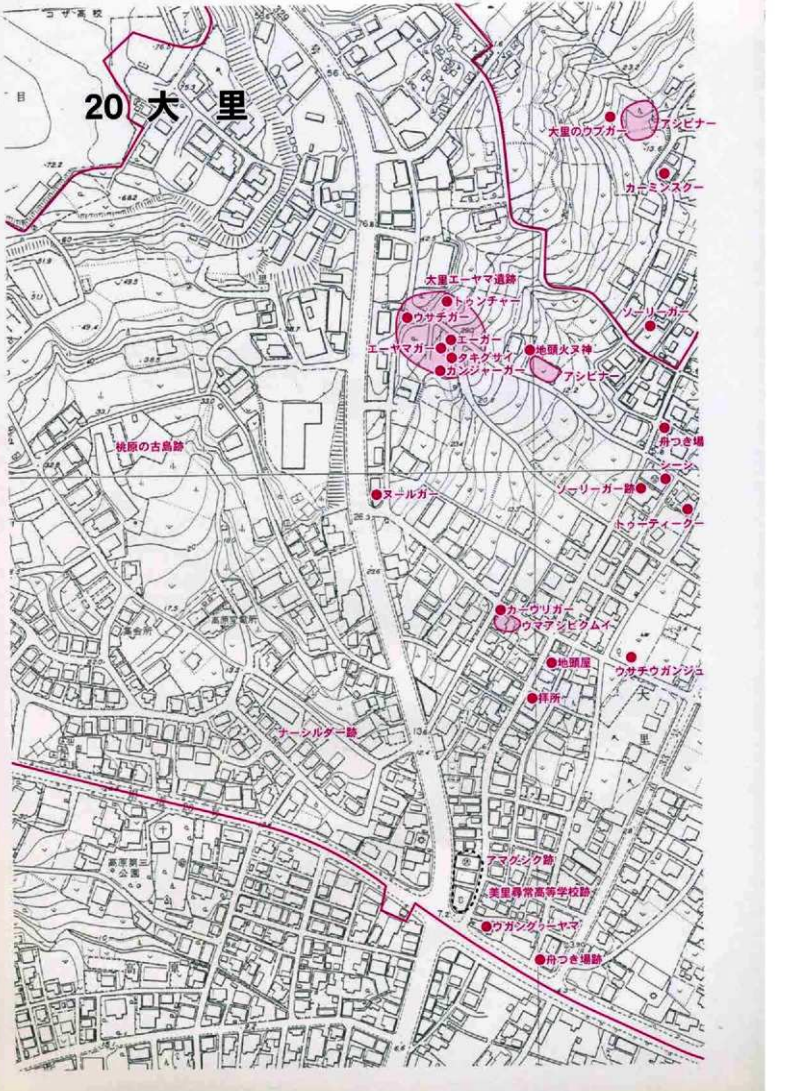
● 湯島世館

(通成中)

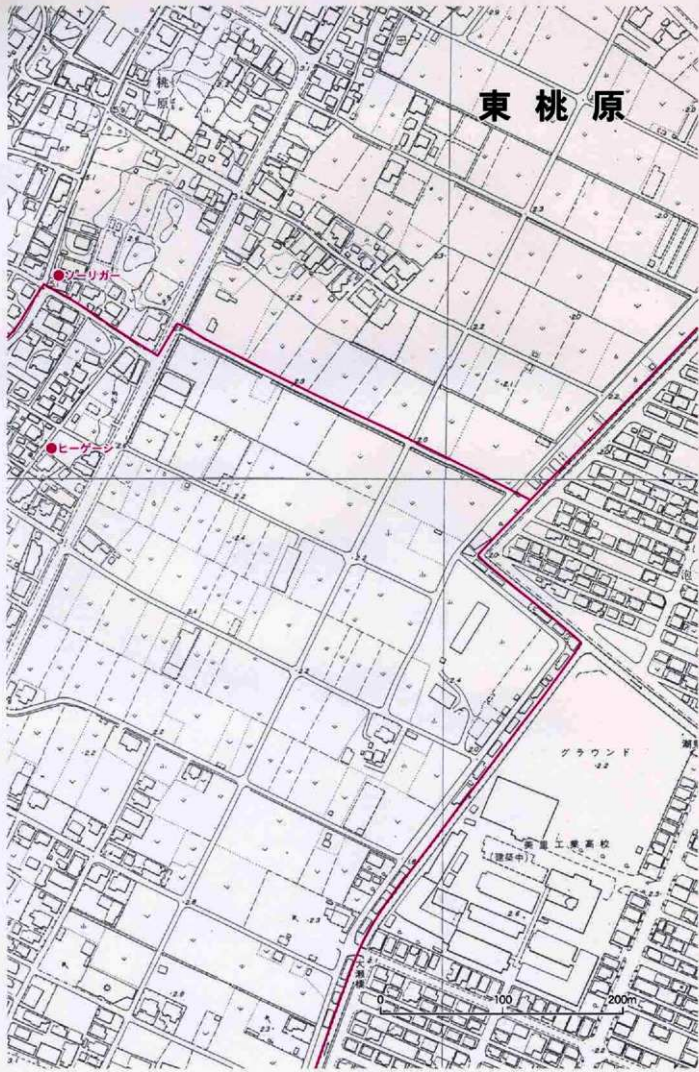
大里



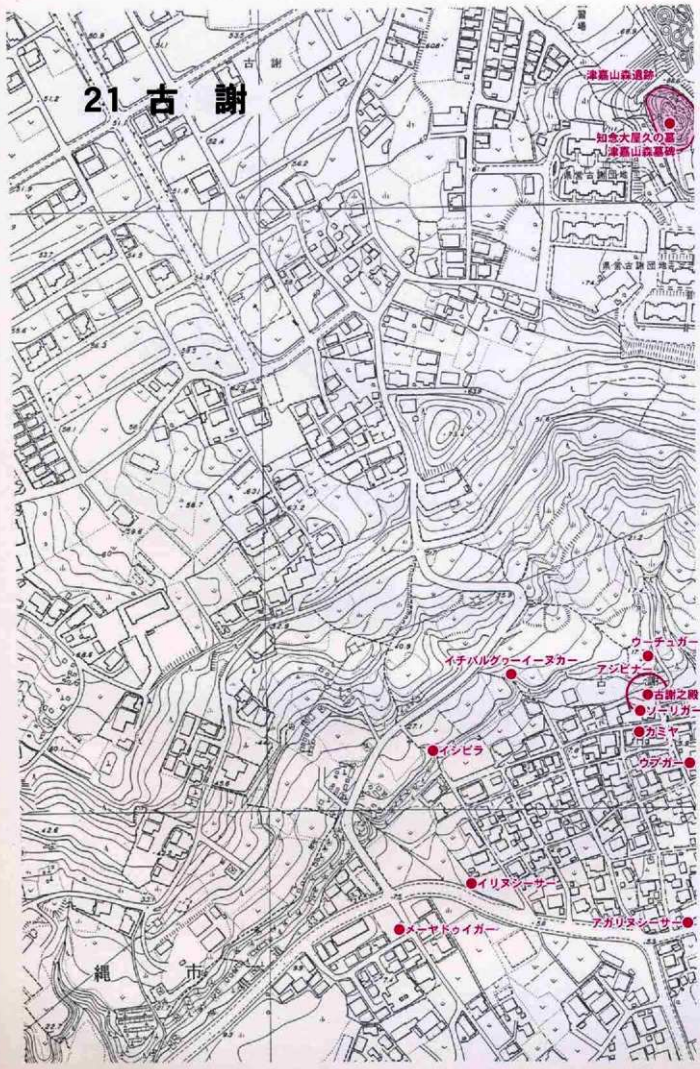
20 大 里



東 桃 原



21 古謝



津島山森遺跡

知念大屋久の墓

津島山森遺跡

真室古謝遺跡

縄市

イチバルクウーイヌカー

ウーチユガー

アジビナー

古謝之殿

ソニリガー

カミヤ

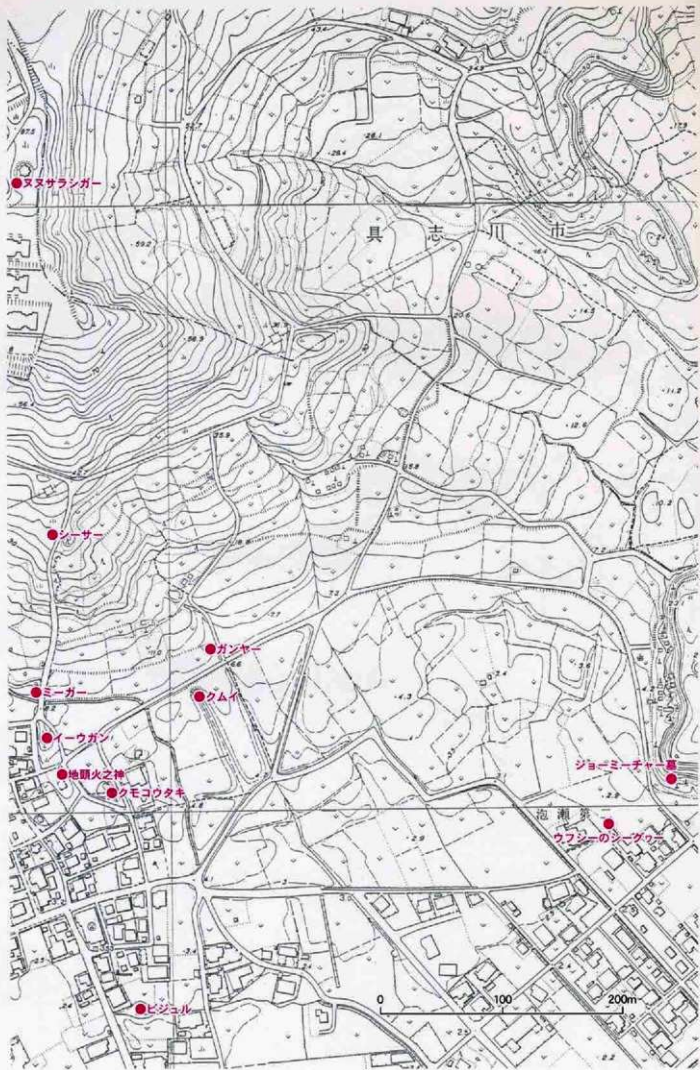
ウデガー

イシビラ

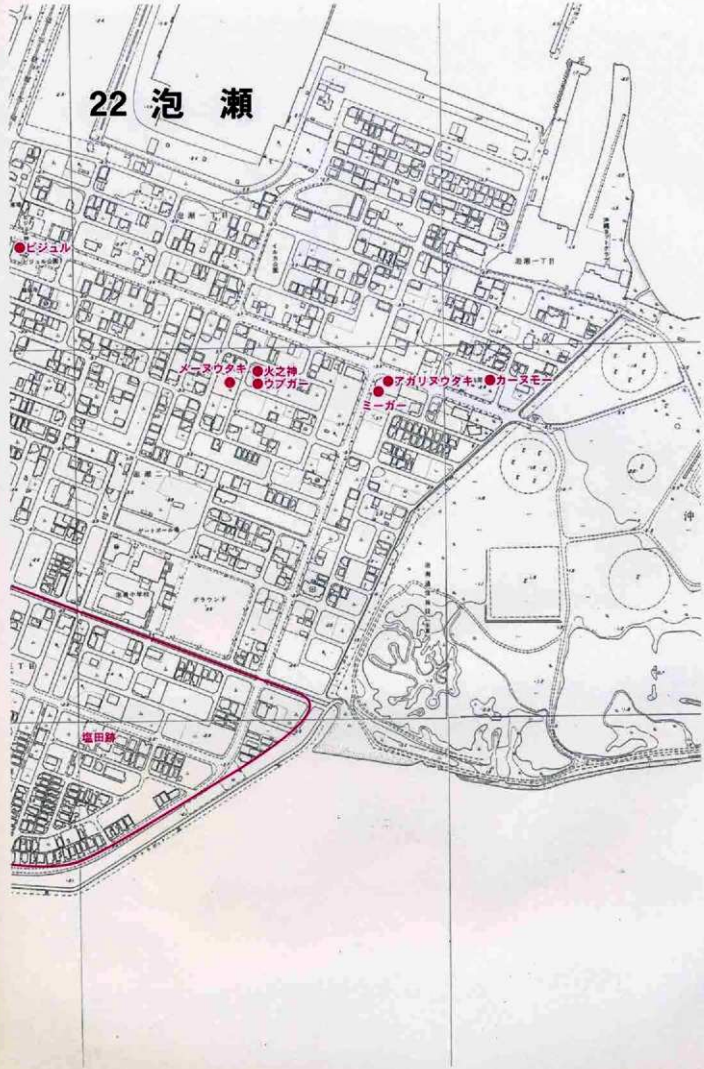
イリヌシーサー

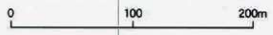
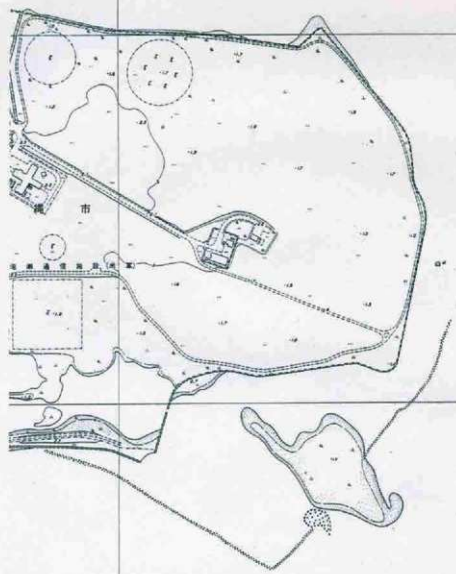
アカリヌシーサー

メーヤドゥイガー



22 泡瀬





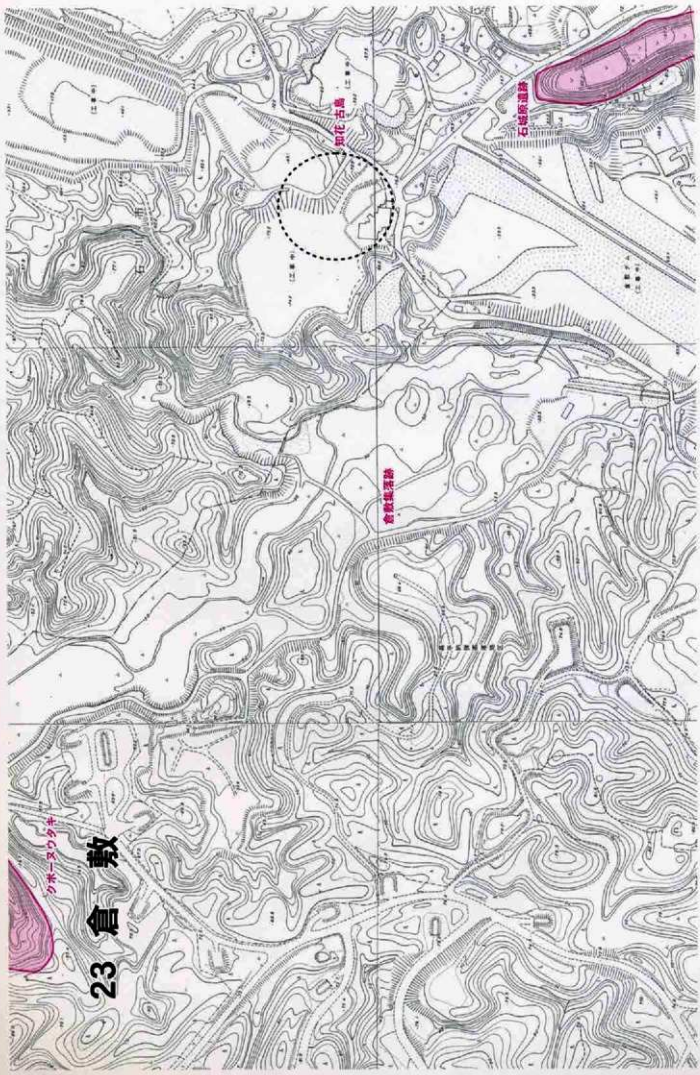
23 倉敷

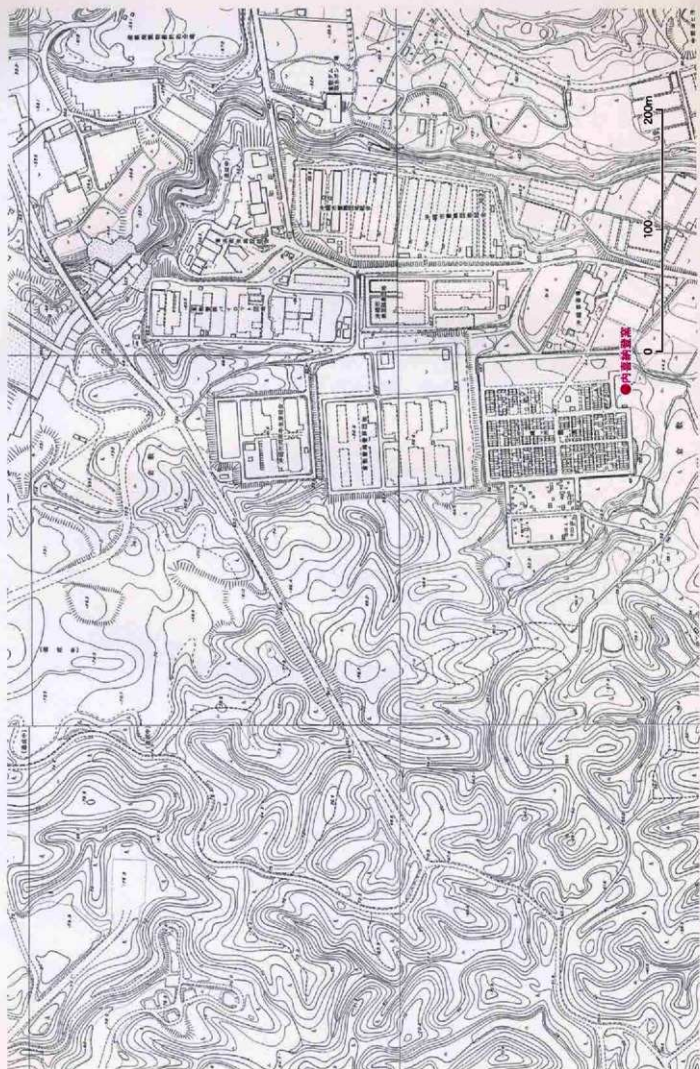
クホースの山

取花古島

山口

倉敷





参考文献

- 大城逸朗 『失われた生物—沖縄の化石—』シリーズ沖縄の自然 4 新星図書出版 1987
- 小西健二 「琉球列島(南西諸島)の構造区分」『地質学雑誌』第 71 巻第 840 号 日本地質学会 1965
- 林大五郎 「沖縄島中・北部」木崎甲子郎編『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社 1985
- 沖縄市立郷土博物館編 『沖縄市の自然—身近な動植物—』沖縄市立郷土博物館 1990
- 河名俊男 『琉球列島の地形』新星図書出版 1988
- 設楽寛 『沖縄の気象』九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄』弘文堂 1976
- 折口信夫 「続琉球神道記」島袋源七『山原の土俗』郷土研究社 1929
- 中鉢良護 『山』名護市史編さん委員会編『民俗二自然の文化誌』名護市史本編 9 名護市役所 2001
- 上江洲均 『ふるさと沖縄の民具』沖縄文化社 1995
- 上江洲均 『南島の民俗文化—生活・祭り・技術の風景—』ひるぎ社 1987
- 金関丈夫 「巻頭語」『民俗台湾』第 1 巻第 1 号 東都書籍台北支店 1941
- 柳田国男 『民間伝承論』第三書館 1986
- 宮本常一 『民俗学への道』宮本常一集第 1 巻 未来社 1987
- 多和田真淳 「考古学の周辺」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会 1970
- 浜田耕作・斉藤忠 『考古学への道』学生社 1980
- 外間守善・波照間栄吉編 『定本琉球国由来記』角川書店 1997
- 仲原篤忠・外間守善 『校本おもろさうし』角川書店 1967
- 伊波普猷 『伊波普猷全集』第 6 巻平凡社 1975
- 仲松弥秀 『神と村』農社 1990
- 仲松弥秀 『沖縄の集落—平民百姓村の景観的研究—』『琉球大学文学部紀要』第 7 号 琉球大学文学部 1963
- 仲松弥秀 『琉球弧の村落探求—7—沖縄県本島中部〔中頭〕』私家版 1998
- 仲松弥秀 『琉球弧の村落探求—8—沖縄県本島中部〔中頭諸島〕』私家版 1998
- 中山盛茂・富村真演・宮城栄昌 『のろ調査資料<1960~1966年調査>』ボーダーインク 1990
- 中頭郡美里尋常高等小学校編 『五十周年記念誌』中頭郡美里尋常高等小学校 1932
- 『越来尋常高等学校創立五十周年記念誌』1932
- 宮城利旭 「沖縄市知花の『カーメー行事』と『糸さおもろ』—調査事例と途絶えている儀礼について—」
『あやみや』沖縄市立郷土博物館紀要第 8 号 沖縄市立郷土博物館 2000
- 宮城利旭 「登川村落の風水池『ウズミグムイ』—沖縄市宇登川の調査事例—」
『あやみや』沖縄市立郷土博物館紀要第 9 号 沖縄市立郷土博物館 2001
- 泡瀬復興期成会編 『写真集ふるさと泡瀬』泡瀬復興期成会 1997
- 泡瀬復興期成会編 『泡瀬誌』泡瀬復興期成会 1988
- 平田嗣一 『美里村史』美里村校所 1962
- 廣山實 「沖縄市字山内の地名」『あやみや』創刊号 沖縄市立郷土博物館 1993
- 廣山實 「沖縄市比屋根の地名」『あやみや』第 2 号 沖縄市立郷土博物館 1994
- 宮城昭美 「胡屋・仲宗根における旧暦 8 月 10 日の行事」『あやみや』創刊号 沖縄市立郷土博物館 1993
- 山里純一 「沖縄の慶除けとまじない—フーフダ(符札)の研究—」第一書房 1997
- 富嶺嗣一 「考古遺跡は語る」『新琉球史—古琉球編—』琉球新報社 1990
- 鈴木尚 『骨が語る日本史』学生社 1998

- 沖縄大百科事典刊行事務局編 『沖縄大百科事典(上～下)』沖縄タイムス社 1983
 宮城栄昌・高宮廣衛編 『沖縄歴史地図<考古編>』柏書房 1983
 宮城篤正 「琉球の陶器 前近代」沖縄美術全集刊行委員会編『沖縄美術全集 1 陶芸』沖縄タイムス社 1989
 沖縄市文化財調査報告書第2集 『鬼大城の墓』沖縄市教育委員会 1980
 沖縄市文化財調査報告書第3集 『高宣成王の墓』沖縄市教育委員会 1980
 沖縄市文化財調査報告書第4集 『沖縄市の埋蔵文化財』沖縄市教育委員会 1981
 沖縄市文化財調査報告書第6集 『下仲宗根門中の墓』沖縄市教育委員会 1985
 沖縄市文化財調査報告書第7集 『白川屋敷集落』沖縄市教育委員会 1985
 沖縄市文化財調査報告書第11集 『越来城』沖縄市教育委員会 1988
 沖縄市文化財調査報告書第13集 『津嘉山森遺跡』沖縄市教育委員会 1991
 沖縄市文化財調査報告書第21集 『池原のクスデーク』沖縄市教育委員会 1998
 沖縄市文化財調査報告書第22集 『馬上原遺跡』沖縄市教育委員会 2000
 沖縄市文化財調査報告書第3集 『古代の沖縄市』沖縄市教育委員会 1995
 沖縄県文化財調査報告書第16集 『知花遺跡群』沖縄県教育委員会 1978
 沖縄県文化財調査報告書第33集 『仲宗根貝塚』沖縄県教育委員会 1980
 沖縄県文化財調査報告書第69集 『金石文—歴史資料調査報告書V—』沖縄県教育委員会 1985
 沖縄県文化財調査報告書第77集 『知花遺跡』沖縄県教育委員会 1986
 沖縄県文化財調査報告書第78集 『竹下遺跡』沖縄県教育委員会 1986
 胡屋字誌編集委員会編 『胡屋の今昔写真集』沖縄市字胡屋共有会 1991
 胡屋誌編集委員会編 『胡屋誌』沖縄市胡屋共有会 1994
 古謝誌編集委員会編 『古謝誌』古謝自治会 1999
 美里自治会編 『美里誌』美里自治会 1993
 美里今昔写真集編集委員会編 『美里今昔写真集』美里今昔写真集編集委員会 1993
 上地誌編集委員会編 『上地誌』上地郷友会 2000
 比嘉永昌編 『老友会二十周年記念誌』山内老友会 1984
 高田寄子編 『山内婦人会のあゆみ』沖縄市山内婦人会 1986
 沖縄市諾見里老人クラブ編 『楊梅—沖縄市諾見里老人クラブ 25周年記念—』沖縄市諾見里老人クラブ 1991
 沖縄市諾見里老人クラブ編 『楊梅—沖縄市諾見里老人クラブ 35周年記念—』沖縄市諾見里老人クラブ 2000
 沖縄県中部農業改良普及所 『農業と生活—池原・登川・知花—』沖縄市経済部農林水産課 1983
 沖縄国際大学考古学研究室 『沖国大考古』第2号 1978

文化財一覽

遺跡

桃原洞穴遺跡	32
津島山森遺跡	40
室川貝塚	36
仲宗根貝塚	37
馬上原遺跡	40
八重島貝塚	38
知花遺跡	39
明道遺跡	41
富里川原貝塚	41
八重島茶城原遺物散布地	42
海瀨地先遺物散布地	42
那志原遺跡	43
上地長次原遺跡	43
インジグシク	44
越来グシク	48
知花グシク	50
竹下遺跡	51
興喜世遺跡	52
与儀遺跡	53
与儀御願所遺物散布地	53
比原根遺跡	54
大里エーヤマ遺跡	54
石城原遺跡	55
センター公園内遺物散布地	55
天之岩戸向洞穴遺跡	56
アマダグシク跡	56
知花焼窯跡	60
内喜納登窯	60

池原

アサトガー	74
防空壕	74
ジョーミチャー墓	74
ガンヤー	74
サンスクリットの碑	75
アンピナー	75
木火土金水碑	75
諸人泉	75
妙泉	76
神アサギ	76
シーシャー	76
ビジュル	76
メーヌカーヌイジュン	77
ヌールガー	77

登川

ムートゥガー	77
富之御旗	77
ミーガー	78
印部土手	78
北の四方神	78
西の四方神	78

東の四方神	79
南の四方神	79
神アサギ	79
火ヌ神	79
分村碑	80
ウズミヅムイ	80
スクブ御旗	80

知花

ウガンヌシー	80
ユナガー	81
火の神	81
奉安殿	81
忠魂碑	81
ビジュル	82
ミーヤウタキ	82
カンサジヤー(神アサギ)	82
上ヌ殿毛(イーストヌモー)	82
ウガンジュ	83
鬼大城の墓	83
夏氏大原宗の石碑	83
祝女墓	83
カークラー	84
フクマガー	84
ナーカントーイジュングラー	84
イースカー	84
シチャウジュンガー跡	85
メーヌカーガー橋	85
メーヌカーガー	85
シーシャー	85
アガリカー	86

白川

クシスカー	86
クカー	86
アカイジュマー	86

松本

ソナンウガンジュ	87
クンダガー	87

美里

カフンジャー橋	87
ビジュル	87
イジュンガー	88
印部石	88
ジナンヌシチャヌカー	88
キツチャガー	88
ニーブガー	89
ヒンジャン御旗	89
ヒチャヌウカー	89
ヒージャーガー	89
ヒージャー池跡地	90
シリーモーガー	90
セークガー	90

道路元標	90
メーデーガー	91
地頭代火之神	91
ヌドゥルチャー	91
チンガーアタイ	91
グシクスニー井戸	92
美里グシク	92

越来

尚宣威王の墓	92
トゥンチヌヌバスヒヌカン	92
富原ガー	93
ワクガー	93
西森公園の拝所	93
ヒジュルガー	93
拝領の白樺	94
ターチューガー	94
ヌドゥンチャー	94
御殿川ヌメヌカー	94
ヌドゥンチャー	95
越来グシクの拝所	95

八重島

大工廻の拝所	95
ヤシマガー	95

安慶田

ムトウジマガー	96
安慶田の拝所	96
アガリガー	96

照屋

アガリスウタキ	96
アガリスカー	97

宮里

ビジュル	97
------	----

上地

アシピナー	97
ウフガー	97
イジュングラー	98
ユージャガー	98

胡屋・仲宗根

ムルガー	98
室川井泉	98
照又井	99
あかゆゆ一拝所跡	99
仲宗根ウガン	99
ミーガー	99
石碑	100
シーサー	100
アガリ森	100
フサトガー	100
ナチチガー	101

山内					
イリーガー	101	ウツガー	112	アガリヌシーサー	124
シリンカーヌカー	101	オーグラービジュアル	112	泡瀬	
トウイヌフヌウタキ	101	塩田跡地	113	ビジュアル	124
メーヌカー	102	魚垣	113	ガンヤー	124
マーニヌネカタ	102	高原		ウフシーのシーグラー	125
お宮	102	イースカー	113	ジョーミチャー墓	125
アシビナー	102	トゥヌ	113	ビジュアル	125
メーアガリガー	103	ウブガー	114	メーヌウタキ	125
ナカマチガー	103	シードウーモー	114	ウブガー	126
		エークラガー	114	火之神	126
隼見里		満喜笹殿	114	ミーガー	126
タケーウビジュアル	103	マンジュウガンジュ	115	アガリヌウタキ	126
メーヌカー	103	大里		カーヌモー	127
ヤマガーカー	104	トゥンチャー	115	倉敷	
フサトゥッガー	104	ウサチガー	115	クポーヌウタキ	127
お宮	104	エーガー	115		
メーヌハラガー	104	エーヤマガー	116		
朝元之宮	105	タキグサイ	116		
園田		カンジャーガー	116		
ソングガー	105	地頭火ヌ神	116		
ソージガー	105	ソーリーガー跡	117		
山里		シーシ	117		
ヒヤーナー	105	ヌールガー	117		
シーサー	106	カーウリーガー	117		
		ウマアシビタムイ	118		
与儀		ウサチウガンジュ	118		
ウガン	106	ウガングウヤマ	118		
与儀御願所	106	大里のウブガー	118		
アナガー	106	ヒーゲーシー	119		
アシビナー	107	栗桃源			
上殿	107	アシビナー	119		
アタンジャガー	107	カーミンスクー	119		
トニーヌカー	107	ソーリガー	119		
防空壕跡	108	ソーリガー	120		
トニー	108	古謝			
ヒーケーシー	108	知念大屋久の墓	120		
ウブガー	108	津嘉山森墓碑	120		
石碑	109	ヌヌサラシガー	120		
火の神	109	シーサー	121		
ジトヤー	109	イシビラ	121		
イヌモー	109	ウーチュガー	121		
渡口の屋敷跡	110	ミーガー	121		
クガニチュー	110	アシビナー	122		
ウルグチガー	110	ソーリーガー	122		
比屋根		イーウガン	122		
ウガン	110	カミヤー	122		
トゥングラー	111	ウブガー	123		
シーシャー	111	地頭火之神	123		
ウフドゥン	111	クモコウタキ	123		
アシビナー	111	イリヌシーサー	123		
拝所	112	メーヤードゥイカー	124		
ジョーヌスバ	112				

沖 縄 市 の 遺 跡

—第2次分布調査報告書—

沖縄市文化財調査報告書第28集

2002年3月29日 発行

発行 沖縄市教育委員会
沖縄県沖縄市仲宗根町26-1
編集 沖縄市立郷土博物館
沖縄県沖縄市上地235-3
印刷 文進印刷株式会社

